

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 8

June 2015

- | | | | |
|----|---|------------|--------------------|
| 特集 | 1 | 新・生き続ける建築 | 妻木頼黄 |
| | 2 | 建築ソリューション | 国際文化会館 |
| | 3 | まちづくりの今を見る | 子育て世帯を呼び込みまちを元気にする |



風景をデザインする 国内編

地域の誇りを呼び戻す駅前空間

秋田県 秋田市

南雲勝志

Katsushi Nagumo

地方都市における駅前の衰退が顕著になって久しい。地方の時代と言われながら長い間、中央集権に慣れてきた感覚が、そもそもその地のアイデンティティを発信しようという意識さえ忘れ去られてしまったようにも感じる。まさに今こそ地域の力を発揮すべき時で、よそとの比較ではない、「我々はこれでいい」という自負が根底に必要なのだ。地域の資産、素材を活かした先行事例をつくることがデザインの目標であった。

日本は杉の国、国土の人工林の45%を占めている。いずれも先人たちが汗水流しながら育てた、まさに財産である。その中でも秋田杉は厳しい気候に生まれ、美しさと強度を兼ね備えた、紛れもなく世界に誇れる資産である。しかし戦後外材に押され、その魅力がまち中や人目に触れる場所から消えていった。

駅前のバスターミナルは誰もが目にできる公共施設である。それを秋田杉の魅力を再認識するデザインにすることで、風景となり、分かりやすく秋田らしさを再認識し、誇りを喚起するきっかけにつながっていく。そのために厳しい自然環境から凛として人々を守るシェルターとしての機能を持つこと。それはあたかも雁木のように素材で無駄のない構造であるべきであると考えた。

また駅から旅立つ人、訪れる人々を優しく見守る施設のシンボルとして存在するよう、「あかり」をもう一つの素材の要素として組み合わせた。

プロジェクト概要

名称：秋田駅西口バスターミナル
 所在地：秋田県秋田市中通2-7
 主要用途：バス待合所
 発注者：秋田中央交通
 ディレクター：菅原香織
 デザイナー：ナグモデザイン事務所
 デザインマネジメント：小野寺康都市設計事務所
 実施設計：WAO渡邊篤志建築設計事務所
 設計監理：間建築研究所
 構造：木造
 木材使用量：秋田杉98m³
 敷地面積：6,112.55m²
 建築面積：277.83m²
 事業費：約1.8億円
 工期：2013.5-10

なくも・かつし——プロダクトデザイナー／1956年生まれ。1979年、東京造形大学卒業後、永原浄デザイン研究所を経て、1987年、ナグモデザイン事務所設立。2004年、「日本全国スギタラケ倶楽部」を設立し、木の文化を広げる活動を全国で展開。

主な作品：日南市駅前交流広場及び周辺空間[2009]、行幸通り[2010]、姫路駅北広場及び大手前通り[2013]、南魚沼市図書館[2014]、西鉄柳川駅東西駅前広場[2014]など。



左・右上—秋田杉の美しい木目のバスターミナルがLEDの温かな光と共に夜景に浮かび上がる | 右下—本格的な木構造が力強い[写真3点とも：シブヤスタジオ]

CONTENTS

表紙写真：
国際文化会館
[撮影：フォワードストローク]

次号「LIXIL eye」no.9は、
2015年10月発行予定です。

「LIXIL eye」はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

- 02 [風景をデザインする 国内編]
地域の誇りを呼び戻す駅前空間 —— 南雲勝志

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 8**
妻木頼黄

- 04 [本論] 建築家が背負った明治 —— 青木祐介
08 [作品] 旧醸造試験所第一工場 (現・赤レンガ酒造工場)
旧横浜正金銀行本店本館 (現・神奈川県立歴史博物館)
横浜税関新港埠頭倉庫 (現・横浜赤レンガ倉庫)
14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション | 保存・再生・継承へ | — 8**
国際文化会館

- 22 [序論] 国際文化会館の保存と再生 —— 小林正美
24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
“再生して保存する”手法で、時代の変容を受け入れた国際文化会館。
—— 橋本 功 | 鱒坂 徹 | 古谷誠章
37 [鼎談後記] 融通無碍なる改修が、場所の記憶を未来につなぐ —— 古谷誠章

- 38 [ARTIST at HOME] — 8
彫刻家・上田快さんと上田垂矢子さんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 8**
子育て世帯を取り込みまちを元気にする

- 44 [論考1] 国・企業・地域で支え合う、これからの子育て環境
—— 「子ども・子育て支援新制度」が目指すもの —— 森田明美
46 [論考2] 地域で子どもが育つための居場所をつくる —— 定行まり子
48 [事例1] 「DEWKS」に焦点を当て、まちのブランド力を高める —— 子育てを応援する「都心から一番近い森のまち」
52 [事例2] 中高生の居場所をつくり、活動を支援する —— 人々の交流と地域の魅力を生み出す公共施設
54 [事例3] 多世代で活用できるまちの拠点 —— 公民連携で生まれた市民活動の核施設

- 58 [素材を語る]
ガラスブロックを構造に使う —— 山下保博
60 [TOPICS]
東日本大震災復興支援活動「女川温泉ゆぼっぼ タイルアートプロジェクト」 —— 後藤泰男

- 64 [INFORMATION]
建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL 出版 新刊案内

- 68 [新・建築家の往復書簡] — 8
ルーブル・ランスは土地と建築の有機的関係を目指した —— 長谷川逸子 | 西沢立衛

LIXIL eye no.8
2015年6月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：野口恭平
LIXIL ジャパンカンパニー
マーケティング部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3743
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきます

特集 1 新・生き続ける建築― 8

妻木頼黄

Yorinaka Tsumaki

明治初期から中期にかけて、日本の近代国家の体制を諸外国に示すべく、官庁集中計画が打ち出された。その計画を主導するため来日したドイツ人建築家、エンデ&ベックマンのもとで妻木頼黄は修業を積んだ。ジョサイア・コンドルの影響を受け、イギリス系の建築が主流だった時代に、妻木は国会議事堂を中心とした官庁集中計画のため渡独し、ドイツ系の建築技術を体得。その経験は彼の作風に多大な影響を及ぼし、以後、重厚なドイツ系の建築を得意とした。

政治的な事情から官庁集中計画は縮小され、事業は内務省に引き継がれた。妻木はその後大蔵省に転じ、そこで類いまれなる力を発揮した。官庁営繕の長として組織を束ね、特に塩・タバコの専売にかかわる施設や税関施設の設計では、各地の技師たちのトップに立って、その建設にあたった。

折に触れ、アカデミー派の辰野金吾と対立することが多かったが、辰野が妻木に寄せた追悼文では、「清廉潔白な人であった。その清廉潔白なる行為が建築界に大いなる好影響を及ぼした。そして、部下を統御するのに秀でた人であった」と讃えた。今号は、官庁営繕に身を投じ、官僚建築家の本流を歩んだ妻木頼黄の半生を探る。



【出典：『建築世界』1916.11】

特集 1 [本論]

建築家が背負った明治

青木祐介
Yusuke Aoki

ひもとかれる妻木家資料

平成26年[2014]4月、日本建築学会建築博物館で「妻木頼黄の都市と建築」展が開催された。新たに妻木家から日本建築学会に寄贈された資料の披露を兼ねて、同会図書館が所蔵する妻木文庫などと合わせて貴重な資料群が紹介され、改めて建築家・妻木頼黄の業績を振り返る機会となった[1]。

妻木については、すでに充実した研究の蓄積がある。初期の建築家研究の集大成と言える『日本の建築 明治大正昭和』のシリーズでは、長谷川堯が詳細な妻木頼黄論を著しており[2]、博物館明治村での展覧会「明治建築をつくった人々 その四 妻木頼黄と臨時建築局―国会議事堂への系譜」でも、上記の妻木家資料を始め多彩な資料をもとに、生涯にわたる妻木の活動が紹介されている[3]。

近年では、神奈川県立歴史博物館で開催された特別展「横浜正金銀行―世界三大為替銀行への道」で同資料が活用され、横浜正金銀行本店[1904]の設計者である妻木についても、建築技術を含めた踏み込んだ紹介がされている[4]。

そしてこのたび、横浜開港資料館による資料の再整理と目録作成を経て、妻木家資料が日本建

築学会に寄贈された。展覧会の関連出版物に資料目録が掲載されたことで、より多くの研究者にこの資料群の存在が知られるようになったことを歓迎したい。

巨頭と呼ばれた建築家

「明治建築界の巨頭」。常にこの枕詞と共に紹介される妻木頼黄は、安政6年[1859]、江戸赤坂に生まれている[5]。長谷川堯が「隠れ江戸人」と評したように、妻木もまた他の第一世代の建築家たちと同じく、江戸末期から明治初期にかけての時代の変革を肌身に感じながら、幼少期を過ごした一人であった。

同じく明治建築界の巨頭とされる辰野金吾[6]とは異なり、妻木は明治11年[1878]に工部大学校へ入学するものの中退、アメリカに渡ってコーネル大学で建築学を学ぶ。この渡米以前にも、妻木は明治9年[1876]から1年間ニューヨークに遊学しており、その時に知己を得た相馬永胤や目賀田種太郎との関係が、長きにわたり彼を支えることになる。妻木の代表作とされる横浜正金銀行本店の設計を依頼したのは、当時同行の頭取を務めていた相馬であったし、大蔵省の技師としてキャリアを積み重ねていく背景には、常に同省主税局長だった目賀田の存在があった。

明治18年[1885]、妻木はアメリカから帰国するも、その翌年には、官庁集中計画のために内閣に組織された臨時建築局の技師となり、渡辺讓・河合浩蔵と共に職工17名を連れて、ドイツへ留学する。ドイツでは、ベルリンのエンデ&ベックマン事務所で議院建築の設計に携わるものの、外務大臣・井上馨の失脚と共に官庁集中計画は未完に終わり、妻木らの留学は打ち切られる。

明治21年[1888]の帰国後、内務省に所管が移っていた臨時建築局で、妻木は渡辺から裁判所の仕事を引き継ぐ(東京裁判所[1896])が、この時期から妻木の官僚建築家としてのキャリアが始まる。中央に塔を建てた官庁スタイルの東京府庁舎[1894]、着工からわずか2週間で完成させた広島仮議院[1894]、模範監獄として知られる巢鴨監獄[1895]などが知られているが、ここではあまり紹介される機会の少ない横浜税関監視部庁舎[1894]を挙げておこう。若き日の長野宇平治[7]が現場監督を担当した端正な古典主義の煉瓦造建築である。横浜税関と妻木とのかかわりは長く、後に横浜税関拡張工事で建設された建築群のうち、2棟の煉瓦造倉庫[1911、1913]が横浜赤レンガ倉庫として現存している[8]。

明治30年代からが、妻木の官僚建築家としてのキャリアの全盛期と言える。妻木の活躍する舞台は大蔵省へと移り、臨時葉煙草取扱所建築部(後、明治37年に臨時煙草製造準備局建築部)時代には、全国に葉煙草の専売所や製造所を建設したほか、明治33年[1900]には臨時税関工事部建築課長に就任する。翌34年には大蔵省総務局の営繕課長、同36年に同省大臣官房営繕課長、そして同38年には同省臨時建築部長となり、妻木は官庁営繕のトップへと上り詰めていった。同35年には、農商務省の関連施設として醸造試験所の設計監督にもあたっている。学会を組織し、在野の立場を貫いた辰野金吾、宮内庁技師として宮廷建築に才を発揮した片山東熊とは異なり、妻木は多くの建築技師たちを従えた官庁営繕組織のトップとして、明治という時代を担った。

妻木頼黄が遺した明治建築

横浜正金銀行本店が妻木頼黄設計の建築としてのみならず、明治時代を代表する建築であることは誰も認めるところであろう。半官半民の銀行として明治12年[1879]に開業した横浜正金銀行の新築設計を妻木に依頼したのは、渡米時代から交友が続いていた相馬永胤であったが、この建物には、国家を背負った建築家としての妻木の力量が見事に反映されている。

最も目を引くドームは戦後の復元ではあるものの、彼ら第一世代の建築家が身体で覚えたヨーロッパの古典主義建築の細部とプロポーションが最大限の効果をもって表現されている。ドイツに留学した経験からドイツ派と称されることが多い妻木であるが、なぜかこの建物もそれに引きずられて“ドイツ・ルネサンス様式”と言われてきた。しかし、主要階を貫く大オーダーの付け柱、ペアコラムで支えられた巨大なペディメント、正面を視覚的に強調するドームの存在からも



コーネル大学卒業証書

工部大学校造家学科で学んでいた妻木は、卒業2年前の1882年に中退し、ニューヨーク州にあるコーネル大学建築学科に編入、2年後の1884年に卒業し、学士号を取得した[所蔵：日本建築学会建築博物館、提供：神奈川県立歴史博物館]



ドイツ派遣を命ずる辞令

アメリカから帰国した妻木は東京府技師として勤め始めたが、半年にも満たないうちに、内閣直属の臨時建築局の四等技師として引き抜かれ、官庁集中計画のメンバーの一員としてドイツへの留学が命じられた[所蔵：日本建築学会建築博物館、提供：神奈川県立歴史博物館]



横浜税関監視部庁舎[1894]

同年竣工の鉄棧橋(現在の大さん橋国際客船ターミナルの場所)の入り口に建てられた煉瓦造2階建ての庁舎。監督は若き日の長野宇平治[絵葉書[明治後期]、所蔵：横浜市中央図書館]

[5] 以下、妻木の経歴に関する部分は上記の先行研究を参照した

[6] 『LIXIL eye』no.5.2014.6、p04-参照

[7] 『LIXIL eye』no.7.2015.2、p04-参照

[8] 現在の赤レンガパークが見晴らしの良い港湾緑地であるためか、2棟の煉瓦造倉庫を「海からの眺めを考慮して設計された」と解説したものもあるが、竣工当時、煉瓦造倉庫は10棟以上もの鉄骨造上屋に取り囲まれており、とてもではないが海から見える状況にはない。現代のウォーターフロント開発と当時の港湾設備の拡張は、決して同一に語れるものではない



横浜正金銀行本店第一営業室〔1904〕

1階の中央を占めていたメインの営業室。壁の腰目石およびカウンター下には秩父産の蛇紋岩が、カウンターには信州産の花崗岩が用いられていた。天井は2重のトブライトになっており、ステンドグラスを通して柔らかな光が入るようになっていた〔出典：『横浜正金銀行建築要覧』〕



横浜正金銀行本店の内壁部における碇繋鉄構法

改修事に際して撮影された。煉瓦壁から水平に延びる帯鉄と、それを垂直に貫く鉄筋の様子が分かる〔写真：吉武創作、提供：神奈川県立歴史博物館〕



日本勧業銀行本店〔1899〕

日比谷通りに竣工。3度の移築を経て、千葉トヨベント本社の社屋として現存。現在はRC造に改築されているが、両ウイングを持つ平面構成に和風屋根を載せ、正面に千鳥破風と唐破風を重ねる当初の建物の特異性は継承されている〔出典：『明治大正建築写真聚覧』〔日本建築学会／1936〕〕

日本勧業銀行本店（現・丸の内線丸の内駅）（前掲）

- 〔9〕 この点についてははっきりと「ドイツ・ルネサンス」を否定した論考として、吉田銅市「旧横浜正金銀行本店建築の建築史的位位置」『横浜正金銀行―世界三大為替銀行への道』（前掲）
- 〔10〕 この時に贈与されたメダル(妻木家資料)については、中島智章「リエージュ博覧会と妻木頼黄」『妻木頼黄の都市と建築』（前掲）
- 〔11〕 『横浜正金銀行建築要覧』〔横浜正金銀行／1904〕
- 〔12〕 東京裁判所については、長谷川堯が解体時に確認しており（『日本の建築 明治大正昭和4 議事堂への系譜』（前掲））、東京商業会議所もやはり解体時に村松貞次郎が確認し、村松の著『日本近代建築技術史』〔彰国社／1976〕に構法の詳細がよく分かる写真が掲載されている
- 〔13〕 『INAX REPORT』No.169.2007.1、p04– 参照
- 〔14〕 『妻木博士に対する諸家の追憶』『建築雑誌』1915.12より曾禰達蔵の言葉
- 〔15〕 山崎幹泰「東大寺大仏殿明治修理における設計案の変遷について」『日本建築学会計画系論文集』2000.9
- 〔16〕 『妻木博士に対する諸家の追憶』（前掲）より辰野金吾の言葉

明らかのように、19世紀のネオ・バロック様式と呼ぶにふさわしい偉観である〔9〕。西洋建築を一から学んで身に付けた第一世代の建築家たちの到達点にふさわしい建築と言えよう。実際、竣工の翌年、明治38年〔1905〕にベルギーのリエージュで開催された万国博覧会には、この横浜正金銀行本店の「設計図案」が出品され、名誉賞を受賞している〔10〕。

そして同時代への影響として見逃せないのが、外観からはうかがうことができない“碇繋鉄構法”と呼ばれる耐震技術である。地震国日本で、組積造の煉瓦建築に耐震性を持たせる必要があることは早くから指摘されており、第一世代の師であるジョサイア・コンドルの時代からさまざまな提案が試みられていた。かたや辰野金吾が鉄骨煉瓦造を採用し続けたのに対し、妻木は煉瓦壁の内側に水平方向の帯鉄と垂直方向の鉄筋を入れ込んで、「恰も鳥籠ノ如キ」〔11〕堅牢な構造を実現した。

この耐震技術は、現存する横浜赤レンガ倉庫の他にも、解体された東京裁判所や東京商業会議所〔1899〕など早い段階から採用されていたことが判明しており〔12〕、建築様式というデザイン上のアイデンティティに加え、妻木の構法上のアイデンティティとも言えるものであった。

伝統との対峙

第一世代の建築家たちが背負ったものは、決して国家を飾る建築だけではなかった。日本の古建築の存在もそのひとつである。イギリスに留学した辰野金吾が、日本の古建築について尋ねられても説明することができず、帰国後、帝国大学に日本建築の講座を開設した話は有名だが、昭和に入ると、モダニズムのフィルターを通して新たな解釈を生むことになる日本の古建築も、明治の建築家たちにとっては、洋風建築と同じく、自己の中での咀嚼を必要とする存在であったはずである。

和風デザインを採用した例では、若き武田五一〔13〕が図面を引いた日本勧業銀行本店〔1899〕が知られているが、両ウイングを突き出すという洋風建築そのものの平面構成に加えて、唐破風も含めて屋根はすべてスレート葺きという斬新さが、当時の建築家たちをして「洋風のみに染みたる頭脳からして本建築に対して奇異怪異の念が起って不快に感じ」〔14〕させた。この言葉は決して、和風デザインに虚を突かれたというニュアンスではなかろう。さらに妻木頼黄郎〔1909〕から日本橋〔1911〕に至るまで継承される和洋折衷の傾向について、長谷川堯は「隠れ江戸人」としての妻木頼黄の内なるデザインの衝動を指摘している。しかし、妻木のキャリアを顧みれば、日本の古建築が単なるデザインソースではなかったことは明らかである。

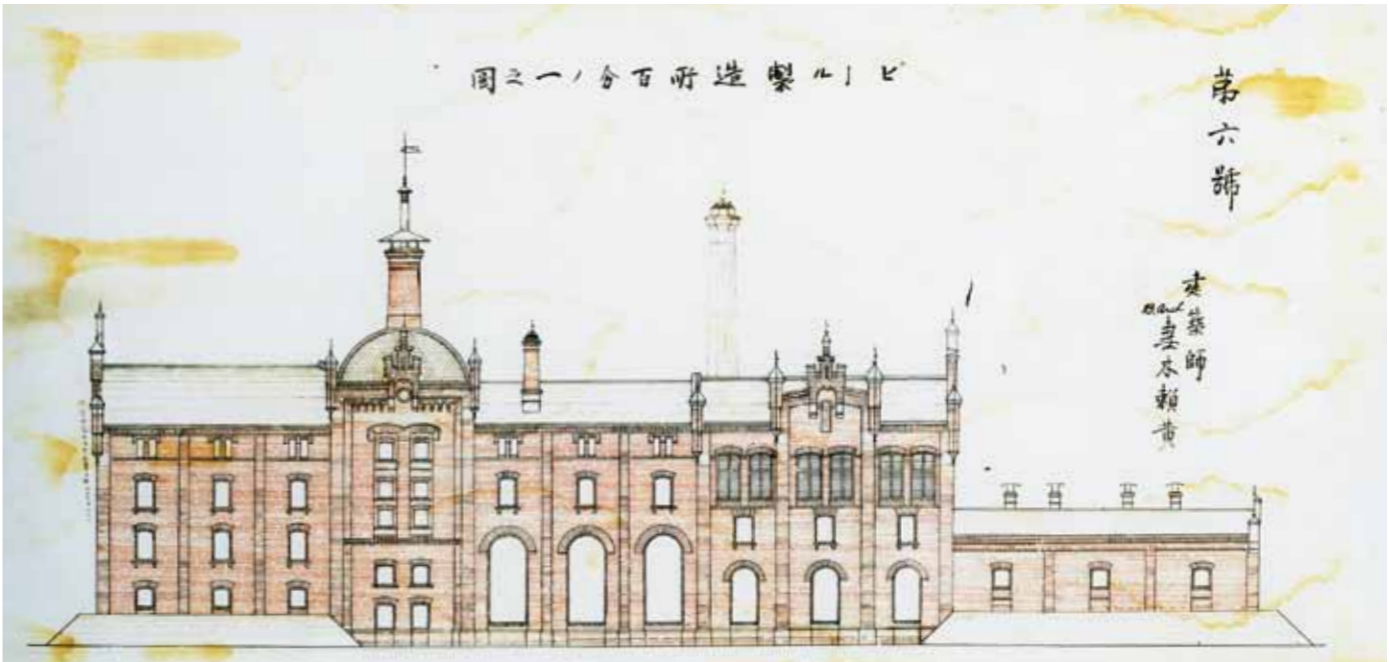
キャリアの注目点として指摘されることは少ないが、妻木は明治30年〔1897〕に古社寺保存法（現在の文化財保護法の前身）が成立する前年、内務省に設置された古社寺保存会の委員を委嘱されている。妻木は委員になる以前から技師として奈良への出張を命じられており、東大寺大仏殿の明治大修理に際しては、最初に派遣された明治24年〔1891〕から、名誉顧問に退いて修理工事を見届ける大正2年〔1913〕まで、長期にわたって関与している〔15〕。この修理で、妻木のアドバイスに基づき、大仏殿の小屋組に鉄骨トラスが入れられるのであるが、鉄骨という新たな近代の建設材料で古建築を補強するという発想に、第一世代の建築家としての伝統への対峙のありようがうかがえる。また、長野宇平治や関野貞という後進たちを差配して奈良に派遣することで、奈良の古社寺修理の先鞭が付けられていったことも、妻木の果たした役割のひとつとして指摘しておきたい。

継承される技術と人脈

妻木頼黄の人物評について、同世代の建築家たちのコメントに共通しているのは、その人脈の広がりと彼への信頼の強さである。

あれだけ妻木と張り合っていた辰野金吾でさえも、妻木の人望については、「部下を統御するの材(筆者注：オカ)に秀でた人でした、(中略)夫等の人達から敬慕される事は亦一通りではなかった、此の点に就ては吾々の連中で一等であった」〔16〕と賞賛を惜しんでいない。もっとも業績については、工手学校の会計主任だったことしか挙げていないのではあるが。

内務省・大蔵省という官庁宮繕を上り詰めた建築家だけあって、その配下と呼ばれる建築家た



横浜正金銀行本店（現・丸の内線丸の内駅）（前掲）

ちは当然多い。俗に妻木四天王と呼ばれる川口直助・鎗田作造・沼尻政太郎・小林金平の名前もよく挙げられるが、官庁宮繕とは別の文脈から、ここでは建築家・遠藤於菟を紹介しておきたい。

鉄筋コンクリート構造の先駆者として、特に日本で最初の全鉄筋コンクリートオフィスである三井物産横浜支店（現・KN日本大通りビル）〔1911〕の設計者として、建築技術史に名前を残している遠藤であるが、若き日の遠藤が現場監督を務めたのが、妻木の代表作である横浜正金銀行本店であった。

遠藤の独立後第1作である横浜銀行集会所〔1905〕では、煉瓦造をベースに部分的に鉄筋コンクリートを導入し、最終的に三井物産横浜支店の全鉄筋コンクリート構造へと至るわけだが、遠藤が手掛けた煉瓦造建築の多くには、妻木譲りの碇繋鉄構法が採用されている。その耐震技術を最初に学んだ現場が、横浜正金銀行本店であったことは想像に難くない。

碇繋鉄構法の広がりは、何も遠藤だけの話ではない。例えば横浜では、上述の横浜赤レンガ倉庫を始め、横浜市庁舎〔1911〕、第二代横浜駅〔1915〕、開港記念横浜会館（現・横浜市開港記念会館）〔1917〕など、設計者は違えども多くの煉瓦造建築で碇繋鉄構法、もしくはそれに近い技術が採用されており、これらはすべて関東大震災の激震に耐え、倒壊しなかったのである。

建築家を語る時、私たちはその作家性を抽出することに注力しがちである。しかし、建築家の職能さえ確立されていなかった明治時代に、国家と時代を背負った妻木が遺したものは、作家性以前に、様式・材料・技術などを含めた総体としての建築の在り方ではなかっただろうか。「私の仕事は高いですよ、併しまア何んなものか遣らして御覧なさい」〔17〕。妻木の厳しい現場主義を語ったこの言葉には、建築が自由な造形表現として解放される大正時代の建築家たちと、明治の第一世代の建築家たちを隔てる決定的な違いが込められているように思われる。

丸三麦酒株式会社醸造工場（現・半田赤レンガ建物）〔1898〕（前掲）



あおき・ゆうすけ——横浜都市発展記念館主任調査研究員・博士(工学)／1972年生まれ。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻単位取得退学。2001年より現職。日本近代建築史専攻。主な論文：「歴史遺産の活用と復元―横浜を事例として」〔文化遺産と現代〕〔土生田純之編、同成社／2009〕、「幕末・明治初期の横浜」〔伝統都市1 イデア〕〔吉田伸之・伊藤毅編、東京大学出版会／2010〕、「建築家デ・ラランデと横浜」〔横浜都市発展記念館紀要 No.7〕〔横浜都市発展記念館／2011〕など。

大阪麦酒株式会社吹田村醸造所 実施設計図〔1890年頃〕
大のビール党であった妻木が手掛けたビール工場は多い。「アサヒビール」で知られる大阪麦酒株式会社の吹田村醸造所〔1890〕では、ドイツのゲルマニア社から取り寄せた基本設計図を参考に妻木が実施設計図を作成した〔所蔵：アサヒグループホールディングス株式会社〕

吹田村醸造所（現・アサヒビール吹田工場）（前掲）

丸三麦酒株式会社醸造工場（現・半田赤レンガ建物）〔1898〕（前掲）



修理工事中の東大寺大仏殿

東大寺では古社寺保存法の成立以前から、荒廃した大仏殿の修理に向けて寄付金を募るなどの活動を行っており、1891年の濃尾地震をきっかけに内務省に働き掛け、当時内務技師であった妻木が奈良へ派遣された〔出典：『大仏及大仏殿史』〔鷲尾隆慶・平岡明海編、細谷真美館／1915〕〕

丸三麦酒株式会社醸造工場（現・半田赤レンガ建物）〔1898〕（前掲）



丸三麦酒株式会社醸造工場（現・半田赤レンガ建物）〔1898〕
「カフトビール」で知られる丸三麦酒株式会社の工場として竣工。妻木建築には珍しいハーフティンバー構造の棟を持つ。2015年7月から一般公開される予定〔提供：半田市〕

〔17〕 『妻木博士に対する諸家の追憶』（前掲）より大蔵省宮繕で妻木の下にいた矢橋賢吉の言葉

旧醸造試験所第一工場 (現・赤レンガ酒造工場)

竣工年：1904年
所在地：東京都北区滝野川2-6-30
構造・規模：煉瓦造3階建、地下1階、一部平屋建
【重要文化財】



- 1 廊下
工場の入り口から廊下を見通す。天井部分は煉瓦をアーチ状に組んで2階の床と一体化させた防火床構造となっている
- 2 旧麹室
湿気による劣化防止のため、白釉煉瓦を全面に張ったヴォールト天井の空間。ただし、水分の調整が効かず麹室としては使用されなくなった
- 3 階段室
建物中央の前面に小さく突き出ているのが階段室で、写真は2階から3階へ上がる部分の木製階段。階段室に隣接して当時の貨物用エレベータも現存している
- 4 北面全景
特に車寄せなどで強調された玄関があるわけではなく、工場の入り口は中央階段室の右側にある。切妻屋根が連なる左側には発酵室が、平屋部分の右側には麹室や原料処理室、蒸米放冷室などが配置されていた。今も現代の機械を用いて醸造を行っている現役の施設である



旧横浜正金銀行本店本館 (現・神奈川県立歴史博物館)

竣工年：1904年
所在地：神奈川県横浜市中区南仲通5-60
構造・規模：煉瓦及び石造3階建、地下1階
【重要文化財】



- 1 西面ファサード
ルスティカ積みみの基部、コリント式の大オーダーを配した主階部、そしてコーニスを廻(めぐ)らせた頂部と、古典主義の構成に則った外壁面。窓まわりの構成も各階ごとに異なり、多彩な細部がもたらす陰影は明治建築ならではのもの
- 2 当時の煉瓦壁
外壁は石積みながら躯体は煉瓦で出来ており、現在も常設展示室の一面に、煉瓦壁の見える部分がある(通常非公開)
- 3 旧保護預金庫扉
1923年の関東大震災でも焼失を免れた地下の金庫扉。1895年の第4回内国勧業博覧会で「進歩二等賞」を受賞した竹内金庫店の製造によるもの(通常非公開)
- 4 正面全景
西洋建築様式の習熟にまい進した明治建築のひとつの到達点と言える外観。玄関が設けられた隅部では、下部にフルーティングを施した2本の付け柱がペディメントを支え、巨大なドームがバロック的な壮大さを強調する。ただし、ドームは関東大震災の時に一度焼失しており、現在のものは1967年、神奈川県立博物館(当時の名称)の開館に合わせて古写真から復元された



横浜税関新港埠頭倉庫 (現・横浜赤レンガ倉庫)

竣工年：1号倉庫：1913年、2号倉庫：1911年
所在地：神奈川県横浜市中区新港1-1
構造・規模：1号倉庫：煉瓦造3階建、2号倉庫：煉瓦造3階建
【横浜市認定歴史的建造物】



- 1 2号倉庫バルコニー
バルコニーの天井は、波形鉄板の上に煉瓦屑入りのコンクリートを打った防火床構造となっている。上階の床と下階の天井を一体化した防火床構造は、妻木の建築にさまざまなかたちで用いられた
- 2 2号倉庫防火戸
全長約150mにおよぶ2号倉庫の内部は、特徴的なデザインの吊り車で下げられた防火扉によって区画されている
- 3 1号倉庫階段室
階段の中央には幅約1,500mmの鋼板スロープが設けられ、このスロープを利用して倉庫内の貨物の搬出入が行われた
- 4 1号倉庫・2号倉庫外観
関東大震災で、右側の1号倉庫は半壊してしまったため、その後の修復で半分に縮小された。かつては東横浜駅(現・桜木町駅前広場)を経由して入ってきた貨物列車が倉庫に横付けされ、プラットホームから荷下ろしされた。左側の2号倉庫手前の石畳みには、今も当時のレールが残っている



略歴 Biography

安政6年[1859]	1月21日、江戸赤坂に妻木源三郎頼功の長男として生まれる	勤務	月21日、大蔵省総務局官繕課長。建築学会評議員(明治35年)
明治9年[1876]	3月10日、渡米。富田鉄之助、目賀田種太郎、相馬永胤、神鞭知常、朝比奈一と親交を結び、生涯の友となる	明治26年[1893]	4月25日、議院建築に関する意見書を井上馨へ提出
明治10年[1877]	帰国。朝比奈一の長女・みなと結婚	明治27年[1894]	2月、工手学校建築工事委員。5月7日、古社寺保存会委員。10月27日、臨時葉煙草取扱所建築部技師兼内務技師。10月29日、臨時葉煙草取扱所建築部技師建築掛長
明治11年[1878]	5月、工部大学校造家学科に入学	明治29年[1896]	2月、工手学校建築工事委員。5月7日、古社寺保存会委員。10月27日、臨時葉煙草取扱所建築部技師兼内務技師。10月29日、臨時葉煙草取扱所建築部技師建築掛長
明治15年[1882]	7月、アメリカ留学のため工部大学校を中退。8月、渡米。ニューヨーク州イサカのコーネル大学建築学科3年に編入	明治30年[1897]	4月、議院建築計画調査委員会委員。7月、造家学会評議員兼幹事(明治32年)。10月2日、大蔵技師を兼任。12月、工手学校管理委員
明治17年[1884]	5月、コーネル大学建築学科を卒業。卒業論文のテーマは「A Thesis on the Growth of Japanese Architecture」	明治31年[1898]	10月21日、建築学会事務所設置委員会委員長(明治44年)。10月、専売局官制制定、本官専任大蔵技師を免じられる。12月9日、臨時葉煙草取扱所建築部技師兼大蔵技師兼内務技師
明治18年[1885]	9月、帰国。11月17日、東京府御用掛・準判任官。東京府土木課勤務	明治32年[1899]	3月、臨時葉煙草取扱所建築部閉鎖。3月31日、大蔵技師兼内務技師、叙高等官三等。4月5日、大蔵省官房第四課勤務。4月25日、議院建築調査会主査調査委員。5月、臨時税関工事部官制
明治19年[1886]	2月、内閣に臨時建築局が新設され、5月3日、臨時建築局四等技師。11月16日、議事堂その他の建設の研修のため、ドイツへ出発	明治33年[1900]	建築学会評議員兼主計。2月22日、臨時税関工事部技師を兼任。臨時税関工事部建築課長。5月20日、大蔵省総務局勤務。7月6日、工手学校理事兼会計主任、建築科教務主理
明治20年[1887]	この秋、ベルリン・シャルロッテンブルグ工科大学建築学部へ入学	明治34年[1901]	8月8日、工学博士の学位を受ける。11
明治21年[1888]	10月、帰国。11月12日、大審院、東京控訴院、東京地方裁判所新宮工事建築主任		月21日、大蔵省総務局官繕課長。建築学会評議員(明治35年)
明治22年[1889]	4月17日、市区改正設計取調嘱託。6月、造家学会理事(明治26年)		4月16日、大仏殿修理名誉顧問嘱託。12月7日、大蔵省大臣官房官繕課長。12月16日、建築学会評議員兼主計
明治23年[1890]	3月26日、内閣臨時建築局廃止。臨時建築局三等技師。内務省土木課へ。7月16日、内務三等技師。内務省土木局		4月14日、臨時煙草製造準備局技師兼臨時税関工事部技師兼内務技師。大蔵技師を兼任、臨時煙草製造局建築部長。10月、建築学会建築語彙編集委員(明治38年1月)。11月、建築学会法人設立者の一人となる
			建築学会副会長(明治43年)。10月1日、大蔵省臨時建築部設置。大蔵省臨時建築部技師兼内務技師。大蔵技師を兼任、臨時税関工事部技師。大蔵省臨時建築部長、大臣官房官繕課長。10月9日、臨時税関工事部建築課長
			5月12日、港湾調査会委員。6月18日、臨時横浜港設備委員
			5月7日、臨時神戸港設備委員。6月29日、港湾調査会臨時委員
			5月27日、議院建築準備委員会委員
			5月6日、大蔵省臨時建築部技術に関する顧問嘱託。6月13日、大蔵省臨時建築部が廃止され、7月29日、大臣官房臨時建築課顧問嘱託
			10月10日、逝去(57歳)。正四位勲二等瑞宝章叙勲

主な作品 Works

●印は現存

明治22年[1889]	三條侯爵邸(東京)	明治37年[1904]	●醸造試験所(現・赤レンガ酒造工場)(東京)【重要文化財】	日本橋装飾(東京)【重要文化財】
明治23年[1890]	大阪麦酒株式会社吹田村醸造所(大阪)		●横浜正金銀行本店(現・神奈川県立歴史博物館)(神奈川)【重要文化財】	専修記念講堂及相馬田尻記念書庫(東京)
明治25年[1892]	音羽護国寺三條内大臣石碑(東京)		●横浜火災運轉保険会社東京支店(東京)	十五銀行日本橋支店(東京)
明治27年[1894]	東京府庁舎(東京)		●横浜正金銀行倶楽部(神奈川)	●横浜税関新港埠頭2号倉庫(現・横浜赤レンガ2号倉庫)(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】
	横浜税関監視部庁舎(神奈川)	明治38年[1905]	●山煙草製造所(福島)	●横浜税関新港埠頭1号倉庫(現・横浜赤レンガ1号倉庫)(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】
	広島仮議院(広島)	明治39年[1906]	●井伊直弼銅像台座(神奈川)	福岡県庁舎本館(福岡)
	両院臨時修繕工事(東京)	明治40年[1907]	●相馬永胤邸(東京)→カトリック横浜司教館として移築保存(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】	徳川侯爵邸(不明)
明治28年[1895]	巢鴨監獄(東京)	明治41年[1908]	●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	山口県庁舎及県会議事堂(山口)
	両院議場修繕工事(東京)	明治42年[1909]	●日本勲業銀行本店(東京)→千葉トヨベツト本社として移築保存(千葉)【国登録文化財】	横浜税関海陸連絡設備(神奈川)
	横濱税関(神奈川)	明治43年[1910]	●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	丁酉銀行本店(東京)
明治29年[1896]	東京裁判所(東京)		●井伊直弼銅像台座(神奈川)	
明治30年[1897]	日本麦酒株式会社製麦場(東京)	明治44年[1911]	●相馬永胤邸(東京)→カトリック横浜司教館として移築保存(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】	
明治31年[1898]	専売公社太田葉煙草事務所倉庫(茨城)		●井伊直弼銅像台座(神奈川)	
	富士紡績株式会社小山工場(静岡)		●相馬永胤邸(東京)→カトリック横浜司教館として移築保存(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】	
	●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)		●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	
明治32年[1899]	●日本勲業銀行本店(東京)→千葉トヨベツト本社として移築保存(千葉)【国登録文化財】		●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	
	東京商業会議所(東京)		●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	
	横浜火災運送保険会社本店(神奈川)		●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	
明治34年[1901]	造幣局東京支局(東京)		●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	
明治36年[1903]	日本興業銀行本店(東京)		●丸三麦酒株式会社醸造工場(現・半田赤レンガ建物)(愛知)	

※この頁は、「日本の建築 明治大正昭和4 議事堂への系譜」長谷川堯著[三省堂/1981]、「明治建築をつくった人々 その四 妻木頼黄と臨時建築局一国会議事堂への系譜」[博物館明治村編、名古屋鉄道/1990]をもとに、筆者と編集室が制作したものです。ただし、妻木が直接設計にかかわらず指導にあたったと思われるものも含めています

取材協力：神奈川県立歴史博物館／酒類総合研究所 東京事務所／横浜赤レンガ倉庫
おことわり：08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

国際文化会館

国際文化会館は1952年、日本とアメリカ、その他諸国の人々の知的交流と相互理解を目的に設立された。場所は戦後まもなく国から払い下げを受けた港区鳥居坂の旧岩崎小彌太郎邸。設計は気鋭の建築家、前川國男、坂倉準三、吉村順三の3氏が選ばれた。しかし最終的には協同設計に収束した。水平線を強調した外観、屋上の芝庭と既存庭園を連続させるなど、巧みな手法で日本的なるものを表現し、名建築と称された。1956年、日本建築学会賞、後にDOCOMOMO100選にも選ばれている。竣工後、前川、吉村が数回にわたって増改築を加え、1975年には新館も建設された。新築時の真価を踏襲しながらさらに豊かな空間として、国内外から人気を集めた。しかし徐々に財政事情が悪化し、2004年3月、国際文化会館理事会から取り壊し計画が発表された。これを機に、建築学会を始め多方面から保存を要望する声が集まり、ついに同理事長は建築学会に「建物の保存活用に関する提案」を依頼した。これを受け、建築学会では急ぎよ、特別委員会を立ち上げ、新会館計画案を作成し1ヵ月後に回答した。最終的には、この新会館計画案にほぼ沿うかたちで改修・耐震工事が実施され、2006年3月、国際文化会館は万感の中で竣工を迎えた。そして今、“時代を許容した保存再生”の手法は、高い評価を得た。50年を経て、慈しまれ親しまれながら次の100年に向かっている。



竣工時の概要

所在地	東京都港区麻布鳥居坂町2
敷地面積	3,111.3坪
建築面積	408.9坪
延床面積	1,015.2坪
構造	鉄筋コンクリート造
規模	地下1階、地上3階、塔屋2階
工期	1954.3-1955.6
設計	建築：前川國男建築設計事務所 坂倉準三建築設計事務所 吉村順三建築設計事務所 構造：横山構造設計事務所
施工	清水建設
設計スタッフ	山西喜雄・窪田経男・上野 隆・柴田陽三・ 鬼頭 梓・津端修一・南條一秀
構造スタッフ	渡辺藤松・鈴木修彦・木村俊彦
家具	長 大作・水之江忠臣

増改築時の概要

所在地	東京都港区六本木5-11-16
敷地面積	10,937.31m ²
建築面積	1,966.55m ²
延床面積	6,722.916m ²
構造	鉄筋コンクリート造、 一部鉄骨造・鉄骨鉄筋コンクリート造
規模	地下2階、地上4階、塔屋1階
工期	2005.5-2006.3（一部内部造作：2006.5）
監修	阪田誠造・小林正美・今川恵英
設計	三菱地所設計
施工	清水建設

15頁一南面宿泊室外観：本館2-3階部分は、陸屋根の軒、各階のスラブおよびベランダによって水平感を強調している。また、プレキャストとコンクリートを用いたバルコニーの柱、窓台、方立ては見付け寸法を細く抑えることによって、縦にも細かく分節されている | 16-17頁一南面全景：南面の大半を占める開口部には、ヒノキの框を用いたガラス建具が再利用された。白く塗られた小壁と共に、日本建築の真壁の雰囲気と漂わせ、既存庭園との調和にも大きく貢献している | 18-19頁一庭園と本館屋上テラス：7代目・小川治兵衛による庭園は、大正末期から継承されてきたもので、鳥居坂に過去の面影を伝える貴重な文化遺産として港区の名勝に指定されている。当時は水が流れ、遥かに品川の海が望めたと言われている。芝生が張られた屋上テラスは、庭園との連続性をデザインし、日本的なものとして評価が高い | 20頁上一北面外観：前面道路の鳥居坂からアプローチの坂道を道なりに上り詰めると、左奥にメインエントランスがあり、かすかに入り口のキャノピーも見える。1階には大谷石化粧張りの壁をまわし建物の下部を引き締めている | 20頁下一エントランスから庭を見る：手前後方がメインエントランス。入り口を入るとラウンジのガラス越しに屋上テラスの芝生と庭の木々が飛び込んでくる。今や国際文化会館の原風景として、なくてはならない光景になっている | 21頁上一リニューアルされた階段：混雑時の状況と使いやすさを考慮し、拡幅してL字型から折り返し階段にリニューアルされた。手すりには透過性の高い大型の強化ガラスを採用し、地下に自然光を導入している。階段は竣工時の光庭の位置にあり、昔の光を復活させている | 21頁下一宿泊室内部：竣工後50年を経た全面リニューアルで全室バス・トイレ付きに機能アップされた。木製サッシの大きな窓には竣工時からカーテンではなく明かり障子が採用されており、この雰囲気は外国人にも人気が高い。夜は庭園の樹木がほのかにライトアップされる





国際文化会館の保存と再生

国際文化会館は竣工後50年以上たつ建物であるが、今でも多くの人たちに愛され、使われ続けている。一時は経営的な危機もあり、理事会で解体されることが決定したが、保存再生のためのさまざまな努力により奇跡的に解体を免れ、リニューアルされた現在はさらに輝き続けている。本稿では、建物・文化としての国際文化会館の成り立ち、保存再生に至るプロセス、今回の事例の意味と、今後の我が国の現代建築の保存再生の在り方について述べてみたい。

敷地が持つゲニウス・ロキ(場の持つ力)と国際文化会館という“ハウス”の成り立ち

18世紀の江戸後期に京極^{いぎのきみ}壱岐守の屋敷であった会館の敷地は、さまざまな所有者を経て、明治10年代に政治家の井上馨が新居を構えた。ここに明治天皇をお招きし、天覧歌舞伎が催されたという記録が残っている。その後、久邇宮家に所有権が移り、昭和天皇妃(香淳皇后)がこの土地で誕生された。震災後の大正13年に三菱の岩崎小彌太がこの土地を購入し、建物設計を建築家の大江新太郎、庭園のしつらえを京都の庭師・小川治兵衛に依頼し、昭和4-5年に完成させた。建物意匠は和洋折衷様式であったが、国際的な民間迎賓館を意識したものであり、今日の会館の持つ風情、回遊庭園の持つ独特の奥行き感は、この頃に形成された。

会館設立については、1925年に発足した非政府組織「太平洋問題調査会」が契機のひとつとなった。若き松本重治と米国側委員のジョン・D・ロックフェラー3世が京都会議で知り合い、意気投合し、戦後日本の文化人、知識人と精力的に会合を重ね、文化交流と知的協力の場としての“文化センター”と、容れ物としての“ハウス”の設立構想を進めた。1952年には財団法人国際文化会館が発足している。その後、日米同時に募金活動を展開し、建設資金が準備された。当時、新進気鋭の建築家、前川國男、坂倉準三、吉村順三の3名が協同設計者になったことは有名な話である。1953年から約1年の設計作業の後、清水建設の施工により1955年に建物が無事竣工した。その後、時代の要請に応じて、部分的な増築・改修が繰り返され、現状の会館配置に至っている。

解体建替から保存再生へ

——国際文化会館から日本建築学会への検討依頼

1970年代の増改築では、一時会員数が増加し組織は盛り上がったが、建物や設備の老朽化もあり、90年代頃から経営における慢性の赤字状態が始まった。

2001年から「鳥居坂西地区まちづくり協議会」が発足し、嘉治元^{かぢもと}郎理事長のもとで再開発参加についての具体的検討を行った。2003年頃から、会館の土地を空中権と共にデベロッパに売却し、建物自体を解体新築する具体的な方針が打ち出された。そのため、事態を心配した会員や周辺住民による「国際文化会館21世紀の会」が2004年5月に組織され、シンポジウムなどを実施した。私は家族共々ゆかりの深い場であることもあったので、この会では専門家として保存再生のための代替案を計画し提案する役目を担当した。しかしこの提案は、残念ながらあまり関係者の関心を得られなかった。

日本建築学会(以下、学会)や日本建築家協会は、すでに2003年に会館あてに保存要望書を提出していたが、学会の代表者が秋山宏会長に、また会館の代表者が高垣佑理事長に代わった経緯もあって、当時の秋山会長が再度「国際文化会館の保存活用に関する要望書」を理事長あてに提出した。会館側は、その直後の6月22日の理事会で資産の一部処分の方針を決定したが、理事長は、7月9日に学会あてに回答書を提出し、建て替えた新会館の建物施設が庭園と調和するためのアドバイスを求め、8月末までに学会からの何らかの提案が提出されることを求めた。

学会内の特別委員会と理事会による

「保存再生方針」の決定

これを受け、学会内では急きよ、東京大学の鈴木博之委員長のもとに「国際文化会館保存再生計画検討特別調査委員会」を立ち上げ、代替案の検討に入った。私はすでに代替案を検討した経緯もあったため、計画部分を担当した。歴史に加え構造、設備の専門家にも委員就任を依頼し、全力を尽くして現実的な代替案を提案する覚悟を固めた。

まず、第1に現状の会館建物を客観的に評価する作業を行った。専門家に現状の構造耐力の試算と、設備の老朽度の評価を依頼した結果、本館は耐震強度が基準に達しておらず、設備はほとんど更新しなければいけない状況にあることが分かった。第2に、学会として本館の建替案を検討するべきかという本質的な議論をし、本館の保存を第一義に考える方針を改めて確認した。第3に、本館ではなく、前川事務所が手掛けた新館部分をオフィス棟として建て替える案を具体的に検討した。第4に、免震か耐震工法かの選択であったが、耐震では外観が全く変わるであろうとの予測により、免震工法でいくことを決めた。第5に、最終的にこれらの工事費の概算を計算し、事業計画を組み立て

た。もともとの土地売却計画案に添ったA案と、売却面積を最小にして車廻しを残したB案を最終的には提案することにした。

2004年の夏は全く休みの取れないまま、膨大な作業を行った。この間、7月の毎週、高垣理事長、会館幹部と特別調査委員会委員との会合を持ち、意見交換を行った。今から考えるとこうしたプロセスを経てお互いの信頼感を確認したことが、全体の意思決定に大きく影響したように思われる。約束の8月末には内容を何とかまとめ、9月4日には会館あてに100ページの厚い報告書を提出することができた。実は正式な提出直前の8月27日に、私は1人で会館の幹部に報告書の内容を説明する機会を得たが、報告書のドラフトを説明する時点で、委員会の最終的な代替案が本館を丸ごと保存再生するものであり、理事会があらかじめ学会に期待していた内容と大きく異なっていたため、理事長が怒りをあらわにされる場面もあった。しかし、経営的なメリットも含めた計画案であることを丁寧に説明し、理事長にも内容を深く理解していただいた。最終的には会館側が代替案の内容を深く吟味して、①建物の閉鎖期間が短い、②移転費が掛からない、③工事費が安い、ことを評価し、9月6日の新会館準備委員会でB案の採用が決定されたのである。

設計ワーキンググループと保存再生の論議

その後、「国際文化会館建築諮問委員会」を新たに設け、実際の設計作業については、阪田誠造(坂倉建築研究所最高顧問)、小林、三菱地所設計がワーキンググループを立ち上げて対応する体制を固めた。その後、構造設計家の今川憲英(東京電機大学教授)も加わり、将来計画の建物配置とアプローチの検討から始まり、免震・耐震の選択に至るまで、本館の具体的な保存再生の方法について議論・検討を重ねた。特に「建物のオーセンティシティ(正当性)とは何か?」という本質的な問題については、多くの議論が繰り返された。それは多くの歴史学者が唱える「建物を創立時の状況に戻す」という凍結保存の考え方と、実際に使用する建物の所有者の意向を考慮した「再生を前提として保存する」の考え方の大きなずれをいかに埋めるかという作業でもあったのである。私は、ゴシックの教会堂もそうであるように、時代ごとの表現を明確にさえすれば、全体の意匠的特徴を逸脱しない限りにおいて増築や改修をしても問題ないという方針を主張した。

関係者の熱意とチームワークによるプロジェクトの実現

その後、実施設計を担当した三菱地所設計のスタッフ(鰐坂徹氏ほか)には、短期間に、細かいディテールの設計から見積もり調整、行政との交渉、既存の建築資

材の再利用、発掘された岩崎小彌太郎の貴重な史料の検証など、多くの困難な作業を担当してもらった。また、限られた工事予算と短い工期という厳しい条件ではあったが、会館がもともとの本館工事を担当した清水建設に施工を依頼することにし、2005年の4月には何とか着工にこぎ着けることができた。特に新しいホール部分の増築については、既存建物を柱で支持して浮かせたまま地下を掘るという困難を極める作業であったが、2006年3月にはホール以外の部分が竣工し、無事開館した。そして、同年7月1日には予定どおりホールも含めたグランドオープンが実現し、ホールの柿落としも兼ねた「国際文化会館の建築と庭園」というシンポジウムを開催している。また、同年7月7日には会館設立50周年の記念レセプションを、天皇皇后両陛下をお招きして開催した。

実際のところ、会館を始め工事関係者にとっては薄氷を踏むようなスケジュールであったことは事実である。特に、難しい工事を担当した清水建設が奇跡とも言うべき工程を見事にクリアしたことは、このプロジェクトにおいて特筆すべき点であった。

今回の「国際文化会館保存再生プロジェクト」は、会館側、設計監理側、それぞれプロジェクトにかかわった人物や組織が、熱意を持って自分の役割以上の仕事をし、会館再生のために並々ならぬ努力と作業をこなし、所作の賜物といわざるを得ない。この綿密なチームワークなくしてこの困難な「保存再生プロジェクト」はあり得なかったであろう。

今回の事例から学ぶべきこと

我が国でも例を見ない今回の劇的な「解体建替から保存再生へ」の方針転換は、会員の声や特別委員会の提案に対し“聞く耳を持つ”オーナーが存在し、保存再生という手法が文化的価値やノスタルジーの意識を超えて経済的合理性を生み得るという事実を、冷静に理解したことが大きいと言えよう。また、学会が通常の保存要請から一歩踏み込んで、オーナー側の立場に立った事業計画、具体的な保存再生の戦略を示せたことも大きなモーメントとなった。

“建物のオーセンティシティ”に関する議論も我が国ではまだ端緒を開いたばかりである。私自身は建築家として、歴史的なDNAを残した部分と新しい時代の表現である新規部分を明確にし、そのコントラストで時代・記憶・オーセンティシティを逆に際立たさせるべきであると思っている。また、特に機能美を追求した近代建築の保存については、時代に適合した再生を前提とした考え方がより現実的であると思う。今後さまざまな保存問題を考えていく時に、可能であれば、今回の事例が良きテキストとなってほしいと思っている。

こばやし・まさみ——明治大学理工学部教授・アルキメディア設計研究所主宰／1954年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学大学院修士課程修了。ハーバード大学大学院デザイン学部修士課程、東京大学工学系研究科建築学専攻博士課程修了。丹下健三・都市・建築設計研究所勤務、ハーバード大学客員教授を経て、現職。国際文化会館理事。工学博士。主な著書：「ポストン建築探訪」[丸善／1991]、「東京再生」[共著、学芸出版社／2003]など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した先駆者



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

●ゲスト●
橋本 功
Isao Hashimoto
建築家(左)
鯨坂 徹
Toru Ajisaka
建築家(右)



“再生して保存する”手法で、 時代の変容を受け入れた 国際文化会館。

インターナショナル・ハウス・オブ・ジャパンの旗揚げ

古谷 | このシリーズは、日本の主として戦後の近代建築の中で、エポックメイキングな建築物がどういう背景、事情、またどんな人たちの力によって実現したのか。それを今さかのぼっておきたいという主旨の特集です。ちょっとタイムリミットを感じて、事実、この国際文化会館も最初の設計にかかわられた方はいらっしゃらない時期になってしまいましたが、原点のところを少しでもご存じの方に話を伺っておきたい。これはとても貴重なことだと考えています。

そこで本日は1975年の改修にかかわられた前川事務所代表・橋本功さんと、2006年の改修の時に三菱地所設計で実務を担当され、現在は鹿児島大学で教鞭を執っておられる鯨坂徹さんにお越しいただきました。

まず橋本さん、もちろん最初の時ではないのですが、後に前川事務所にお入りになって、1975年の改修の時には設計のご担当だったそうですね。その時点でも、最初の設計についてはぜひぶんざかのぼって研究されたりしたんじゃないかと思いますが、まず、国際文化会館とのかかわりからお話いただけますか。

橋本 | 僕が前川事務所に入ったのは1970年です。入って間もない72、3年頃から設計が始まったんですが、実は73年頃、文化会館では全面的な建替計画がありまして、それを前川事務所がやっていたんです。この辺りの話は後ほど詳しくお話するとして、コスト的にとても無理な状態でしたので、新館の建設とその他の改修、つまり吹抜け部分とか玄関エントランスまわり、サイン計画の見直しなどを73年から74年に設計して、75年に竣工しています。僕自身はまだ右も左も分からない状況でしたので、同期の増田(康而)と2人でやっていました。現実にはディテールなどは描きましたけど、トータルのはやっていない。トータルでやったといえばインターナショナル・ハウス・オブ・ジャパンの「IHJ」のサインとかキーホルダー、菱形の衝突防止のマークぐらいですね。いまだに玄関に残っています。

古谷 | そうですか。でも文化会館の生い立ちなどはぜひぶん勉強なさったでしょうね。

橋本 | 何を改修し何を残すか、そういう議論がいつも行われて、やはり外観とか外の風景、もちろん「庭も含めて壊さないように維持する」という話でしたので、新館の建設に併せて本館を改修する時も、仕上げ材にはぜひぶんこだわって考えた記憶があります。そして、その頃から文化会館ではいろいろな催しものやられるようになって、前川事務所でもよくここを使っていたし、プライベートでもここで結婚式を挙げた関係もございまして、先輩たちの意思を受け継いで文化会館とのお付き合いが始まりました。文化会館の生い立ちは、ある時代からは見てきたという印象はありますね。

古谷 | そうですか。改修のお話は、後ほど詳しくお伺

いますね。では鯨坂さん、2006年の大きな耐震改修と大改修に携わられたわけですが、この建物に関するエピソードをお願いします。

鯨坂 | 私は三菱地所設計に勤務しておりまして、たまたま上司から声が掛かって担当することになったんです。最初は全面建て替えるという話でした。国際文化会館はDOCOMOMO100選に選定されている建物でしたし、私はDOCOMOMOのメンバーでもありましたので、どうしたものかと思いましたが、とにかく建物をその上に被せる計画をずっとつくっていました。土地を売却する話がありましたので、今ある建物からずらして計画しますと、たぶんそこを売ることになりませんので…。そんな時に、朝日新聞全国版の文化欄に、「国際文化会館『保存を』日本建築学会などが要望書」という記事が載ったんです[1]。それを機に建築学会とかJIAを始め、いろいろなところから再び保存を要望する声が出て、一連の保存問題の話になっていきました。

橋本 | 保存問題になってから三菱地所さんがかかわったのではなくて、建て替えの段階からずっと三菱地所さんがやっていたんですか？

鯨坂 | そうです。2004年当時、国際文化会館の理事長だった高垣(佑)さんは、東京三菱銀行の初代頭取でしたから…。

橋本 | なるほど、そうでしたか。何でうちに来なかったのかなとちょっと…(笑)。

古谷 | 経営者のご判断だったんですね。ただ、そこに鯨坂さんのような方がいらしたのが、大きな運命の分かれ道だったのかもしれない。鯨坂さんは、この話より前から、近代建築の保存運動とか、DOCOMOMOの委員をされていたんですね。

鯨坂 | 1999年頃にJIA鎌倉大会でのDOCOMOMO 20選のシンポジウムの資料準備から始まり[2]、その後、JIAから建築学会のDOCOMOMOワーキンググループの委員に送り込まれました。

古谷 | そうだったんですね、分かりました。

では国際文化会館のそもそもの話に戻しましょう。発祥は、これもつとに有名な話ですが、戦後日本が広くアメリカの、あるいは欧米社会の知識を吸収するために海外の知識人を日本に招いて交流する、そういう場として国際文化会館が計画されたと伺っています。実際に竣工するのが1955年、昭和30年になりますね。つまり戦後10年の間に実現してしまうわけですね。当時、日本でアメリカの文化を積極的に起用し、そこから学ぼうという機運になった。その辺の経緯については、先輩方は何かおっしゃっていましたか？

橋本 | 国際文化会館発行の『国際文化会館50年の歩み1952-2002』[3]には詳しく出ていますが、今日は僕なりに整理をした資料をお持ちしたんです。

古谷 | ありがとうございます。

橋本 | 1925年に発足した「太平洋問題調査会」が財団設立につながっていくんです。いわゆる太平洋間の



前川 國男
[写真: 廣田 治雄]
1905年、新潟県に生まれる。1928年、東京帝国大学工学部建築学科卒業。卒業と同時にパリへ赴き、ル・コルビュジエのアトリエで学ぶ。1930年、帰国。1931-35年、レーモンド建築設計事務所。1935年、前川國男建築設計事務所設立。1960年、メキシコ建築家協会名誉会員。1961年、米国建築家協会名誉会員。1963年、英国建築家協会名誉会員。1965年、ペレー建築家協会名誉会員。1975年、前川建築設計事務所設立。1986年、逝去(81歳)



入り口に掲げられている「IHJ」のサイン

[1] 「国際文化会館『保存を』日本建築学会などが要望書」『朝日新聞』2004.6.29

[2] 「文化遺産としてのモダニズム建築展 DOCOMOMO20選」(神奈川県立近代美術館)2000.1.26-3.26

[3] 『国際文化会館50年の歩み 1952-2002』加藤幹雄編著【国際文化会館/2003】



坂倉準三
[出典：『LIXIL eye』no.4.2014.1]
1901年、岐阜県に生まれる。1927年、東京帝国大学文学部美学美術史科卒業。1929年、渡仏。フランスで建築修学後、1931年、ル・コルビュジエのアトリエ入所。1940年、坂倉建築事務所設立。1946年、坂倉準三建築研究所に改称。1948年、坂倉準三建築研究所大阪支所開設。1964-68年、日本建築家協会会長。1967年、アメリカ建築家協会海外名誉会員。1969年、逝去(68歳)。正五位勲三等瑞宝章

問題を民間のレベルで文化交流しようとしたのが「太平洋問題調査会」なんです。アメリカというよりも、むしろ世界を含めて民間レベルで新しい国の在り方を考えよう。そこでは当然アメリカがリードするわけですが、たまたま日本の代表には、国際連盟事務次長を務めた新渡戸稲造さんを団長として、元日米協会会長の榊山愛輔さん、後に文部大臣となる前田多聞さん、新渡戸稲造さんの教え子で東大法学部教授の高木八尺さん、そして当時、高木教授の助手を務めていた松本重治さんという方々がいて、この方たちは1929年の京都会議で知り合いますが、すでに皆さんアメリカとの交流が強かったんです。

古谷 | 戦前から…。

橋本 | はい。それにちょうど、(ジョン・D・)ロックフェラー3世が大学を卒業して「太平洋問題調査会」のアメリカ代表団で来ていたんです。そのうち第二次世界大戦が始まって、そして終わるんです。その後、日本はいわゆる戦時中の対講和条約の締結という新たな問題を抱えるわけですが、その準備に来日したのが(ジョン・フォスター・)ダレスで、文化顧問としてロックフェラーが同行して来たわけです。この時期は底辺にドロドロした政治政策があったとは思いますが、ロックフェラーはどちらかというととても純粋で、日本の文化に惚れ込んで、日本とアメリカとの文化交流が積極的にできるハウスをつくりたいと一生懸命になって民間レベルで文化的な面から国を開いていこうとした。ロックフェラーはアメリカがメインだったんですが、重治さんはアメリカだけじゃなくて世界の人に開いた場をつくりたかった。そのためロックフェラーがいろいろと頑張ってくれて、お金は出しましょう。でも一部は日本でお金を集めなさい…とおっしゃった。そして1951年の11月12日に文化センター準備委員会が出来まして、榊山さんと重治さん、リーダーズダイジェストの日本支社長の(スターリング・W・)フィッシャーたちが母体をつくりまして、1952年にインターナショナル・ハウス・オブ・ジャパンという財団をつくられた。

古谷 | 今のお話を聞いて分かったのは、戦後、にわかにアメリカの知識を吸収して…と資料に書いてあるけれども、むしろその関係というか、個人的つながりで見れば、財団設立の20年以上さかのぼった時代から築かれていたということですね。

橋本 | そうですね。

古谷 | そういう方々の中で、不幸にして戦争が始まって、そして終わった。現実問題としてはアメリカの反共産主義戦略などがあったかもしれませんが、再会してかつての人のつながりがもう一度復活した、そういう流れがあるわけですね。ロックフェラーさんは1929年に23歳で来られたと書いてありますが、松本重治さんは、年回りとしてはどれぐらいの年代ですか。

橋本 | 1899年生まれです。

古谷 | じゃあ、少し年上ですね。

橋本 | そうですね。祖父は南海電鉄財閥の重鎮、松本重太郎さんで、重治さんは東大を卒業された後にイェール大学に留学し、そして戻って来てから内村鑑三のお弟子さんのアメリカ研究者だった高木八尺さんの研究室に入るんです。すでに八尺さんは「太平洋問題調査会」に入っていましたので、重治さんは常に八尺さんの助手として頑張っていました。そういう意味でほとんど実動部隊なんです。ロックフェラーも23歳前後でお若いし、実動部隊同士で仲良くなっていく。それから重治さんは、当時は同盟通信と言われた共同通信の上海支局長もやっていたので、やはり世界を見る目は政治学のレベルじゃなくて、知識人の広い世界的視野を持っていた。

古谷 | 気骨のある知識人だったわけですね。そういう方々が終戦後、幸いにしてもう一度再会を果たして機運が盛り上がり、さっきの話を伺うと民間の、民間だけじゃないけど民間ベースでそういう交流をもう一度復活させて頑張っておられた。それに、当時の政界の方々の中にも親アメリカ的な人もいらして、うまく波長が合ってお膳立てが整った…ということですね。

ところで、文化会館が建っている、この鳥居坂の場所の話ですが、(アントニン・)レーモンドの勤めでこの場所に行き当たったそうですね。たまたま国に買い上げられて国有地になっていた。そしてまた、これも有名な話ですが、岩崎小彌太の屋敷になる前は、この場所はおもとは多度津藩主のお屋敷に始まって、歴代の主にはそうそうたる方がいらっやる。

橋本 | そうです。四国多度津藩、今の香川藩主の京極壹岐守の江戸屋敷跡で、明治になって外務大臣・井上馨の屋敷になりまして、その後、久邇宮家、つまり昭和天皇の奥さまの香淳皇后がお生まれになった場所でもあるんです。

古谷 | ここでお生まれになっているわけですか。

橋本 | そうです。それから赤星鉄馬さんという財閥の所有になって、その後、財閥の岩崎小彌太が購入する。岩崎小彌太郎は大江新太郎の設計で1929年に竣工するんです。1階は洋風でその上に和風建築の2階を重ねた邸宅で、小彌太は海外からの要人を和風の邸宅で迎えていたそうですが、空襲で建物は焼失したんです。ただ、美しい庭園は残されていたので、国際文化会館の敷地としては最適だと判断して、榊山さんと重治さんは大蔵大臣を通して払い下げを強く希望したと言われています。当時、大蔵大臣秘書官だった宮沢喜一が、その実現に向けて奔走したそうです。庭園の形状は現在も継承されていて、今は港区の名勝に指定されている。榊山さんという方は1952年11月、吉田茂首相の肝いりで首相官邸で催された募金運動旗揚げの会で「外国との紳士協定を前提とした募金運動をやり遂げなければ国際的に面目を失す」として精力的に活動し、期限の1953年8月30日に募金達成を見届けた後、10月に88歳で亡くなってしまっんです。

古谷 | ただ、国際文化会館にとっては重要な方で、今でも地下会議室は「榊山・松本ルーム」として名前が残されていますね。結局、今日まで保存されてきたこの庭は、小彌太が小川治兵衛を起用してつくった庭、そのものなんですね。そうそうたる方々が、時代が変わっても共有されてきたこの庭の価値観といいますか、その存在はとても大きかった…ということですね。

橋本 | そう、それは大きいですね。

設計者を選択… コンペから協同設計へ

古谷 | 設計者に3人が起用される。実は、レーモンドさんも(ウィリアム・メレル・)ヴォーリスさんご自身で設計するとおっしゃったそうですが、重治さんは芸大の村田良策先生に相談されて、前川國男、坂倉準三、吉村順三を選ばれた。竣工の時には前川さんが50歳、坂倉さん54歳、吉村さん47歳という、日本を代表する気鋭の建築家だった。最初はそのうちの誰かということコンペによって1人を選ぼうとしていた…と。

橋本 | これも資料によって食い違うんですよ。後に『設計と監理』という雑誌で、前川、坂倉さん、吉村さんが「国際文化会館の協同設計について」というテーマで座談会をした記事が掲載されているんです[4]。

古谷 | その雑誌は当時の設監協会の本ですか。

橋本 | そうだと思います。この記事を読むと「オーナー側の要求事項が明でない」とか、「設計競技にしたってロクなものにらんと」という見通しをもったために、これはどうしても協同設計ということをやろうというふうに、だんだんになった」と発言している。それで、「申入れた以上、ぼくは責任をもってやります」、「ただその代りフィーを少し高くしなさい」と書いてあるんです。ただ、他の資料では「10月にプレゼンテーションがあって、それぞれ3案を出した」という記事もあるんです。

古谷 | 1人1つの案を出したんですか？

橋本 | そう。ところが最終的に誰の案に決めるのか、会館側が決められなかった。「みんなで互選したらどうか」という意見も出たけれども、3人とも自分の案が良いわけですから、互選なんてしない。結局、重治さんが「3人の協同設計でやったらどうか」という提案をしたらいいです。「前川さんと吉村さんはレーモンド時代に同じ所員だし、坂倉さんと前川さんはルビュジエの弟子だから」、「じゃあそうしましょう」となった…という記事もあるんです。当時、文化会館を担当した前川事務所の窪田(経男)さんもその話をご存じでした。さてどれが正しいのか…。ただ、3人には初めからそういう思いがあったのかな…とも(笑)。

古谷 | 当然、お三人は気心がよく知れているというか、頻りに交流がおりだったでしょうし、そういう機運が出たのかなとも思いますね。ただ、後にも先にもコンペに登場した3人が、協同で設計するという話は

聞いたことがないですね、日本では…。

鯨坂 | お聞きしないでですね。

古谷 | そういう意味では画期的だったのかもしれないけど、それぞれの案は個性の違いはあったとしても、庭を継承しようという大筋のところでは齟齬するものではなかったということでもありますね。

橋本 | そうですね。

古谷 | これは何か理由があるんでしょうか。そういう設計の考え方がすでにあったのか。それとも全く白紙で託したのだけれども、3人が奇しくも同じように考えたのか。

橋本 | その辺は分からない。ただ想像するに、やはり庭を大事にしていこうという辺りと景観、それからアプローチ側から入って下に降りていくレベル差の問題、庭に接するという風景の問題は大事にしていた。それと日本の国際文化会館だから、ジャポニカではなく本来の日本的なるものをイメージする…とか、会館側からそういう要望もあったんじゃないでしょうか。1951年にはリーダーズダイジェストができる。あれはいわゆる昭和モダニズムというか、軽快な感じで軸組工法をきれいにスレンダーに出している。ある意味では桂離宮にも通じる日本の軸組工法。そういう背景が、ちょうどこの時代にある。例えば、坂倉さんは1937年にハリ万博で日本館を1棟やっている。鎌倉の近代美術館もちょうど1951年に出来ている。前川の音楽堂が1954年、吉村さんはその頃、まだアメリカにいたと思うんですが、日本のいわゆるモダニズムが非常に高いレベルに達していた時期が垣間見えるような気がするんです。それはそれ以前の和洋折衷のジャポニカじゃなくて、日本の歴史を踏まえて日本の建築とモダニズムをどう統合するか。逆に言うと日本の軸組の組み立て方の中に工業化とモダニズムを見出ししていく。そういうバックグラウンドがあったのかなという感じがちょっとするんです。

古谷 | そうですね。例えばリーダーズダイジェストと伺うと、非常に分かりやすい。このシリーズでも取り上げた香川県庁舎[5]が出来るのも1958年で、ほぼ同じような時期です。やっぱり機運としては日本建築の構成美というか、それを現代のコンクリートとか鉄、そういう材料に置き換えた時に何が可能か。しかも地震国という中で、みんなが格闘していたテーマが、潜在的にそこにあった。奇しくも共通性を帯びてしまう背景がテーマだったわけですね。それと庭と地形という物理的な環境条件が重なり合って、三者が同じような発想をするし、その後、協同することも結果としては成功する。偶然かもしれないけども、必然的にもそういう背景があった感じですかね。鯨坂さんは、モダニズム建築の研究者としてこれをどう見ますか。

鯨坂 | いやいやまだ大学に来て2年で研究者というのは恥ずかしいですが、やはりあの日本館の日本的なイメージをどう表現するかという考え方を坂倉さんは持っていたらあって、この協同設計の時にもそういうことをかなりおっしゃっていたのではないかなと想像



吉村順三
[出典：『INAX REPORT』No.127.1996.12]
1908年、東京都に生まれる。1931年、東京美術学校(現・東京藝術大学)建築科卒業。1931-41年、レーモンド建築設計事務所。1941年、建築設計事務所開設。1945年、東京美術学校助教授。1950年、吉村設計事務所顧問。1962年、東京藝術大学建築科教授。1970年、同名誉教授、吉村順三設計事務所代表取締役。1975年、アメリカ建築家協会名誉会員。1990年、日本芸術院会員。1996年、文化功労者。1997年、逝去(89歳)。勲二等瑞宝章

[4] 「座談会：国際文化会館の協同設計について」(前川國男×坂倉準三×吉村順三、司会：村田政真)『設計と監理』1955.4
[5] 『LIXIL eye』no.2.2013.4.20、p15-参照

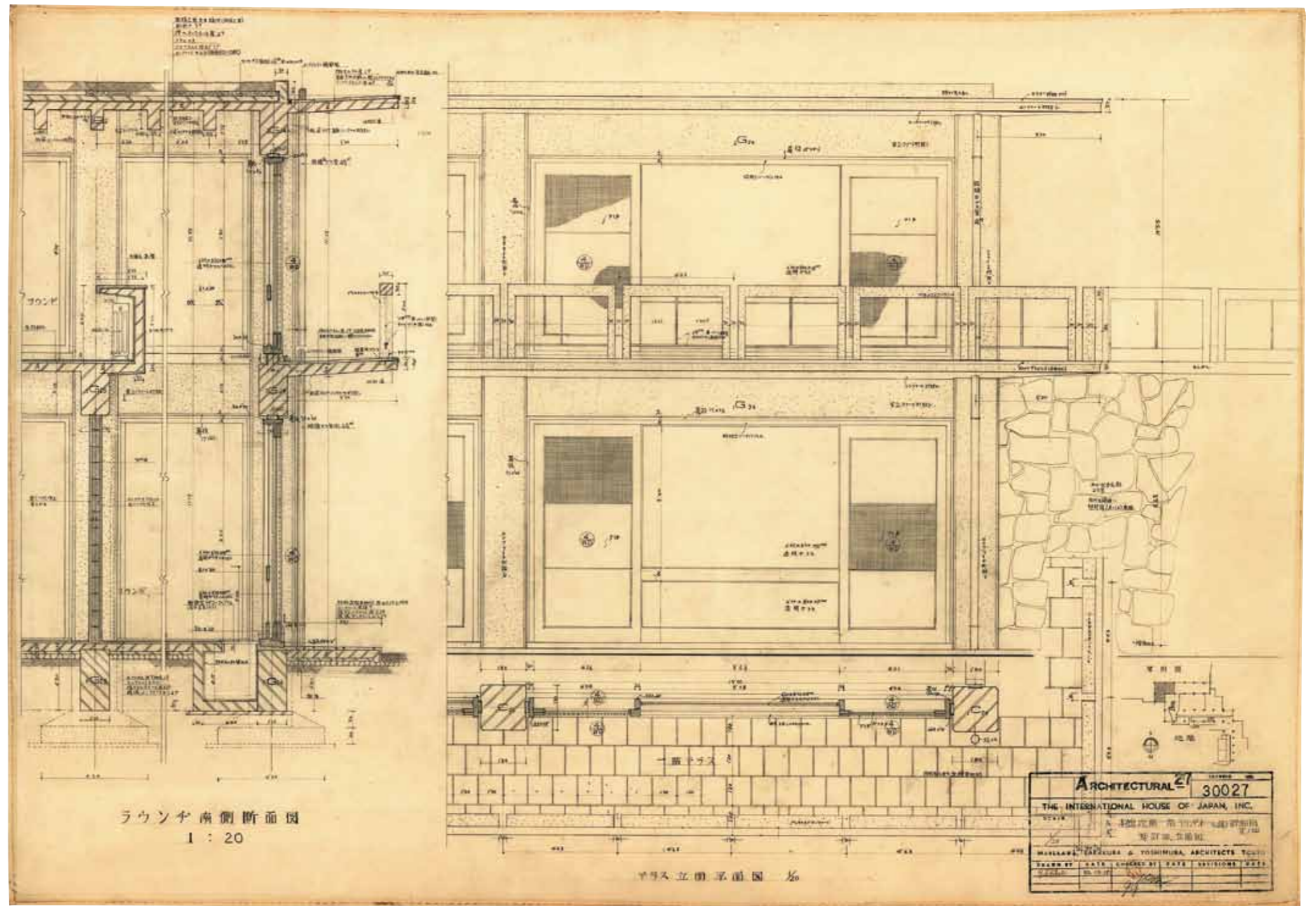
しますが…、1937年というと戦前ですから、ずいぶん前に、日本館のようなモダンムーブメントの作品がつけられたのは驚きです。

橋本 | ただその当時からこの時代にかけて、木造モダニズムといって、いわゆる紀伊國屋書店とか岸体育会館とか、パリ万博の日本館に触発されるような感じで、木造で細い、瀟洒できれいなものが出来てきますよね。その時代はコンクリートとか鉄は使えなかったという背景もあるけれど、木造の中でモダニズムをつくっていく。戦前の木造モダニズムは、木造で洋風に見せる発想だったけど、50年代のものは、木造の中にモダニズムを見つけていく、そういう背景があったような気がしますね。

協同設計がスタート 3人は論争するのではなく…

古谷 | 設計する素地が出来上がって、いよいよ3者が協同してやっていく時期になるわけです。3人の先生方が次々にやってきてはエスキスするから、スタッフは大変苦労したという話は、後からいっぱい出てくる。先輩方は何かおっしゃっていましたか。

橋本 | そういう話は聞きましたね。場所ははっきりしないんですが、協同のアトリエがあったらしいんです。そこに坂倉事務所から山西喜雄さん、前川事務所からは窪田さん、吉村事務所からは上野(隆)さんが出て、そのアトリエで仕事をしていました。この頃、前川は銀座商館が焼けちゃいましたので、1954年ぐらいまでは目黒の自邸で設計事務所をやっていたんです。坂倉さんもまだ設計事務所としての体制がはっきり出来てなくて、吉村さんはアメリカへ行ったり来たりしていた。そういう意味で、第3の場所にアトリエをつくって、そこに行って設計をするスタイルが一番ベストだったと思うんですよ。そこにそれぞれが派遣されて出てきて、1953年の1月から協同設計が始まるんです。初めはそれぞれが基本の案をつくって、それをみんなであらわす。4月ぐらいまではおそらくそういうかたちでやっていて、最終的に10月頃から12月ぐらいいにかけて実施設計がバツと走ったような感じでした。その当時のエピソードとしては、前川が事務所のスタッフの図面の間違いに気付く「バカちんだな!」と声を荒げたとか、坂倉さんが「こうだね」とエスキスばかり描いている、吉村さんはものすごく薄い線でいろいろ描き直しておられるうちに、どれが本当の線か分からなくなっちゃった…というような話を窪田さんからよく聞きました。前川はどちらかというと、自分の案を通すよりも、マネージャーというか、まとめるという立場で参加していたような気がします。前川はセンスはあるんですが、無骨なんです。おそらくそれを自覚していて、デザインは坂倉さんと吉村さんに任せて、自分はテクニカルアプローチ的な部分でまとめ役をやっている感じだったと思います。先生方がいろんな意見を言うことによって、初めはぎくしゃくしていた所員も



だんだん終わりの方になるとチームとしてまとめる力が出てきた感じがしますね。苦労も多かったと思いますが…。

古谷 | 学会主催のシンポジウムの時に、鬼頭(梓)さんの発言している内容がとても面白かった[6]。

鯨坂 | そうですね。国際文化会館で開かれたシンポジウムですね。

古谷 | 前川さんがやって来て「ディテールは吉村先生がうまいから吉村先生に聞きなさいと言われた」と、鬼頭さんがおっしゃっていました。

橋本 | 鬼頭さんも後にこの設計メンバーに入ってきましたからね。

古谷 | 3人の先生方が一堂に会して議論するとか、定例的に案を詰める、会議をするようなことはなかったん

でしょうか？

橋本 | 基本的には1週間、個々で考えて、それを持ち寄って現場で統合し、問題点を常にフィードバックさせるやり方…と言っていたそうですが、記録を見ると、そういう意味でお互いに意見をぶつけて3人で議論した…という記録はないようですよ。

古谷 | 先ほどの鬼頭さんが話された内容から見ると、3人は論争するのではなく、お互いに最初から闘いを避けているところがあって、うまく共有し合っていないでいく。所員としては、本当はそれぞれの考えをぶつけ合ってほしいと思っているんだけど、3人はそういうことは全然しない。実際はスタッフの方たちはその後、「あれはどういう意味だったのか…」と、それを反芻して調整するようなことがいつもあったらしい…

というお話でした。一種の自然発生的に出来た組織かもしれないけど、ある種の協同設計の試みだったんでしょうか。

橋本 | そうだと思います。大きな枠の中では役割分担がある程度はあったと思いますが、所員の皆さんがその辺をくみ取りながら調整していた。それをボスたちがあぁこうだと言いながら、でも何となくひとつの方向に収束していった…ということは、そのお三方が持っている原資というか出自というか、そういうところが共通していたような気がしますね。「こいつ!」と心の中では思いながらも、お互いの立場を尊重しながらやっていたんじゃないか(笑)。

古谷 | 鯨坂さんから見ると組織的にはどうですか。

鯨坂 | 実際に部下の担当者は、やりにくかったと思

国際文化会館 本館地階一階ラウンジホール 廻り詳細図其ノ四 矩計図・立面図 [所蔵: 前川建築設計事務所] 右下タイトルに共同設計を示す「MAYEKAWA, SAKAKURA & YOSHIMURA, ARCHITECTS TOKYO」とあり、DRAWN BYの下に柴田、CHECKED BYの下に前川印、坂倉のサイン、吉村のサインがある。柴田は坂倉事務所の柴田隆三。日付は1953. 12. 15 [解説: 橋本功]

[6] 「シンポジウム: 国際文化会館の21世紀を考える」(鹿内京子×前野まさる×松本洋×椎木輝實×鈴木博之×鬼頭梓×野口英雄×兼松純一郎)『国際文化会館の保存と再生にむけた取り組みをどう活かすか』[日本建築学会関東支部/2005]



1955年当時の航空写真[提供：国際文化会館]
本館南側・中央部の屋上庭園は竣工時、一部が吹抜けになっており、光庭として機能していた(31頁写真参照)。後に前川國男が改修し、現在は屋上庭園のみ。西側(手前左端)には、本館に接続して2棟の付属住宅があった。吉村順三が設計した理事長とゲストハウスのための住宅である。北側に隣接して建つ3階建ての建物は、岩崎小彌太郎の遺構。東京大空襲の被害から逃れた唯一の建物である[解説：国際文化会館 柳沢洋一]

ます。この当時の図面を見ると、横山構造設計事務所
のサインもちゃんと書いてあります。単独のアトリ
工ではできなくて、構造とか設備とか技術的な事務所
と一緒にやっていくような、大規模な建物をやり始めた
時代だったと思います。そしてこの協同設計は、たぶ
ん西洋美術館の協同設計につながっていくのではない
かと思います。

古谷 | なるほど、なるほど。

鯨坂 | 当時の事務所は何人ぐらいいらっしゃったんですか。

橋本 | うちの30人くらいだと思います。

鯨坂 | 坂倉事務所が20人くらいで、吉村事務所はこの
当時はたぶん10人くらいだった。吉村事務所OB
の上田悦三さんにお聞きしたところ、1950年の辺り
は7人くらいだったとおっしゃっていました。

古谷 | 30人、20人、10人…。当時としては、そこ
そこの規模ですね。こうして、所員の方々は最終的に
は大変苦勞をしながら協同の成果で出来上がるんだ
けど、浜口(隆一)さんは国際文化会館について、面白
い論文を何度か発表しているんです。特に竣工後に
「戦後最大の日本調と協同設計功罪」という論文を書
かれているんです[7]。それは、ある意味では3者協
同の成果は、ひとつには新たな日本調をつかったこ
とにある。もう一つは所員レベルの人たちが広く横に
つながることができた。事務所の枠を越えて横につな
がったことは、価値があったんじゃないか…と言われて

います。当時は考えもしなかっただろうけれども、そ
れぞれ個性の強い先生の事務所のスタッフが、お互い
の事務所の枠を越えたところで交流したり価値観に触
れ合ったり、本当に横につながった。3人の先生方が
出稽古のようにやって来てはいろいろなことを言って
帰られるという経験は、面倒ではあったかもしれないけ
ど、非常に大きな成果があったんじゃないかと書かれ
ている。

橋本 | そういう組織の活動を越えて、設計事務所の
メンバーが交流する例は、その頃から出来始めてい
たかもしれませんね。戦後のNAUを始めとして、五
期会とかアトリ工事務所の交流とか、徐々に出てきま
したね。

実施設計

いよいよ吉村さんの出番

古谷 | 実施設計案になってからは吉村さんの出番だ
つたんじゃないかと思うんです。いろんな材料の使い
方、PCを使った窓まわりのディテールとか。それから
浜口さんが「戦後最大のジャポニカ」という表現をした
のは、みんなで挑戦した日本的なるものが本館にこう
いうかたちで結実した。それは吉村さんのディテール
ワークというか、プロポーションの感覚、それが大きく
作用したような気がしますね。

鯨坂 | そうですね。上田さんにお聞きしたら、障子は

吉村さんの提案ではないかとおっしゃっていました。
それと面白いのは、サッシなんですけど、オリジナルに
は中棧が1本入っていたんです。1959年に吉村さん
が食堂を増築するのですが、その時は中棧は最初から
なかった。それにならい、今回の改修で中棧は取って
しまいました(笑)。というよりは中棧がもたなかった
んです。複層ガラスに換えた時に、荷重に耐えられな
くて、取らざるを得なかった。最初からなかったので、
可能かなと考えました。

古谷 | 最初はガラスのサイズがそこまで大きくできな
かったとか、そういうこともあるんですかね。

鯨坂 | それもあるかもしれませんね。もともとここは
フロートじゃなくて板ガラスでしたので。

古谷 | 本当は取りたかったけど…。

鯨坂 | その可能性もあるかもしれない。

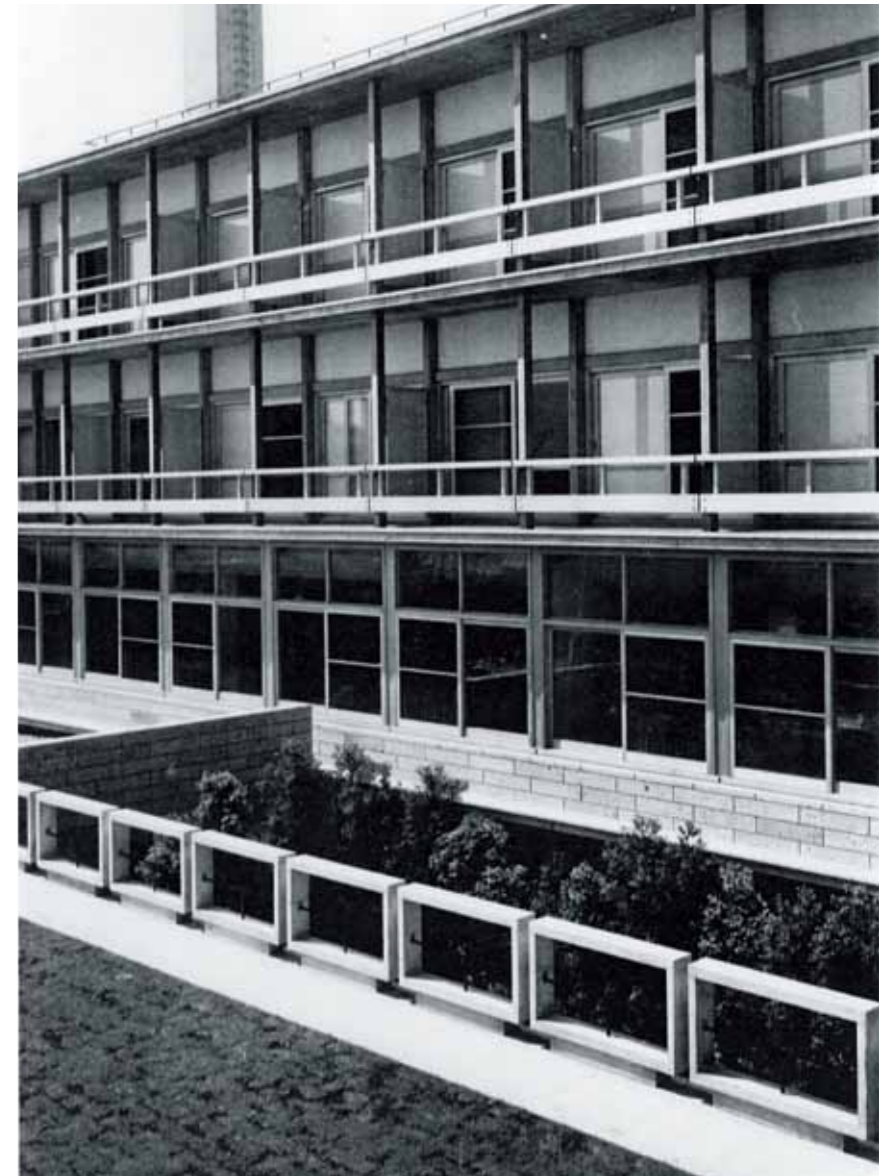
古谷 | ガラスの大きさの限界があったかもしれないし、
コストかもしれない。

鯨坂 | お金はなかったらしいです。いろいろと設備を
諦めたと、吉村さんはおっしゃっていたそうです。

橋本 | でも、中棧はない方がすっきりしましたね、なる
ほどね。

古谷 | それこそ、『国際建築』の写真に細かい解説が
付いているんです。不思議なことに、なぜか『国際建
築』にしか書いていないんだけど、ちょっと長くなります
が読んでみますね。「建築材料のもつ素地を生かして
木と石とコンクリート及びガラス等の使い分けによ
って、簡素で着落のある明るい立面を造り、清新な雰
囲気を与えることに努めたこと。1階は大谷石の壁を廻
して建物の下部をひきしめ、駐車場からの騒音と視界
とを防いだこと。日本特有の檜を建具材として選び、
在来のサッシより大きな断面とスケールを採用しなが
ら木肌のもつ親しみとコンクリート打放し面の灰色との
明るい調和とによって、柔かな感じを出した。この木
製サッシの断面の大きさは耐用年数の永いことを考
えてのこと。2・3階の上部はプレキャストコンクリ
ートの柱、楣及び窓台を木造構法のように組合せて、こ
の間に建具や軽量ブロックの壁を嵌込み、陰影のある
繰返しによって単一の壁面をつくっている。このよう
に日本の伝統的な表現を尊重して、壮大ではあるが華
美に流れない清純な性格を持たせたつもりである」と、
これは「設計者の言葉」として書いてあるんです[8]。
ただ、設計者とは誰かというのは分からないですよ。
この部分だけに非常に細かく具体的に解説している。
先ほども出ましたが、当時の建築ではリーダーズダイ
ジェストがあって、その一方では香川県庁舎のような試
みも知られていて、文化会館では材料を組み合わせる
美しさ、それが際立って出ている。特にヒノキのサッシ
が使われて、それとPC材がラップするというか、そう
いうものを単にプロポーションだけじゃなくて、工法と
して表現しているような気がしますね。

橋本 | 1950年代初期から55年、60年弱まで、こ
ういうプレキャストとブロックとサッシとか、いわゆるテ
クニカルアプローチと前川が言うものは、日本相互銀



1955年当時の中庭[提供：国際文化会館]
現在、屋上庭園になっている部分は、竣工時
は地階食堂の屋上にあたり、隣接して吹抜
けの中庭があった。中庭には植物も植えら
れていたが、1969年、前川國男の改修
によって天井が張られ、中庭は内部化された

行の支店で試みている。ブロックを積んで腰をつくる
発想は、僕らがいる前川事務所のMIDビルがそうで
すし、フレームでつくっていく発想も神奈川の音楽堂の
一部に使っている。ですから、柱から飛び出して外壁
をつくっていく、柱から分離させていく発想、この辺り
に僕らは前川のテクニカルアプローチの踏襲を見るん
ですが、それがすごく洗練されている。その辺りは吉
村さんのディテールなのかなという感じがするんです。
全体的なスケール感は吉村さんなだけけど、納まりと
かはシンプルで、前川のテクニカルアプローチ的な
おいをすごく感じるんですよ。

古谷 | そういう意味では、坂倉さんの日本館から始
まって、前川さんのある理念、今のコンセプトとそれか
ら吉村さんのディテール感が、うまいかたちで相乗的
に組み合わせられている感じがしますね。結果として出
来たものはフレームがあって、そこにフィルターが入
るとい、日本でいう窓。僕はそれを「間の戸」、日本
の窓の語源は「間戸」って書くんです。つまり穴じゃな
くて、むしろフレームに対して何か必要な遮蔽性能を
持っている障子だったり板戸だったり格子戸だったり
する。これは日本的な窓の発想に近くて、それが結果

[8] 「国際文化会館」『国際建築』1955.8



1975年当時の新築された新館【提供：前川建築設計事務所】
竣工以来ラウンジの床を張ったり、中庭を増築したりの改修・増築が行われてきたが、設備の老朽化対応や宿泊機能の充実を図る目的で1975年に大幅な改修・増築を実施。南西側の木造理事長公舎を取り壊し、ここに鉄筋コンクリート造地下2階、地上4階、外観は打込みタイル外壁による新館を建設し、本館の改修は最小限度に止められた。玄関からエントランスホールを通して正面に庭を望む佇まいも、この改修で実施された【解説：橋本功】

として日本的なるものをうまく表現している理由でもあるんじゃないかと思うんですよ。

橋本 | なるほど、そう言われてみると。事務所の建物も1955年に出来ているんですけど、初めはいわゆる軸組だけで柱と梁しかないんです。そこに腰をつくってサッシを入れて、床はプレキャストを置いていく…、そういう発想なんです。今おっしゃった“間戸”、それはまさに工法としても日本の木造軸組工法なんですね。

古谷 | そうですね。

橋本 | 構造をつくってその間を埋めていく。そういう意味では、当時の風景として現れる日本的な発想というのは、形は日本のだけど紙と木とコンクリート、石、ブロックという、そういう素材の扱い方もすごく日本的なんですね。

古谷 | 強度を持っているものを適材適所に置いていく。さっきの駐車場との間には大谷石を使うという発想につながっていく感じですね。

橋本 | 日本的という意味はそういうことだと思う。これが今後、何を伝えるかという意味での重要なポイントになるんじゃないかな。 “間戸”ね。

古谷 | 僕はずっとそう思っていたんです。特にこの文章表現を見ると、非常にそれが意識的だったことが分かります。浜口さんがジャポニカと言って、その言葉が一人歩きしていますが、ジャポニカと言うとちょっと伝わらない。本質的な日本的なるものの追求がここで行われていたように思います。

橋本 | そうすると胸に落ちる話ですね。国際文化会館の価値というものが。

古谷 | 結果として外国の方からも、このヒノキの框戸はすごく評判が良かったようで、開口部のガラス、真壁のような表現、そういったものがある種の新鮮さを持ってここを訪れる外国人の方に受け止められたようです。

鯨坂 | 私は今回の改修は、ドミノシステムと同じだなあと感じました。それは普通だと横連窓でドーンとつくるところですが、おっしゃったようにPCで和風に組んでいますし。

古谷 | 国際文化会館は竣工した翌1956年に建築学会賞を取られるんですが、その時の選評によりますと「現代的な諸種の新しい工法が自在に駆使され(中略)そこに独自の調和ある日本的な美しい表現を成しとげている」【9】という理由で受賞されている。非常に的を射た選評じゃないかと思うんですけど。

1975年

前川事務所の増改築

古谷 | 1975年に前川事務所では大規模な改修をされまして、橋本さんはその時から文化会館とは、より直接的なかかわりをお持ちなんですね。最初にお話がありましたように、この段階で大掛かりな見直しがあった。とにかく文化会館は非常に活発に利用されて、

宿泊室の機能改善も必要ですし、少なくとも部屋数をもっと増やしたいというご要望もあったわけですね。

橋本 | そうです。それが大きかったですね。やはり、宿泊と研究部門の充実を図りたい。いろんなシンポジウムが多彩になってきたこともありまして、そのために研修室や図書館をつくりたい。そういう意味で、全体を建て替えて中高層化する話になったようです。結果としては、オイルショックで建設費が高騰したために、新館の建設だけになったんです。ただ、設備の全面的な見直しを図ったのは、この時の改修です。

古谷 | いったんは、総建て替えの案につくられている。**鯨坂** | 僕も前川事務所に伺った時に、その図面を見せていただきまして、びっくりしました。

橋本 | あんまり大きい声では言えないんです。

鯨坂 | パースもありまして、入り口から中庭にドーンと抜けて、左右に分かれて入る。いかにも前川さんらしいものでした。

橋本 | これは一般的な話でも言えるんですが、前川は保存に対しては、あんまり言及したことがない。今回も鯨坂さんから図面の件でお問い合わせをいただきましたが、「実は全部壊して建て直す構想があったんです」なんて、とても言えないですよ。これはもう内緒にしておきたい話でもありましたが、実際には全部更地にして高層化する。ただ、基本的にはレベル差と中庭は残す。そういうプランで、実施設計もやって見積もりまで出ていました。それがワンセット、すべて前川事務所にありますが、そのままお蔵入りです。

古谷 | オイルショックによって中止になった…。

橋本 | お金が3倍くらいになって、とてもできないという結論になった。会館側は運営と経営に関して、実はその前からR計画としてすでにやっています、R計画は高層棟が2棟建つ案で、この時のプロジェクトもその一環ではあったのです。会館の運営面ではいろいろと歴史があったんだと思います。

古谷 | 運命というのは不思議なものですけど、その頃、“保存”という機運はなかったんですか。残せという保存運動も…？

橋本 | この計画は公にされていなかったと思います。逆に建替計画を知っている人はいなかったんじゃないでしょうか。文献を調べていくとちょっとは出てきますけど、前川がそれをやっていたことについては、よほどひとといてやっと分かるぐらいで、全く公にされていなかったと思います。そのレベルの話じゃなくて、会館側から委託されてまとめていただけ。契約行為の範囲で、世論が反対運動をするようなところまでは情報が流れていなかったと思います。

古谷 | まさしくオイルショックがなければ、もしかしたら国際文化会館は、その段階で消えていたかもしれない…ということですよ。やむなく断念して部分改修と新館の建設になったわけですね。それに関して前川さんとか橋本さんたちがお考えになったことはありますか？

橋本 | 細かいことは分かりませんが、窪田さんの

『新建築』の記事【10】を見ると、環境とか残していくもの、それから機能性として広げていくようなこと、それをどこまで控えめにやっていくか…と書かれています。それと、1975年というちょうど前川が打込みタイルをやっていた時期で、66年以降は事務所では定番になっていましたので、あんまり疑問を持たなかったのですが…。

古谷 | ある種のブームだったわけですね。

橋本 | 時代でもあった。打込みタイルの美しさとか良さは、僕もすごく好きだった。緑に映えて、組積の発想は良いな…と。ところが新館が出来上がった時、この場所に何で打込みタイルなんだろう…という思いは、正直言ってありましたね。こんなことを言ったら先輩に怒られちゃう。

鯨坂 | ただ、この時の改修で、今のエントランスになったんです。それが国際文化会館のイメージになっていますよね。その時には、エントランスの議論が何かあったのでしょうか。

橋本 | 結局、大きな部屋をつくって、結婚式もやり、国際会議もやり、利用がどんどん増えてくる。エントランスの重要度というか、エントランスがロビー感覚になってくる。入ってすぐ西棟のロビーと東棟のロビーに分けて、エントランスを一挙に広くすることによって出入りをフリーにした。それから、どんどん車社会になって、車で乗り付ける方も増えてきたのでキャノピーを出すとか…。そういうことでエントランスから前面をスパーンと向こうに抜いたんです。会館が抱えるいろいろな不都合に応じて、どういうふうに変更していくかという議論はずいぶんあったと思うんです。

古谷 | 今、鯨坂さんが言われたとおり、今では一般の方でもあの玄関に立った時に、ガラス越しに庭が見えるイメージは定着していますよね。

鯨坂 | 昔はそうじゃなかったとお話すると驚かれる方が多いです。ですから保存再生の時も、一番継承しなければいけないのは、入って来た時の開放感と庭との連続性だと言われていて、オリジナルの状況に戻すという発想はなかったですね。

古谷 | その柔軟性がとても大事なかなと思うんです。歴史的に最初のオリジナルに戻すことに執着してしまうと、改修されたり改良されてだんだん築かれてきた空間の良さみたいなものが、むしろ粗末に扱われることになっちゃう。こうやって出来上がってきたものを活かした点が素晴らしいですよ。

橋本 | おっしゃるとおりで、まさに玄関から外のテラスの芝生がポーンと見える感覚、オリジナルはそうじゃなかったですからね。玄関を変えたことで、これがひとつの原風景に…。

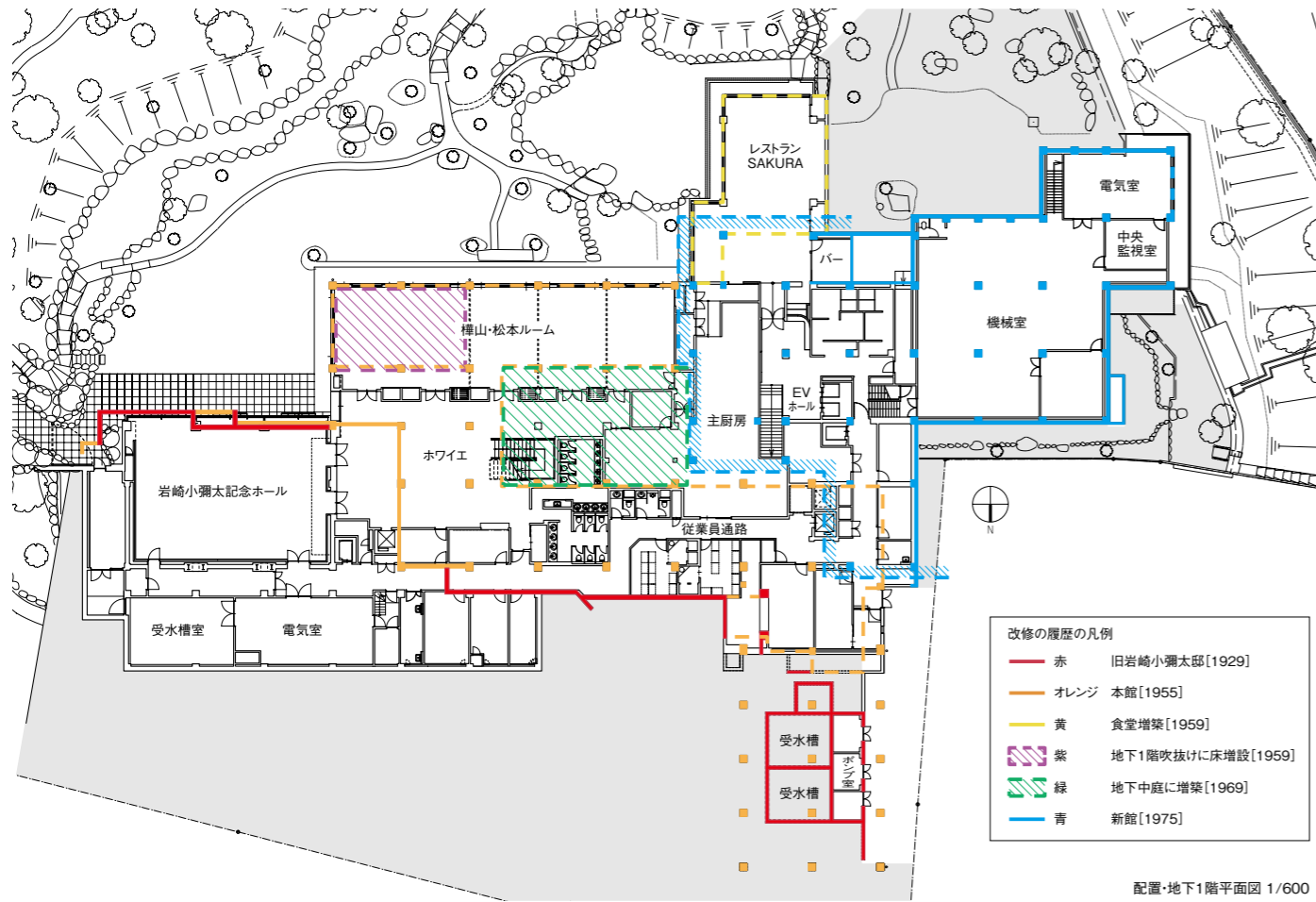
古谷 | そうそう、新たなる原風景になっていますね。

2006年

建て替えが大改修に変わった

古谷 | 2006年の改修の話に移りましょう。先ほどの

【10】 窪田経男「国際文化会館 増改築」『新建築』1976.4



配置・地下1階平面図 1/600

国際文化会館 配置・地下1階平面図[提供：三菱地所設計]
 国際文化会館は旧岩崎小彌太郎(設計：大江新太郎)の地下躯体を再利用して竣工し、現在でも1929年の躯体が一部残存している。1955年の竣工後は、地下の食堂の増築[1959]、地下1階吹抜けに床増設[1959]、地下中庭に増築[1969]と順次増改築され、1975年の新館建設の際に旧岩崎邸の躯体の大部分が撤去された[解説：鯉坂徹]

シンポジウムでは、国際文化会館前専務理事の松本洋さんが詳しくご説明をなさっていますが、ちょっとかいつまんでご説明します。まず「1971年に『R計画』というものを国際文化会館側が考えられました」と。その時はまだ松本重治さんもお存命の頃でいろいろと考えていた。それから75年に一部、増築が行われているわけですが、80年になったところで、「この西側の所を非常に高値で坪2,000万円程で350坪を売って、少し国際文化会館も経営的に楽になったらどうか」という話もありました。それからさらに「1990年には、ゼネコンから一戸3億円のマンションを一棟つくって、それを全部引き受けるから、150億円で国際文化会館を建て替えたかどうか」という話もあった[6]。

鯉坂 | バブルですね。
古谷 | また「独立行政法人で国際交流をやっておられる所から、長期滞在者住宅用途借地をしたらどうか」という提案」をされる。そして2000年に森ビルからの協同提案。「森ビルの一体的まちづくりの案」というものと、それから会館独自の建築計画案というものを「ご説明したい」と言われました。2つあって、「一体的なまちづくり案は、『計画は共同で、事業は別で、そして一部土地を国際文化会館が少し割譲して、余剰容積という意味の、空中権を森ビルに買ってもらう』と。『もう一つの案は会館の独自案で、『この3,100坪の中で定期借地権を設定して収益施設を設けてはどうだろうか』という提案が諸々あったことが詳しく報告されています[6]」。

鯉坂 | 一番びっくりしたのは、実は全く跡形もない案がたくさんありました。もともと私どもの三菱地所設計に依頼が来た時は、森ビルさんと一体に開発するという前提があったんです。今もまだこの話は進んでいると思いますが、私が聞いている話では、残そうとする全部プレースが入って残せないから建て替えるという方針になって、それに対して保存要望書がいろいろところから出てきていました。学会からは仙田(満)さんが会長の時に保存要望書を出されました。それでお答えがなくて、秋山(宏)会長になった時に「ご回答いただきたい」というお願いを再度なされたんです。それに対して「そんなに言うなら学会で提案してください」という回答が学会に舞い込みました。学会では、緊急に特別調査委員会がつけられて…。

古谷 | 案を出してほしいと言われたので、異例のことだけど学会としては非常に限られた時間の中で立ち上げられた…。

鯉坂 | 小林(正美)先生を中心に提案書をつくられた。
古谷 | 小林先生は、お父さまが国際文化会館の会員だったそうですね。

鯉坂 | そうです。ご兄弟全員がこちらで結婚式を挙げていらっしゃるように、とてもご縁が深いこともあって、夏休みをつぶしてもものすごい勢いで再生案をつくられたのです。

古谷 | 猛然と再生のシナリオをおつくりになったわけですね。しかし、これに対して会館側はご立腹なされたんですよね。

鯉坂 | 提案書が出てきた時に、本館が残っていたために、高垣さんは非常にご立腹されたと聞いています。全部建て替える案を持ってきてくれると思っておられたようです。

古谷 | その行き違いは、何が原因だったんですか？

鯉坂 | 高垣さんの学会へのお返事に、「庭園を残して建替案を提案してほしい」と書かれていましたので。

古谷 | 主旨としては、保存要望を出してこられたけど、保存はとにかく不可能なので…。

鯉坂 | そうです。建替案を出してくれと…。そうしたら本館を残す案が出てきたんですね。

古谷 | どちらの案にせよ、少し行き違いがあると思うんです。

鯉坂 | 「私が頼んだ内容と違うから、話は聞かない」と最初はお話をされていたそうです。それを小林先生が説得された。収益的に、まず引越しの費用が非常に少ないこと、そして閉鎖期間が短いため経済的にもメリットがある、そういうご説明をされました。基本的には結局、使い続けながら本館が改修できるために、非常に圧縮した予算で再生できると…。経営者の方ですからね、最終的にはご理解いただけただけだと思います。

古谷 | 経済原理の観点からもメリットがある。

鯉坂 | そう、保存再生にメリットがあったんです。

古谷 | その辺の試算はどなたがされたんですか？

鯉坂 | 学会の案にも費用が明記されていました。工程と企画が…。

橋本 | 企画書が出ていましたね。

鯉坂 | ここに工事費26億と書いてあります[6]。実際には新館を建て替えていませんので、これよりも安い費用で改修することになりましたが。

古谷 | このような提言は、普通はおよそ功を奏しないことも多いのですが、今回は本当に希有な例だと言われていますよね。それは単純に文化的な意義だけでなく経済的な検証も行って、つまり説得力を持った提案ができた。それと、さっきの1975年の改修の時とは違って、今度は社会的背景も、DOCOMOMOとか近代建築を遺産として考える姿勢とか、社会的な背景が少し変わってきている時期でもありますね。

鯉坂 | ただ、モダニズム建築の保存という例はたぶんまだなくて、様式建築とかレンガ造の建築の方が、一般の方たちから見たら価値があると思われていたんです。モダニズム建築が保存に値するかということは、この国際文化会館が契機になったと思います。

古谷 | そうですね。そういう意味では、本当に幸運なことだったと思います。

再生のための保存 耐震改修へ

古谷 | 保存再生が決まってからは、いろいろ大変でしたよね、再生するといっても、50年前の建築ですからね。しかも免震の話が出たけど、それはできないとか。

鯉坂 | 阪田(誠造)さんが委員になられて、国際文化会館建築諮問委員会のもとに阪田ワーキングができ、保存再生が進められました。そこに小林先生が入られ、後に構造の今川(憲英)先生も加わり、この3人の方が監修というかたちでした。そして早い段階で、地下に旧岩崎邸の礎盤が残っていることがあり、計画が免震から耐震に変更になりました。

古谷 | 今川さんを起用なさったのは…。

鯉坂 | 阪田先生のご推薦でした。当時、阪田先生は「いわゆるバツテンプレースを入れるような改修じゃ意味がない」、「庭との連続性をちゃんと保ちなさい」とかなり厳しくおっしゃっていました。本館の持っている空間性の良さを損なわないかたちで耐震改修なきゃ意味がない。結局、目に付く補強はしていません。結果としては講堂をどうつくるかがキーでした。1階を壊してつくる案と1階を残してつくる案の2つがありました。検討の結果、1階を壊して吹抜けにした案になり、地下と1階の構造を新しくして入れ替えたため、強固になりました。それとエレベータシャフトを新たに構築しました。最初は床スラブも補強しなければいけない状況だったのですが、その2つの補強により、少しの耐震補強で耐力を得ることができました。

古谷 | 上部はほとんど手つかずの状態でもつようできてたわけですね。それも現代だからこそできたようなものだったんですね。だって上を残したまま下に増築するような方法ですから、この時代になっていたからこそできた。

鯉坂 | 技術的にはそうなのですが、実はこの時期だけしかできなかったんです。この後、建築基準法が変わり困難になっています。耐震偽装事件の影響で、2005年の6月に建築基準法が改正になり、5月31日に着工しました。そこが「岩崎小彌太記念ホール」になりました。

古谷 | 後にも先にもこの時期じゃないとできなかったかもしれないんですか、なるほどね。この他に今回のリニューアルで画期的だったことは、ヒノキの木製サッシの話ですね。

鯉坂 | ヒノキの建具は白木、もしくはオイルステインの塗装だったんですが、経年変化で、すでに外側がペンキ塗装されていました。反りや締め付け不良もあって、風雨が強いと室内に雨が侵入する状態で、会館からは「アルミに交換してほしい」という要望が出ていましたので、アルミ建具で全部見積もっていたんです。ところが意匠的な納まりも良くないし、コストもかなり掛かることが分かり、木製建具の再利用を提案しました。「まさか今の建具をそのまま使うつもりではないでしょうね」と言われるほど、水密・気密性能が低下していました。そこでアルミの型枠を製作し、ガラスを複層ガラスに交換し、モックアップをつくってもらいました。木製の下枠はかなり傷みがひどいものもあり、金属カバーを取り付け、建具全体を工場で締め直してもらったりして、再塗装をすれば何とか再利用の可能性が見えてきました。そして、完成したモックアップを閲



地下ホールの増築：2階床構造部から下部を解体しながら躯体工事を進めた[提供：三菱地所設計]



国際文化会館で談笑する橋本氏(中)、鯉坂氏(右)と古谷氏(左)

係者皆さんに確認していただいたところ好評で、既存の木枠を再利用することになりました。

橋本 | 鯉坂さんの功績が大きいんだ。

鯉坂 | コの字型のアタッチメントを付けて複層ガラスに替えただけですが。

橋本 | 複層だとのみぞみしろが変わっちゃうし…。

古谷 | 厚みが納まらなくてね。

鯉坂 | 見付けを少し厚くしているので、オーセンティシティの面から言うとはあまり良くないんですけど、建具本体を残すことができた。それが良かった。非常に肉厚のヒノキの材でしたからね。

古谷 | そうでしたね、でもそれがなければ難しかったでしょう。それからもう一つ、大谷石の外壁。基本的には外壁をもう一度、もとに戻すという。

鯉坂 | 大谷石も補強し、積み直しました。保存再生の時には、お金がない方がオーセンティシティが継承されます(笑)。

古谷 | レプリカにならない。古い部材も何とか活用していこうということですね。

鯉坂 | 家具も残しました。そうしたら「雰囲気が変わらないね」と言われています。建具はもとの白木に戻したかったんですけど、ペンキが塗られていて戻せなくて、それで表側は家具と同じ色に塗装をしました。出来た当初よりかなり濃い色になっています。

古谷 | なるほどね。とにかく、こういう状況で一連の保存再生が行われた。橋本さんは今回の改修をどう思われましたか？

橋本 | 僕はね、ずっと蚊帳の外でね(笑)。松本洋さんから電話があって、ごあいざつに行くので図面提供とか協力してくださいと言われたんです。その時に鯉坂さんもお見えになって。事務所にある文化会館の図面を全部…。

鯉坂 | お借りした…。

橋本 | ともかくお任せということ。すでに建築学会の動きもありましたので…。それと僕は鯉坂さん個人をよく知っていたんです。前川の生誕100年の時[11]に、鯉坂さんも編集スタッフとしてご協力をいただきましたから。鯉坂さんは保存に関して高い見識を持って

おられることも、保存に対する考え方も僕は理解していました。

鯉坂 | 信頼していただいて…。

橋本 | 以後、僕らはずっとノータッチで、出来上がった時に1泊させていただいていろいろと見学したんですよ。やっぱりうまいと思いましたね。前川事務所だったらこうはいかない…という感じがしました。

鯉坂 | そんなことはないですよ。

橋本 | 特に階段を拡張して広げた部分とか、階段の扱いとか、先ほどおっしゃっていたサツシも、これぞよく残してくれたと思いました。

大改修の効果と、

その後の影響

古谷 | この大改修が終わってから『新建築』で阪田誠三さんが、「再生保存」という言葉を使っていらっしゃいましたね[12]。

鯉坂 | 保存のための再生じゃなく、再生のための保存だという言い方をずっとされています。

古谷 | そうです。とにかく機能を損なって、標本のように残っていてもしょうがないと。それを使い続けていくことに意味があるとお書きになっていますが、全くそのとおりだと思います。世の中に長く残っている建築というのは、その長い時代の中でなにがしか、いろいろな変容や時代が求めるものに対応してきた。それがあつて、またはそれを許容することで、建築そのものが永らえていく。最初のものだけに固執してしまつと、逆に永らえることができなくなって、使えないものにお金をかけて維持しなければならなくなる。極端な言い方をするとホルマリンを取り替えながらホルマリン漬けを維持するのに近い。この国際文化会館の事例があることで、再生保存の考え方が非常に分かりやすく、目に見えるものになったんじゃないかと思えますね。

橋本 | やはり見極めですよ。この建物の価値、それを例えば改修する人によっては、その時代時代のものを継ぎ足していけばいいという考え方もある。そうすると時代のパッチワークになっちゃう。それはそれで面白いかもしれないけど、でもオリジナル性という問題を残していこうとすると、何を残すべきかという見極めをして、何年たつてもそれを感じられるつなぎ方…。そういう意味でこの国際文化会館の庭とか、岩崎小彌太の足跡があつて、建物の歴史があつて、こういうふうに使われている…というものをいかに見えるようにするか。それが見えなくなるような改修では、再生にならない。

鯉坂 | そうですね。文化財の指定をする時に「本来はどこが重要か」ということを最初に決めなきゃいけないんです。日本はそれをやっていなくて、全体が何となく重要文化財です…ということになってしまうと、後で再生が非常に難しいんです。

古谷 | 何を継承して、何を変えていいのかが分からな

くなる。

鯉坂 | そうです。それを最初から明らかにしないといけないんです。

橋本 | 改修とか保存とかリノベーションとか、いろんな言葉が使われていますけど、再生して保存していくものの言葉の定義も含めて、国際文化会館はひとつのモデルだと思います。逆に言うと、国際文化会館はこれを大事にしているから残っている建物である。それを会館としてアピールにしていけたらどうかと思えますね。それで利用者、見学者が増えて、その価値をみんなでも共有する。そういうふうにしていかないと、やっぱりなくなっちゃうんです。そういう意味では、ここの再生保存は非常に稀な例です。

鯉坂 | そうですね。これが出来てから、建築学会は単に保存要望書を出すだけじゃなくて、こうやったら残せるんじゃないかという提案もなるべくしていこうという雰囲気になってきているのではないのでしょうか。JIAも同様ですが。

古谷 | これが功を奏して、最近は「もう一度計画の見直しを一から考えましよう」とか、そういう例が少しずつ出てきていますね。

鯉坂 | いいことだと思いますね。

橋本 | これからなんでしょうね。

鯉坂 | でも本当にこれが残つたのは、JIAの兼松絃一郎さんを始め、この保存に対して非常に積極的に熱意を込めてやって下さった方がいらしたからなんです。それからギリギリ滑り込みで確認申請を出して竣工検査済証をもらったんですが、役所の方々も話題になった建物だということもあつて、非常に協力的に対応して下さいました。もちろん、社内でも良い上司と部下に恵まれました。本当にありがたかったですね。

古谷 | 今日はいろいろなどころで「何かがちょっと掛け違つたら、こうはならなかったという奇跡のようなお話」を伺いました。僕は1955年生まれだから、全く僕と同じ年なんですよ、この建物は。50年たった時に耐震改修していただいた。鯉坂さんは「これまでの50年 これからの50年」とおっしゃっていますが[13]、建築の保存を考えた時に、この考え方はとても示唆深いものがあると思いますね。つまり絶えず生まれた時の状態に戻して、若返らせていくのではなく、次の時代に残し、活かしていくために必要な手を尽くすということでしょうか。

鯉坂 | また50年もつてくれて、その時にはまた新しい技術で100年もたせてくれればいいんじゃないかなと思いますね。

古谷 | 貴重なお話をどうもありがとうございました。

[収録：2015年4月5日]

[取材協力] 国際文化会館

はしもと・いざお——建築家・前川建築設計事務所代表取締役／1945年生まれ。1970年、日本大学理工学部建築学科卒業。同年、前川國男建築設計事務所入所。1994年、前川建築設計事務所取締役役に就任。2000年より現職。
主な担当作品：横浜市教育文化センター[1974]、福岡市美術館[1979]、埼玉県立自然史博物館[1981]、国立音楽大学講堂[1983]、国立音楽大学附属幼稚園[1983]、神奈川県立音楽堂改修[1988・2009]、千葉県東総文化会館[1991]、児玉町総合文化会館[1995]、国立音楽大学附属小学校[2007]、弘前市民会館改修[2015]など。

あじさか・とおる——建築家・鹿児島大学教授／1957年生まれ。1981年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。1983年、同大学大学院修士課程修了、三菱地所第一建築部。2001年、三菱地所設計。2013年より現職。
主な担当作品：三菱(現・三菱東京UFJ)銀行情報センター[1993]、フェリス女学院大学図書館・7号館・キダーホール[2001]、明治安田生命ビル街区再開発(明治生命街区再開発)[2004]、フェリス女学院大学緑園体育館[2005]、衆議院新議員会館[2012]など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授／1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。
主な作品：アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE/ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとよテラ」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、鶯庵[2009]、T博士の家[2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビシア滋賀工場[2012]など。

鼎談後記——古谷誠章 融通無碍なる改修が、 場所の記憶を未来につなぐ

国際文化会館は建築に関係している人なら、誰も一度ならず訪れたことがある場所だろう。僕自身も友人や教え子の結婚式、大学の恩師の誕生会、先輩や仲間のいろいろな賞のお祝いの会など、年に数度はここへ足を運ぶ。今でも各界の交流の息づく場所であるこの会館が、今日こうして同じ場所に建ち続けていることの意義は、改めて思い返してみると実に大きなものがある。建築はそれ自身が「記憶装置」として働くものだというのが、僕の持論でもあるが、今ここに建築が現存していればこそ、当時まだ若手だったとはいえ我が国を代表する3人の建築家が協同した頼末や、あるいはそれ以前のこの会館の出自であるとか、その後の日本経済の変化の潮流に揉まれた中で辿った運命だのを、こうしてつぶさにさかのぼってひもとくことができる。すでに当の3人の声を聞くことはかなわないが、その後の数度にわたる保存再生の過程で、折節に過去の歴史を振り返っていただいたお二人のお話を通して、それぞれに貴重な事柄をここに書き記すことができたのは幸いだった。

橋本さんにお持ちいただいた丁寧に保管された設計原図から、改めてその初期の案をよく見ると、今では僕たちの頭にすっきり定着しているメインエントランスのイメージが、最初は位置も入り方も全く違っていたことが分かる。今日のように坂を上って奥の車寄せまで行き玄関に正対すると、奥に広がる庭が透けて見えるイメージは、実は1975年の増改築の時に変更されて出来たものだ。一方で、当初は更地にしてから建設されるはずだった地下階には、岩崎小彌太郎時代の基礎が残され、それは今でも見ることができる。また小川治兵衛の手による庭は、3人の建築家が別々に出した初期のコンペ案から今に至るまで、常に最大限に活かされている。つまり、国際文化会館として建設された時点においても、それ以前のものが保存されている要素もあるし、同時に、それ以後の度重なる増改築時に、改良・改変が行われて変わってきたところもある。こうしてみると、経済状況などに翻弄されながらも、そのたびに優れて融通無碍なる空間のリノベーションが行われてきたと言えるのではないか。同時にそこに集った人々の記憶も、そこに紡がれていると言えるだろう。

そんなひとつつながりに織り込まれたこの場所の歴史の中に、そしてこれからの50年の未来に向けて、この建築が建ち続けていられることは、誠に同慶の至りだと言うほかはない。その節々で注がれた橋本さんや、鯉坂さん、また小林正美さんら関係者の皆さんの情熱、併せてその時々々の会館の英断に心から敬意を表します。

彫刻家・上田快さんと 上田亜矢子さんの巻

Kai Ueda | Ayako Ueda

中村好文：文とイラスト
Yoshifumi Nakamura

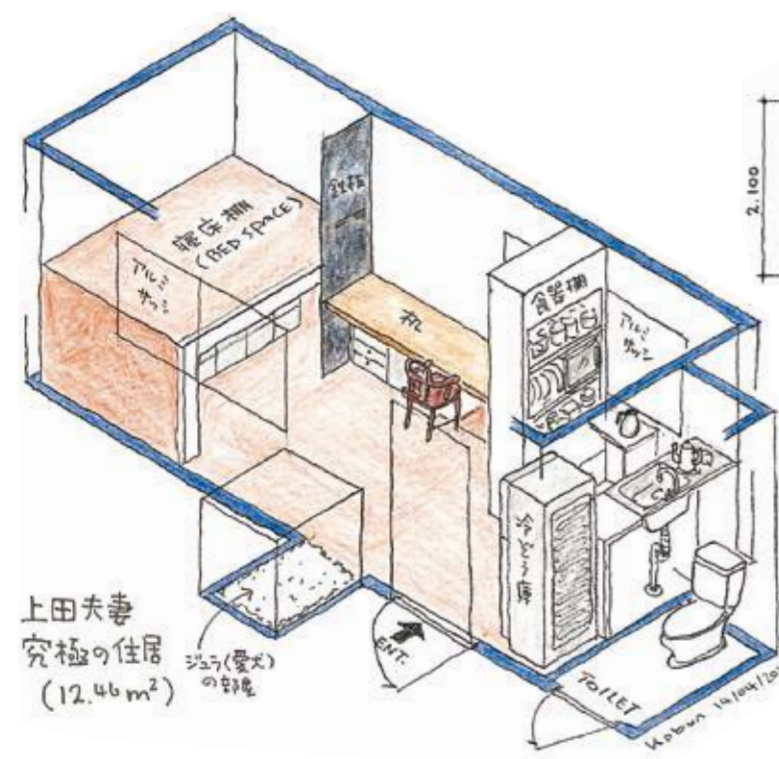
彫刻家夫妻

お二人そろって石の彫刻家である上田さん夫妻のアトリエと住まいは山梨県の北杜市にあります。2ヶ月ほど前、取材依頼の電話をしますと、電話に出た亜矢子さんはちょっと驚かれた様子で「え、うちですか？ 家は、まだできてないし、いつできるかわからないんですけど…」と、怪訝そうなお返事でした。でも、じつは私は家ができていないことを承知の上で電話していました。上田夫妻の現在の住まいぶり、暮らしぶりを知っている知人が「あのお二人の住まいと暮らしは、潔くて素敵ですよ」と教えてくれたので、取材にかこつけてその深い暮らしをぜひ見せてもらいたいと考えたのです。建築家の住まいは完成していないと真価が分かりにくいものですが、アーティストの住まいは工事中でも、見るべきところ、学ぶべきところがたっぷりある…というのが、私がこの連載で学んだことのひとつでした。建築家にとっての住まいはそれ自身が作品ですが、アーティスト

にとっては作品は作品としてほかにあり、住まいは作品ではなくて、ある意味では「生き方の姿勢が、かたちとなって見えるもの」だからかもしれません。というわけで、なかば強引に押しかけた格好になってしまいましたが、上田夫妻は大らかな態度で迎えてくれました。私は以前からギャラリーで開かれた2人展などで2人の作品は存じ上げていましたが、直接お目にかかるのは今回が初めてでした。さて、この夫妻のふわっとした独特の雰囲気を読者にどう紹介したものでしょう。まず、お二人に共通しているのは、穏やかな表情、ゆったりした話し方、静かな物腰です。「似たもの夫婦」と言ってもいいし、「仲のいい兄妹」を見ているようだと言ってもよさそうです。でも、いちばんよく似ているのは世の中の常識や約束事にとらわれない浮き世離れた「自由自在感」かもしれません。それでいて裡には揺るぎのない芯を秘めていることが会話の端々から感じられるところもそっくりでした。



上田快さん自作
愛用の石頭ハンマー



左-石頭(せつとう)ハンマーを振って大きな石の塊を刻む快さんの作品 | 右-石に潜んでいる美しい形態を粘り強い作業で発掘する亜矢子さんの小品



左-森の中に折板屋根を載せた赤い鉄骨の柱列が浮かび上がる。奥の一部分が壁で囲まれ、アトリエ兼書斎になっている | 右上-むむ？ この窓は…？ | 右下-むむ？ この階段は…？



ほぼ二層分の高さを持つアトリエ。大型の自動シャッターは上田夫妻が奮発して設置したご自慢の部材。左隅にチラリと見えるスペースが亜矢子さんが小品を制作するアトリエ

紹介がちょっと長くなりましたが、夫妻の人となり、あますところなく「住まいとアトリエ」に投影されているように見え、最初にお二人の印象を予備知識として読者に知っておいてもらおうと、これから書くことがすんなり理解してもらえらると思ったのです。

大物へのオマージュ

上田夫妻の家は、JR長坂駅から車に乗って、田畑の脇を通り過ぎ、森や林の間を通り抜ける田舎道を走ること15分ほどのところにあります。さきほど「浮き世離れした」と書きましたが、そこはまさにそんな感じのする場所でした。どうやら山林を切り開いて建物を建てる場所を確保したらしい敷地で(といってもどこからどこまでが敷地なのか分かりませんが…)全体はゆるやかな斜面になっています。森を背にした一面に工事途中の鉄骨の柱と梁の骨組みや、車の修理工場のような二層分の建物や、コンテナのようなものや、現場小屋みたいなものが、離れたり、連なったりして建っています。それぞれは思い思いの工法と思い思いの素材でできているので、表情はまちまちで、ここには大らかな「自由自在感」が漂っています。

最初に見学させてもらったのは、車の修理工場のようなアトリエ棟にある小部屋です。ここはおもにデスクワークをしたり、石を彫刻するための道具や本などを置くために使われている部屋ですが、入口前の狭まったところを肩をすぼめるようにして通って入るせいか、入ったとたんぽかんと抜ける白い吹き抜け空間に迎えられてキツネにつままれたような気持ちになりました。ここに、こんな部屋があるとは思ってもよらず、心の準備のないまま部屋に入ってしまったからです。

「こんな部屋」と書きましたが、本当は「こんな静謐な部屋」あるいは「こんな神聖な部屋」と書くべきでした。森に面した壁に縦長の窓がひとつ、その前に木製の机、反対側の壁にはロフトに上がる鉄板をジグザグ型に折り曲げただけの快さん作の階段。部屋の片隅にはガラスの小窓の付いた円筒型の簡素なストーブがあり、薪が気持ちよさそうに燃えている様子が窺えました。じつは、快さんとお喋りしながらこの部屋に入ってきた私は、部屋に足を踏み入れたとたん沈黙し、姿勢を正していました。この部屋に漂う特別な空気がそうさせたのです。次の瞬間、私の脳裡に浮かんだのは「チャペル」という言葉です。そう、この言葉ならこの部屋の気配をたったひとことで表現できるのです。そして、も



アトリエで上田夫妻から石頭(せつとう)ハンマーの講義を聴く

しかしたら、上田夫妻もそのつもりでこの部屋を作ったのではないかという考えが頭に浮かびました。というのは、さきほど書いた窓が上下二段になっていて、無目(中棧)の横のラインと、引き違い建具の召し合わせの縦のラインが見事な十字架を生み出すように作られていたからです。十字架を持つこの窓から森の様子を見ていた私は、フィンランドのオタニエミにあるヘイッキ・シレン夫妻の設計した有名な「森のチャペル」を思い出さずにはいられませんでした。ほんやり、そんなことを考えていますと、快さんがジグザク階段を作った時の苦勞を聞かせてくれました。それを受けた私がこのタイプの階段を作るときの簡単で構造的にも強い方法を指南したりしましたが、その階段の話をしながら心の中で「あ、そうだったんだ!」と、思わず膝を打ちました。この部屋で思い浮かべるべき建築家はヘイッキ・シレンだけではなく、もうひとり大物がいたのです。

察しのいい読者なら、もうお気づきかもしれませんね。そう、ここで思い浮かべるべきは、「ルイス・バラガンの自邸」だったので。上田夫妻に質したわけではないので、私のまったく見当外れの推測かもしれませんが、私としては、この部屋は上田夫妻のルイス・バラガンへの遥かなオマージュだったのではないかと睨んでいます。

石工の面影

次に見学したのは快さんがおもに大型の石の彫刻を制作しているアトリエです。ここは、石を叩き、削り、磨く作業をするところなので、半屋外の空間です。ガッチリとした鉄骨造の骨組みにスチール製の折板屋根が載せられ、ところどころに折板屋根と同じ断面のポリカーボネートの屋根が嵌め込まれているので、雨の日でも照明が要らないぐらいの明るさでした。厳冬期や風雨・風雪の強い日は開口部に取り付けた大型シャッターで閉ざすことができます。その大型のシャッターは電動式でその電動式というところが、どうやら上田夫妻のちょっとした自慢らしく、亜矢子さんは「このシャッターは自動式なんです」と「自動式」に力を込めて説明してくれた上、実演までしてくれました。

自慢と言えば、ここでは快さんが石を叩くお手製でご自慢の石頭ハンマーを見せてもらい、なぜそれがいい道具なのか熱っぽく語ってもらいました。道具を撫でさすりながら語られたその話と、嬉しそうな顔には、彫刻家というより石工の面影がのぞいていました。

食う寝るところ住むところ

上田夫妻が住まいにしている建物はアトリエ棟の向かい側にあります。もともとは現場小屋などで使われる軽量鉄骨とパネルでできたプレファブ小屋で、トラックに積んできてクレーンで吊り降ろせば、一件落着(一軒落着?)という至って簡素な箱型建築です。

サイズは、長さ5,400mm×幅2,100mm×高さ2,200mmで、これに950×1,400mmのトイレが付いています。延床面積は12.46㎡、畳でいえば八畳弱です。この中に上田夫妻が日常生活を送るために必要なものすべてが詰まっているのです。とりわけ、台所はシンプルな食器類や美しく使い込まれた鍋やフライパンが効率よく収納されていて、思わず見惚れるほど素敵でした。ところで、この住まいは「最小限住居」というより「究極の住居」と表現したほうが適切かもしれません。この面積に日々の暮らしに必要なものを詰め込んだら、モノで溢れかえって身動きが取れなくなりそうに思いますが、室内を見まわすとそれなりに広がりもあり、十分に快適そうなのがじつに不思議です。しかし、私が目を瞠ったのは、その極限的な住居のサイズや、限られたスペースを手玉にとって巧みに住みこなす能力だけではありません。この簡素さわまりない住まいに「食う寝るところ住むところ」という人間の暮らしと住まいの本質を的確に言いあてた言葉が、ピタリと重なり合うそのことでした。この住まいは、「鴨長明の方丈」、「ヘンリー・デヴィッド・ソローのウォールデンの小屋」、「ル・コルビュジエの休暇小屋^{キャブロン}」など、古今東西の小屋の名作に較べても遜色がない…どころか、勝るとも劣らないものだ、私はただただ感心しながら、いつまでも室内を眺め回していました。

無伴奏チェロ組曲

最後に、軽やかな鉄骨の柱と梁がむき出しになっている作りかけの建物について触れておきます。完成した暁にはここが夫妻の住まいになるとのことですが、現在は一部分だけが壁で囲まれていて、快さんのアトリエ兼書斎になっています。ここにもまた、最初に訪れた部屋によく似たチャペル的な静寂が支配していました。高い天井に開けられたふたつの天窓から柔らかな自然光が、本棚や、部屋の奥行きいっぱいに取り付けられた作業机の上に降り注いでいました。本棚の脇にチェロのケースが置かれているのに気づいた私が、「これは、どなたが…?」という意味を込めた眼で快さんを見ると、快さんから「あ、私が弾くんです」という応えが返ってきました。

「楽器のある部屋は懐かしい」と書いたのは永井荷風ですが、楽器には部屋の品格を引き上げる不思議なオーラも備わっているような気がします。そして、チェロといえば、いつも私の耳元には、バッハの無伴奏チェロ組曲の力強いメロディが流れるのですが、ふと、傍らにあった譜面台をのぞくと、なんと! その無伴奏チェロ組曲第2番の二短調の譜面が載っていました。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、栄道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REIHUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築上・下』[新潮社/2005]、『Comeon-amyhouse』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]、『建築家のすまいぶり』[エクスナレッジ/2013]など。

[撮影:相原功]



「コの字」型に配置された様々な表情の建築群を満開の山桜が大きく覆っている。一番左手のプレファブ物置の奥にある白い建物が見える



アトリエから住居部分を見る。入口ドア左脇の白い四角の箱は室内側に出入口のある「犬の部屋」



左一台所の一隅。手作りの棚に白を基調にした簡素な食器類や台所用具が綺麗に収納されている | 右一ワンルームの室内の様子。奥に見える白い「寝床棚」の上に布団を敷く方式。ふと、子供のころ押入で遊んだ記憶が蘇る



作りかけの鉄骨の建物の一部を壁で囲ったアトリエ兼書斎。耳を澄ませばどこからか無伴奏チェロ組曲のメロディが聴こえてきそう…

子育て世帯を呼び込み まちを元気にする

1980年頃は、夫婦のうち男性が主な働き手となる世帯が主流であった。その後、社会の意識や経済情勢の変化により、結婚・出産後も働き続ける女性が増加し、1997年には共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回った。

2003年制定の「次世代育成支援対策推進法」による男性の育児休業取得の奨励や、改正男女雇用機会均等法施行などもあり、働く女性は増加を続け、現在では共働き家庭が定着している。さらに、2015年4月に「子ども・子育て支援新制度」が施行され、子育てを地域全体で支援し、子どもを持ち、家庭を築いていくための環境づくりを自治体や企業が積極的に進めている。

少子高齢社会を迎え、持続可能な地域社会を創造していくためにも“子どもを産み、育てやすい社会”の形成が欠かせない時代となった。地域の担い手となる子育て世帯を引き寄せるための取り組みを紹介する。



国・企業・地域で支え合う、 これからの子育て環境 「子ども・子育て支援新制度」が目指すもの

森田明美
Akemi Morita
東洋大学社会学部教授

「子ども・子育て支援新制度」が目指した姿

「子ども・子育て支援新制度」(以下、「新制度」)の議論と施策の提案は、第1に、子どもと子育て支援にかかわる施策についての財源の統合、第2に、幼稚園と保育所という日本にある2つの就学前の施設を一元化した“こども園”を新設すること。これによって「すべての子どもへの育成環境を保障し、子どもを大切に作る社会」の実現を目指すものである。就学前の子どもと子育て家庭を対象とするこれまでの乳幼児施策のパラダイム転換を図るために、消費税が10%になった時の増収分から毎年7,000億円程度をその事業に充当する方針で始まったものである。この議論が始まった背景には、小泉政権時代から10年余り続く都市住宅地における保育所の待機児の増加に対して、緊急な対策を講じなければならない政府の課題と、幼稚園と保育所の一元化への取り組みという政府与党が考える制度再構築への対応を同時に行わねばならないということがあった。言い換えれば、世界の先進諸国が整備してき

乳幼児は24.3から31.5%、幼稚園は24.9から25.1%、家庭等は50.9から43.4%となっている(国立国会図書館・野辺英俊氏の計算)。幼稚園を利用する割合はほとんど変わらず、家庭で育てられていた乳幼児が、幼い年齢から保育所を利用するようになっている。近年、出生児数は減少しているにもかかわらず、保育所の定員と利用する子ども数は増加し、2014年4月には保育所24,425カ所で、利用する子ども数は2,266,813人(定員2,335,724人)となっている。都市部を中心に待機児は存在し、3歳未満児を中心に21,371人(2014年4月現在)いる。

子ども・子育て支援の課題意識

「新制度」の議論において、前提とされた子どもの育ちと子育て支援の課題は、次のとおりであった。妊婦健診や子ども手当、一時預かりを、すべての子どもや子育て家庭を対象にした基礎給付とし、産前産後・育児休業給付、幼保一体給付や放課後給付などを両立支援・保育幼児教育の給付として、市町村で子ども・子育て特別会計をつくり、地域の実情に応じて給付をする。事業主や国が出す負担金や補助金によって形成された国の年金特別会計「子ども・子育て勘定」として財源を一元化。実施主体である市町村は、保護者の申請を受け、誰もが平等に客観的な基準に基づき、保育の必要性を認定した上で、そこから給付を受けるという考え方である。これまで、幼稚園は文部科学省、保育所は厚生労働省など事業ごとに所管や財源が分かれていた子ども・子育て支援施策を、包括的・一般的な制度にして、国に「子ども・子育て勘定」という大きなお財布をつくり、企業からのお金も入れる。そこから必要なお金をみんなで議論して、現金給付の代表格である子ども手当、現物給付の代表である認定こども園などに適切に出していこうというものである。そして「子ども・子育て包括交付金」に子どもだけしか使えない制限を付けて確保し、自治体の創意

乳幼児保育の利用実態

日本の保育は、1999年と2009年と比較すると、就学前で保育所にいる

工夫で子ども・子育て支援施策を活性化させるという自治体主権の原則が盛り込まれた。そこでは、自治体が子ども施策を上位施策とし、市民と一緒に作り出す力があるかどうか問われる。保育サービスの費用は70-80%が人件費であり、保育所保育士の賃金を支え、良い労働条件を確保していくことが大切である。そこで問題になったことは、共通のお財布に、企業も国もきちんとお金を入れてくれるかということであった。

参加による「新制度」の運営

誰もが必要な時に必要な種類の保育を必要なだけ利用できる量が用意され、どの子も生まれた家庭や地域で差が出ない共通の保育内容と保育制度を認定こども園というかたちで実現することが求められたことについて、この議論では、既存の幼稚園や保育所がどこまで変わることができるかが問われた。特に幼稚園には、保育所並みの子どもと家庭への養護を課した時、その負担に対して保育所並みの運営費用の助成を国と自治体は出し続けられるかということであった。財源確保がされずに対象の拡大をさせる方針が出るたびに、保護者や事業者は制度改革に対して大反対をしたのである。そこに不足しているのは、新しい供給主体と一緒に楽しい子育てをするための子育て支援の場や事業を多様なかたちで地域につくり出すこと。同時に、本当に必要な保育時間や日数、サービス量と種類を洗い出し、掛かる費用を整理して総量を見直し、誰がどのように費用を負担するのかを国を挙げて議論することになった。また、保育に必要な費用を下げるためには、子育て中の働き方を見直すことも大切になる。保育施設の利用を減らすことで、子どもとの時間が増え、豊かな子育て環境が実現できる。またそのことで多くの人が保育施設を使えるようになる。子どもの健やかな育ちと、働くことが対立することなく、親や子どもの当たり前前の生き方として支えられる保育・

教育の制度が出来上がっていく。こうした議論をする仕組みとして、これまでの有識者だけでなく、事業主代表・労働者代表、子育て当事者、子育て支援当事者等が、子育て支援の政策プロセスなどに参画・関与することができる「子ども・子育て会議」が、国や都道府県、自治体に設置されることになった。

「新制度」の議論の価値と課題

2013年度には保育ニーズ把握のための実態調査、そして2014年度には、国の議論がなかなか進まない中で、任意設置であったにもかかわらず多くの基礎自治体は「子ども・子育て会議」をつくり、議論を始めた。施設の整備量や施設の設置基準をつくり、許可、利用基準、利用時間と利用料など、子ども・子育て施策を本格的に議論した。時間不足で十分な議論がし尽くせなかったが、手探りしながら行った議論は、自治体の財産になった。問題は、消費税増加の先送りが決まり、限られた財源の中で再配分をしなければならなくなり、結果、当初目指した幼稚園の認定こども園への一元化という移行が進まず、既存の幼稚園と保育所に加えて、小規模の保育施設が多数整備され、多面的な保育制度がつけられることになった。制度は一層複雑で、分かりにくくなってしまったように感じる。今後は進められている整備計画をよりものとして具体化し、必要な人が必要な時に使ってもらえるような仕組みとして提供できるかということである。

ポスト次世代育成支援行動計画の行方

2014年4月に10年間延長されることになった時限立法の「次世代育成支援対策推進法」に対応して、多くの自治体は、第2期の次世代育成支援計画を作成した。この中に「子ども・子育て支援事業計画」を位置付けた自治体も多く、「子ども・若者計画」を連続した計画として検討している自治体も登場している[2]。自治体は、子どもの誕生から親にな

るまでを、総合的・継続的に施策をつくり上げることが可能となった。ようやく、この段階まで辿り着けたと言える。ここから事業を具体化していく中で、参考にしているのが国連ユニセフの「子どもにやさしいまちづくり」の9つの建築ブロックである。子どもの権利条約を具体化するために、一人ひとりの子どもが持つ力を発揮できて、楽しく暮らせるまちの条件として以下を提唱している。

- ①子どもにやさしい法律
- ②都市レベルの子ども計画
- ③子どもにやさしい制度的枠組み
- ④事前および事後の子ども影響評価
- ⑤子ども予算
- ⑥市内子どもの状況分析
- ⑦子どもの権利の周知
- ⑧子どものための独立したアドボカシー
- ⑨子どもの参加と意見の尊重

その内容は、法律、計画、制度、予算のみならず、子ども自身が参加し、それを尊重するという方法にまで言及をした総合的な視点を持ったものである。これらを具体化しながら、子どもにやさしいまちをつくり上げることが求められて

[1] 「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」
[2] 筆者も参加した東京都世田谷区の「子ども計画」(2015年3月)は、子ども・子育て事業計画を含み、若者計画を連続したものとして位置付けて策定されている

参考文献：森田明美「地域での暮らしを実現する子どもと家庭への福祉」『コミュニティソーシャルワーク 14』[中央法規出版/2014]p5-17、「子どもの権利—アジアと日本」[共編著、三省堂/2013]

もりた・あけみ——東洋大学社会学部教授・東洋大学社会学部センター長/東洋大学大学院社会学研究科修士。日米の共働き・シングルマザー・シングルファーザー、10代の母親など子育て家庭の実態と、保育所・幼稚園・児童館・放課後児童クラブなどによる子ども・子育て支援に関する実証的研究を行ってきた。地域や家庭で子どもが育つことを支える仕組みをどのようにつくり出すかが研究の中心課題。関東を中心にして、保育所や児童養護施設の理事・評議員・苦情解決委員としての活動や、13自治体の子ども計画や子育て支援計画策定と推進・評価にかかわってきた。また、子どもの権利条約を日本の子どもの育ち支援にかかわる人たちに徹底するため、広く子どもの権利実現のための実践研究や国連NGO・NPO活動にもかかわっている。社会的な活動としては、東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長、世田谷区子ども・青少年協議会会長、西東京市子ども子育て審議会会長ほか。主な著書：「子どもにやさしいまちづくり」[共編著、日本評論社/2004]、「子どもにやさしいまちづくり第2集」[共編著、日本評論社/2013]など。

地域で子どもが育つための居場所をつくる

定行まり子

Mariko Sadayuki
日本女子大学家政学部住居学科教授

子どもの視点に立った“子育て”支援

“子育て”支援とは、子どもを主体に考えるということです。“子育て”支援となると親の視点に立っていて、大人に対する支援という意味合いが強い。親への支援も必要ですが、本当に子どもにとって大切な環境を築き上げるために、まず子ども自身がどう育つかということを重視しています。

子どもといっても、乳幼児だけではなく、児童福祉では0歳から18歳までを指していますが、実際には胎児の時から子育ては始まっていて、乳児、幼児、小学生、中学生と構成は多様です。胎児期から経済的に自立するまでを連続的に考えて支援策を準備することが必要です。

日本女子大学定行まり子研究室(以下、研究室)では、それらのことを踏まえ調査・研究を進めてきました。子どもは低年齢であるほどポテンシャルが高く、1年間で大きな変化が見られます。今は特に待機児童の問題などもあり、研究テーマとしては就学前の保育が一番多くなっています。他にも小学生の遊びや学童保育問題、中学生の環境についてなど、さまざまな発達段階での調査をしています。その時々研究テーマは社会の課題に連動しており、中学生の研究を始めた直後の1997年には、神戸連続児童殺傷事件が起こりました。その頃は中学生の居場所がなく、児童館の主な利用者といえば小学生で、中学生が公園やコンビニに集まっていると、小さい子ども連れのお母さんたちが危なくて近付けないなどと言われていました。都市計画や地域計画、住戸計画などでも、まさに青少年の居場所がな

いことが注目された時期でもあります。

中高生の居場所を確保する

中高生を主体とした児童館は、杉並区の児童青少年センター「ゆう杉並」が先駆的な取り組みとして有名です。1997年に建てられたRC造の複合施設で、中・高校生運営委員会を設置し運営を任せることで、子どもたちが責任感を持ちながら活動できる居場所づくりを実現しています。しかし、その後はバブル崩壊と不況によって、これまでのように大きな施設を次々と新築できる状況ではなく、既存の建物を工夫して活用するという傾向になってきました。そのような中で手掛けたのが、新宿区立榎町子ども家庭支援センターの中高生のための居場所づくりです。地下2階、地上6階建てのビルで、併設していた区役所の出張所が移転するのに伴い空くことになった2、3階部分を、乳幼児と中高生のためのスペースに改修することになりました。

2階のワンフロアを中高生のためのスペースとして使えることになり、研究室がコーディネーター的立場でかかわりました。目指したのは、中高生の意見を反映して、既存の児童館機能の充実を図ること。まず、区と児童館主催の「中高生の意見を聞く会」を開き、実際の利用者である子どもたちに参加してもらい、そこから出た案をもとに、研究室で1/30のスケールの模型を用意しました。その模型を使って子どもたちがレイアウトし、一緒に家具も選んで購入するなど、研究室と子どもたちで共につくり上げていきました。繁華街という場所柄か、家庭や学校から干渉されずに

大人の目が行き届いていない子どもが多くいることも確かです。中には親に朝1,000円渡されて1日過ごすと言われる子どももいます。身近に進路相談にのってくれる大人がいないというので、私たちは本棚に受験用の参考書コーナーを設けるといったこともしました。他に行き場のない中高生にとって友達や大人の職員とかかわりを持てるこうした児童館は、地域に必要な居場所となっています。

地域で多世代の交流空間をつくり上げる

三鷹市には、全国初の住民管理によるコミュニティセンターがあります。新興住宅地開発に伴い1974年に開館した「大沢コミュニティ・センター」は、大沢住民協議会が運営・管理していますが、建物が老朽化しているだけでなく、利用者も高齢化していました。若い人にももっと使ってほしい、子どもたちの居場所をつくりたいということで三鷹市職員が研究室に相談にいられました。そこで、市と協議会、研究室で協働プロジェクト「子どもと行きたいコミセンづくり」を立ち上げ、住民参加による施設づくりのためのワークショップを実践しました。

第1回目は、夏休みを利用した施設での宿泊。当時、研究室の院生だった生田紅美が中心となり、子どもたちに楽しんでもらうこと、その上で「大沢コミュニティ・センター」の利用実態を理解しリフォームに対するイメージをつくり上げることで、そしてコミュニティセンターに対して愛着を持ってもらうことを目的に行いました。子どもたちはグループごとに館内を探索して各部屋で説明を受

け、施設がどのように利用されているか理解した上で、リフォームのアイデア案をまとめて発表しました。その際に小学3、4年生から授乳コーナーやお昼寝コーナーが必要だという意見が出され、赤ちゃん連れの母親の立場に立ってリフォームについて考えてくれたのが印象的でした。第1回のワークショップで提案された子どもたちのリフォーム案を受け、第2回は乳幼児の母親を中心とした大人が自分たちの考えや実現性を織り交ぜてプランを作成。それを大沢住民協議会のメンバーである高齢者が検討するという流れを取りました。

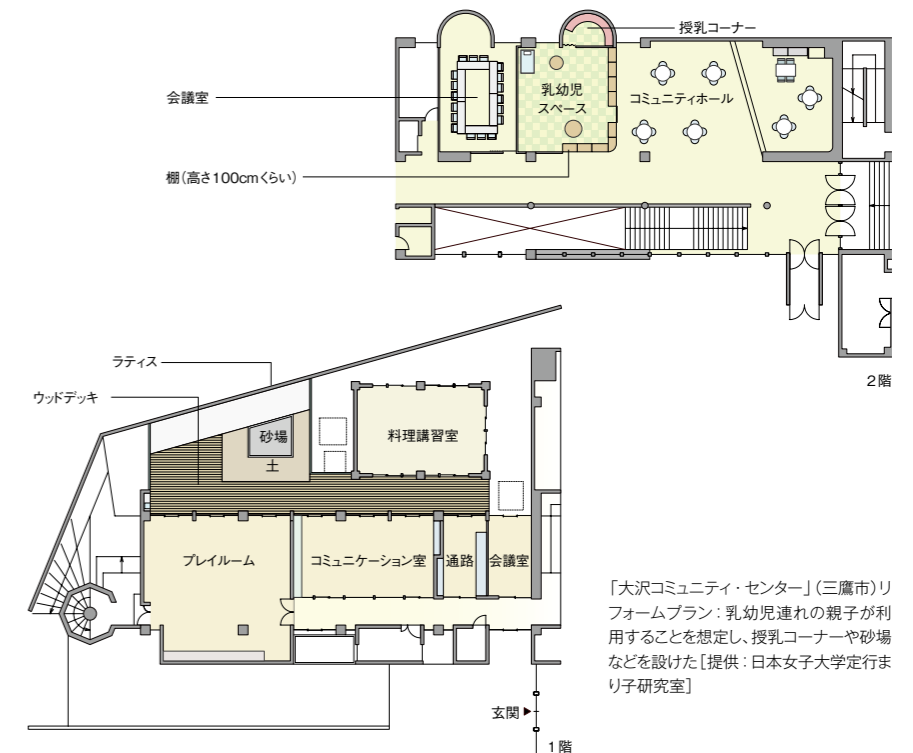
三鷹市の素晴らしいところは、その地域だけの取り組みとしてだけでなく市全体として、このプロジェクトに参加した点です。「子どもと行きたいコミセンづくり」の協定式には市長も参加し、その後も広報誌にプロジェクトの経過を掲載するなど、市が積極的にかかわりました。結果、住民や協議会の方たちの意識が高まり、より良いものにしていこうと、最終的には200万円だった施設改修の予算を400万円捻出するまでになりました。実際の利用者の意見を反映した、次世代につながるコミュニティセンターをつくり出すことができました。

社会の中で子どもをサポートする

社会が少子高齢化していく中で、高齢者に合ったものだけをつくれればいいのではありません。高齢者も若い世代と空間を共有していきたいという気持を



「子どもと行きたいコミセンづくり」第1回ワークショップ：「大沢コミュニティ・センター」における協働プロジェクト「コミセンに泊まってリフォームプランを考える子どもWS」で、リフォーム案を考える小学生[提供：日本女子大学定行まり子研究室]



「大沢コミュニティ・センター」(三鷹市)リフォームプラン：乳幼児連れの親子が利用することを想定し、授乳コーナーや砂場などを設けた[提供：日本女子大学定行まり子研究室]

持っています。年代を問わず、一緒に考える要素を入れて居場所づくりをしていくことが大切です。例えば、新たにコミュニティの施設をつくる時に、高齢者が自分たちの使いたいようにしてしまうと、若い世代は利用を避け、やはり高齢の世代ばかりの居場所になってしまいます。しかし、その時に、小さい子どもたちも来るという環境と一緒に考えてみる。多様な世代への思いやりというようなことが出てくると施設の設計も変わってきます。

また最近では、シングルマザーを取り巻く環境や子どもの貧困も問題になっています。研究室では、豊島区の居住支援協議会と協力して、シングルマザー支援事業に取り組んでいますが、子どもを抱えた一人親を孤立させないためには、居住支援だけでなく、保育園や学童保育所に加えて地域で子どもを見守る場所が必要になってきます。NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークが運営する「要町あさやけ子ども食堂」

は、家庭の事情から1人で食事をしている子どもに、一家団欒のような食卓を提供しています。子どもに限らず、誰でも300円の参加費で利用でき、子ども1人でも利用することができます。孤食の子どもだけでなく、地域と一人親家庭をつなぐ役割も果たしています。

生活支援が必要な家庭に限らず共働き世帯が増えてくると、家庭で子どもを育てる力が弱まり、今後さらに、まちや地域の子どもに目を向けた環境づくりが重要になってきます。大人の事情で子どもにしわ寄せがいかないように、誰でも同じスタートラインに立てる仕組みをつくれませんか。地域によるサポートは、そのひとつになると考えています。

子どもたちの現状・実態を調べて、状況を把握し情報を発信する。これからの社会で育つ子どもたちのために、どんな環境をつくったら良いかを考え、実際のまちづくりで橋渡し役をしていくということが重要なのではないかと考えています。(談)

さだゆき・まりこ——日本女子大学家政学部住居学科教授・工学博士/日本女子大学家政学部住居学科卒業、東京工業大学大学院修士課程を経て、同大学大学院理工学研究科博士課程建築学専攻修了。1999年、日本女子大学家政学部住居学科助教授を経て、2004年より現職。
主な著書：『住生活論』[共著、光生館/2000]、『生活と住居』[編著、光生館/2013]、『保育環境のデザイン—子どもの最善の利益のための環境構成』[編著、全国社会福祉協議会/2014]など。

「DEWKS」に焦点を当て、まちのブランド力を高める 子育てを応援する「都心から一番近い森のまち」

千葉県流山市

東京・秋葉原から、つくばエクスプレスで約20分の流山市。2005年に15万2,000人だった人口は10年間で約2万人増加し、なかでも30、40代の家族層の割合が高い。若い世帯が増えている背景には、自治体独自の取り組みがうかがえる。

目立った観光資源や企業が乏しく、住宅地が占める流山市では、税収の多くが個人住民税となる。そのため高齢化は市の存続にかかわる重要な問題だ。まちの知名度や存在価値を高め、発展し続ける仕組みをつくろうと、2004年にマーケティング課を設置。つくばエクスプレス(2005年開業)の建設に併せて沿線で開発が進む中、共働き子育て夫婦「DEWKS」[*]にターゲットを絞った住民誘致策で、子育てや教育環境を充実させるとともに積極的にPRを行ってきた。「DEWKS」は、世帯所得が比較的高く市の歳入が見込まれること。また、その子どもが住み続ければ、一過性でない現役世代の定住人口が期待できる。

2009年からは、首都圏の駅や電車内に「ボクは送迎つき(送迎保育ステーション)」、翌2010年からは「母になるなら、流山市。」などの広告を打ちシティーセールス活動を強化。駅前送迎保育ステーションは、2カ所の主要駅から市内の全認可保育所へのバス送迎システムで、親は通勤・帰宅時に駅前の同ステーションに子どもを預け、引き取れる。これなら自宅から離れた入園先であっても送迎の負担がなく、これを目当てに引っ越してくる世帯があるほど好評だ。地域と一体となった小中一貫教育の推進や英語教育の強化など、教育環境向上にも力を入れている。こうした取り組みと共に、「都心から一番近い森のまち」としてアクセスの良さと緑豊かでゆとりある地域性を活かした良質なまちづくりを進めてきた。さらに、交流人口を増やすことを目的に年間イベントを開催。訪れた人々がまちを気に入って、住みたいまち候補になることを狙う。

シビックプライドが生まれ始め、流山市をブランド化する原動力となっている。(文責：編集室)



1 2009年、新校舎に移転した小山小学校：つくばエクスプレス沿線では児童数が増加し、2017年には新たな校舎を増設予定。2015年4月には、市内で初となる小中学校併設校「おおたかの森小・中学校」も開校した

2 駅前送迎保育ステーションによるバスでの送迎：駅前送迎保育ステーションは、共働き子育て世帯をサポートするためのサービスとして、つくばエクスプレスの建設に併せて計画を進めた。流山おおたかの森駅と南流山駅に開設し、料金は月額2,000円(1回100円)で、約150人の児童が利用している

3 流山市のPR広告ポスター：JRや東京メトロの首都圏の駅や電車に、市のイメージ広告を掲載。「DEWKS」をターゲットに、施策を展開している

4 同時開催イベント「森のマルシェ」と「流山グリーンフェスティバル」：流山おおたかの森駅南口都市広場では、流山市の認知度を高め、交流人口を増やすことを目的に、年間を通じてイベントを開催している

5 流山おおたかの森駅周辺：駅前には、車が進入できない、ゆとりとした空間の流山おおたかの森駅南口都市広場が広がる。芝生のスペースもあり、休日にピクニックを楽しむ家族も

[提供1-3・5：流山市]

[*] Double Employed With Kids

JR東日本グループの子育て支援事業 「HAPPY CHILD PROJECT」

JR東日本グループでは、沿線価値向上の一環として駅や駅ビルなどの資産を活かし、地域のコミュニティづくりに貢献する取り組みを行ってきた。「駅に保育園があったら送り迎えが便利」という社員の発想から1996年、国分寺に最初の「駅型保育園」を開設し、話題となる。次いで北千住に東京都認証保育園の第1号を、横浜市の小机、鶴見に横浜保育室の第1号を開設してきた。

JR東日本グループは、保育ニーズがある地域において自社の所有する土地や建物を保育事業者に貸し、認可・認証保育園を開設している。また、保育園だけでなく、学童保育所、親子コミュニティカフェなどの施設開設の他に、親子で参加できるイベントも開催し子育て中の家族を幅広く応援する事業に取り組んでいる。

なかでも埼京線沿線は2004年から重点的に保育園を開設し、「子育て応援路線」と銘打って、子育て支援施設の沿線モデルを確立。各駅に1カ所、南与野駅・中浦和駅・戸田駅には2カ所、戸田公園駅に3カ所、武蔵浦和駅には学童保育所を含め4カ所、いずれも駅からおおむね5分以内と便利な場所に保育園を開設した。

2007年には立川駅で初めてエキナカに保育園を開設。2015年4月現在で、東京圏を中心に82カ所の子育て支援施設を設置しており、100カ所の開設を目指しているという。

また、地域の保育園と連携し、朝、駅で預かった子どもを指定の保育園に送り、夕方再び各園から子どもを預かり、保護者が迎えに来るまで保育を行う「送迎保育ステーション」を本八幡と東鷲宮の駅に開設し、駅という立地を活かした子育て支援のひとつとなっている。

さらに、子どもたちとシニア世代との多世代交流をコンセプトに、保育園と高齢

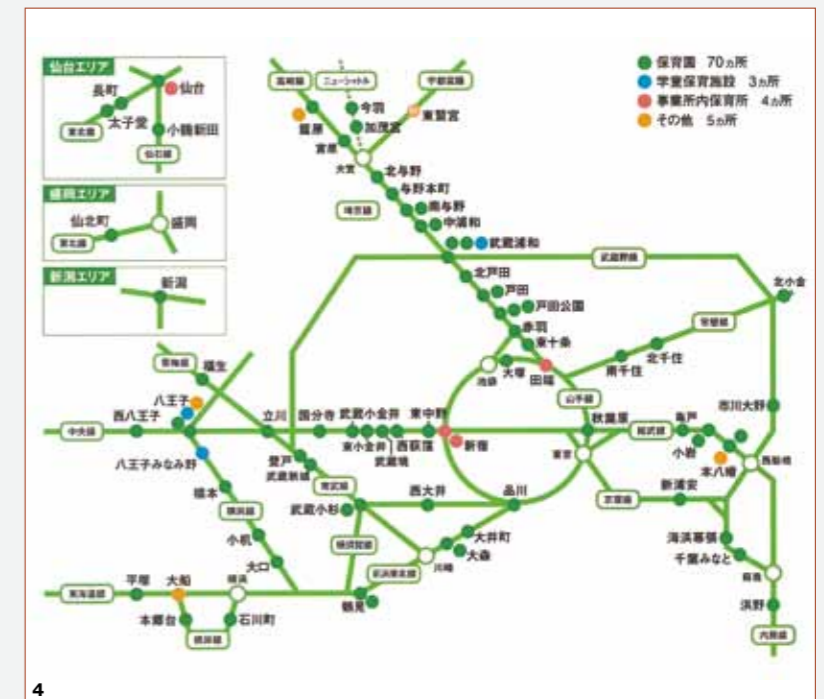
者の通所介護施設を併設した複合施設「コトニア吉祥寺」、「コトニア赤羽」など、地域により貢献できる施設の開設に取り組んでいる。

今回お話を伺った東日本旅客鉄道事業創造本部子育て・教育事業PTの担当者は、「『HAPPY CHILD PROJECT』はJR東日本グループ全体での取り組み。魅力ある暮らしやすい鉄道沿線を目指し、今後も子育て支援施設の開設を始め、地域コミュニティに貢献する場所をつくっていきたいと思っています」と語った。

少子高齢社会を見据えたJR東日本グループの今後の展開に期待したい。

(文責・編集室)

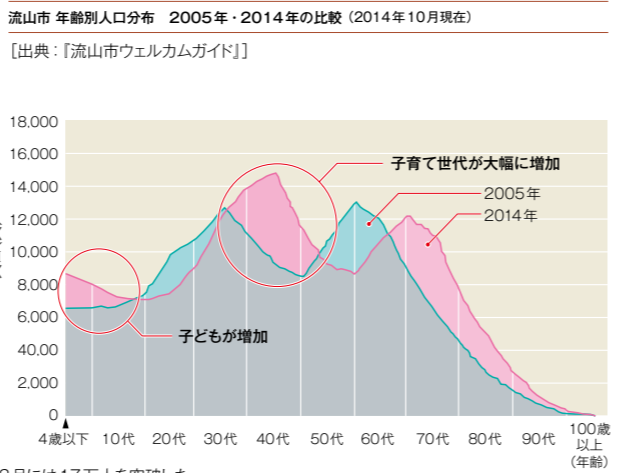
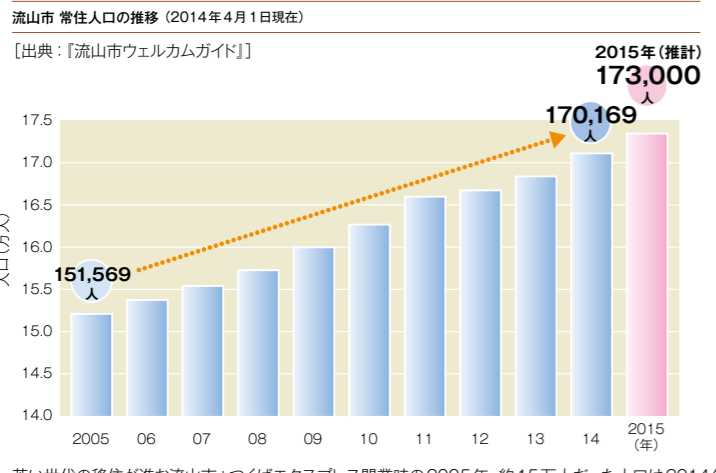
- 1 Jキッズリミネ北千住保育園：駅ビルの屋上で遊ぶ子どもたち
 - 2 戸田駅前さくら草保育園：通過する電車を眺められる子どもたちに人気の埼京線沿いの駅型保育園
 - 3 コトニア吉祥寺：西荻窪駅と吉祥寺駅の間の高架下を利用した施設。保育園と通所介護施設が併設され、子どもたちと高齢者が交流できる
 - 4 子育て支援施設の開設状況
- [提供 1-4：東日本旅客鉄道]



- 6 流山市地図：300カ所以上の公園や森を持つ流山市では「都心から一番近い森のまち」をテーマに、まち中の緑と周辺の緑をつなぐ「グリーンチェーン認定制度」に取り組んでいる。また、新たに住宅地開発をする際は、緑地景観の推進や1戸の最小区画面積を135㎡以上に定めるなど、美しい緑陰の続くゆとりあるまちづくりを進めている
- 7 利根運河：オランダ人技師・ムルデルの設計でつくられた利根川と江戸川を結ぶ運河。水辺公園として整備され、四季折々の自然が楽しめる。2006年、土木学会の選奨土木遺産に認定された
- 8 おおたかの森S・C：流山おおたかの森駅直結の大型ショッピングセンター。建物内外の緑化や環境に配慮した商業施設として「グリーンチェーン認定制度」の認定を受けている



- 9 流山セントラルパーク駅付近のまち並み：駅名に「セントラルパーク」と付けるなど、まちのイメージアップを目指す
 - 10 ルアージュランド流山：ニュージューランドの瀟洒なまち並みを模して開発された東深井地区の住宅地
 - 11 つくばエクスプレス沿線のマンション：集合住宅にも緑が広がる
- [提供 7-11：流山市]



若い世代の移住が進む流山市：つくばエクスプレス開業時の2005年、約15万人だった人口は2014年3月には17万人を突破した。30、40代の子育て世代の伸びが大きく、4歳以下の子どもも増えている

中高生の居場所をつくり、活動を支援する 人々の交流と地域の魅力を生み出す公共施設

東京都武蔵野市

武蔵野市立「ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス」は、2011年7月、図書館を始め生涯学習支援、市民活動支援、青少年活動支援の4つの機能を併せ持った複合機能施設としてオープンした。JR中央線・西武多摩川線武蔵境駅南口前の農水省食糧倉庫跡地に、境南ふれあい広場公園と一体的に整備。楕円形の窓が印象的な白い建物は、周囲の樹木より低く抑えた地下3階、地上4階建てで、環境負荷を低減したつくりになっている。本や各活動支援を通してそれぞれの情報を共有・交換でき、新たに知的な創造や交流が広がっていくと、年間約160万人が訪れるほど人気がある。

同施設の特徴のひとつは、地下2階に、中高生を中心とする10代の子どもたちの活動を支援するフロアを設けていること。中高生になると、学童保育がなくなり、コミュニティセンターも利用しづらいなど、放課後に部活以外で過ごせる場所が限られる。ファストフード店やコンビニに集まることも多く、保護者としては心配になる。多感な時期の子どもたちが、誰でも安心して過ごせる地域の居場所として出来たのが、このティーンズフロアだ。

学校の長期休業期間は9時半の開館から22時の閉館まで(小学生は17時まで)、それ以外の平日14時半以降は、基本的に10代だけの利用となる。フロア中央のスタジオラウンジでは会話や飲食が許されていて、自由な雰囲気勉強できる。大人のスタッフはあくまでサポート役で、見守りに入るが余計な干渉はしない。そのため子ども同士のトラブルも起こらず、自分のペースで居心地良く過ごせると、いつも満席状態だ。音楽やダンスなどのスタジオもあり、市民(在住・在勤・在学)であれば、大人の1/10の料金で使用できる。さらに、ここでの練習が自分たちで企画・運営するイベントの開催にまで発展していく。

これまでの公共施設の枠を超えた新しい試みで、10代の子どもたちの自主的な活動を応援する居場所をつくり上げている。(文責：編集室)



- 1 武蔵野プレイス外観：境南ふれあい広場公園の芝生広場では、武蔵野プレイスと連携した野外イベントが開催される。建物の設計・監理はkw+hgアーキテクト
- 2 パフォーマンススタジオ：ダンス、演劇などに人気のスタジオ。ガラスの仕切り越しに練習風景が見られるので、興味を持ってのぞく子どももいる。他に、アンブやドラムセットを備えたサウンドスタジオ、調理ができるクラフトスタジオもあり、いずれも低料金で利用できる
- 3 オープンスタジオ：勉強や読書の合間に軽い運動ができる無料スペース。クライミングウォールのほか、卓球台もあり、20分交代で2時間待ちになることもあるほど人気
- 4 スタジオラウンジ：フロア中央にあるオープンスペース(無料)。勉強や読書以外に、友達とおしゃべりを楽しむ子どももいる
- 5 地下1階のメインライブラリー：図書館は、地下2階から地上2階で構成され、16万5,000冊の蔵書と600タイトルの雑誌のほか、オンラインデータベースでの情報検索なども充実。館内は白を基調とし、空間を連続的につなぐ馬蹄形にくり抜いた垂れ壁や螺旋階段、外から活動が見えるガラスで仕切った個室など、目的以外の場所にも寄り道したくなるような仕掛けで、回遊性を高めている
- 6 1階の中心に位置するカフェ：図書館の本を持ち込んで、コーヒーを飲みながら読書ができる。読書会などのイベントを定期的に開催し、コミュニケーションの場としての役割も持っている

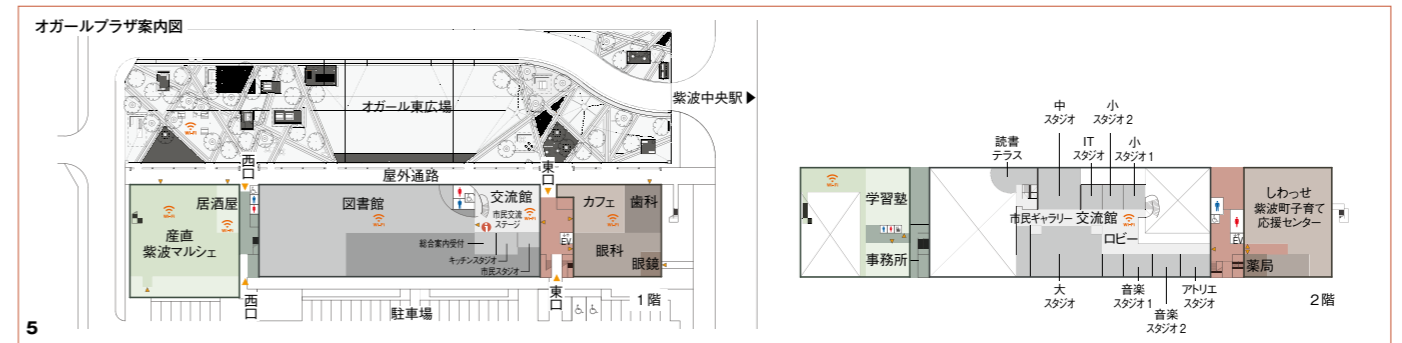
多世代で活用できるまちの拠点 公民連携で生まれた市民活動の核施設

岩手県紫波町

岩手県中部、盛岡から電車で約20分、人口約3万4,000人のまちに、視察団が押し寄せている。公民連携による公有地活用事業の先例として注目される紫波町「オガールプロジェクト」だ。

紫波中央駅前地区10.7haに、図書館やカフェ、産直市場などが入る「オガールプラザ」を始め、ホテルやバレーボール専用体育館などを備えた「オガールベース」、エコハウスが建ち並ぶ「オガールタウン」、フットボールセンターなど、複数の施設が集積している。2015年5月には紫波町役場庁舎が移転し開庁。冬は雪捨て場となっていた場所が賑わい空間に生まれ変わった。週末には遠方からの利用者も多く、「オガールプラザ」がオープンしたこの2年間で約150万人が訪れている。このプロジェクトでは、“人が集まる場所”を第一に目指し、デザイン性を重視した居心地の良い施設となっている。特に「オガールプラザ」の約半分を占める紫波町情報交流館には、図書館のほかに音楽・キッチン・アトリエの各スタジオ、市民ギャラリーなど、市民活動の場を豊富に設け、割安な使用料が利用率を高めている。また天井が高く広々とした図書館は、幅広い世代の居場所になっている。児童コーナーには授乳室やこどもトイレ、「あかちゃんのへや」などがあり、親子連れが気兼ねなく過ごせる。中高生のための本を集めた「ティーンズ」、飲食可能な読書テラスなど、利用者のニーズをつかみ、長時間滞留してもらえる工夫がある。

東棟には、紫波町子育て応援センター「しわっせ」があり、学童ルーム、一時預かり保育室、育児相談室のほか、乳幼児の親子が遊べるプレイルームを備えている。カフェや図書館、産直市場を子ども連れで利用する人も多く、オガール東広場には駆け回る子どもたちの姿がある。施設が隣接することで、夏祭りやバーベキュー、映画上映会を共同で開催するなど連携が始まっている。「オガールプラザ」は、子育て支援に必要なさまざまな機能があるだけでなく、多世代が共に楽しめる居場所となっている。（文責：編集室）



- 1 オガールプラザ：木造、一部鉄筋コンクリート造2階建て。広場と建物をつなぐ屋外通路は長いアーケードになっていて、積雪の多い地域への配慮がある。近代建築研究所と中居敬一都市建築設計の共同設計
- 2 紫波町子育て応援センター「しわっせ」：天井が高く162.7㎡と広々としたプレイルーム
- 3 学童ルーム：「しわっせ」内の学童クラブ。小学1-4年生を対象に、18時頃まで勉強したり遊んだりして過ごす
- 4 紫波町図書館：紫波町情報交流館内にある人気の図書館。柱のない木造の大架構空間は明るく居心地の良い空間になっている。土日は盛岡から車で来る利用者も多い。構造設計は木質構造家の稲山正弘氏
- 5 オガールプラザ案内図：延べ面積5,826.02㎡。うち公共施設が2,693.53㎡、民間施設が2,344.28㎡の官民複合施設となっている[提供：オガール紫波株式会社]
- 6 紫波マルシェ：紫波町の農畜産物や加工品を中心とした産直市場。鮮魚や精肉、スイーツのテナントも入っている
- 7 紫波町情報交流館の音楽スタジオ：防音仕様で、ドラムセットやアンプなども備えられている。使用料は1時間300円と安価なので、学生の利用も多い

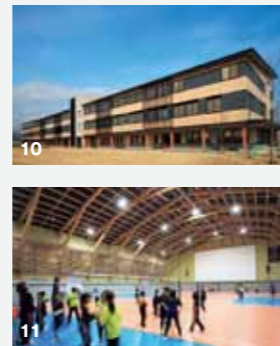
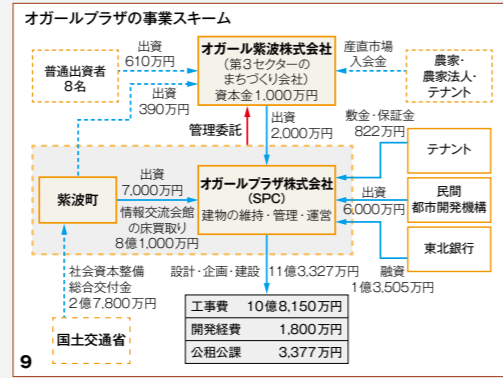
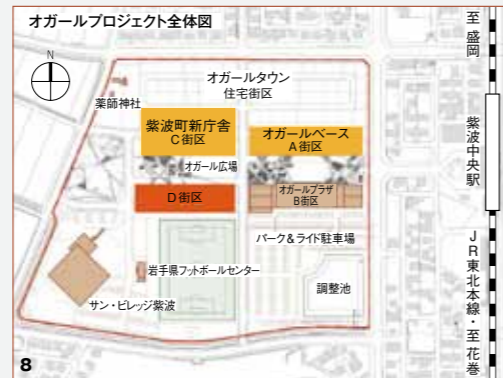
「オガールプロジェクト」計画の経緯と 公民連携の事業スキーム

紫波町は、1998年、JR日詰駅と古館駅の間に紫波中央駅が新設、開業したタイミングで駅前の土地10.7haを28.5億円で取得。当時の計画で、公共施設整備費は試算で143億円となり、財源がないことからその後しばらく塩漬け状態となった経緯がある。

2006年頃から、当時の町長・藤原孝氏と、地域振興整備公団(現・都市再生機構)で地域再生の経験を積んだ地元出身の岡崎正信氏をキーマンに、公民連携による事業の検討が始まった。2009年、紫波町が100%出資(現在39%)のもと、藤原孝氏を社長に(現在は佐々木廣氏)まちづくり会社・オガール紫波株式会社を設立。補助金に頼らず、従来とは異なった資金調達方法で事業スキームを構築した。

中心となる施設「オガールプラザ」整備事業については、特別目的会社(SPC)オガールプラザ株式会社を設立。ここが建物を建設、所有し、運営する。親会社のオガール紫波株式会社や紫波町と経営を切り離しているため、たとえ事業に失敗してもそこに損失が及ぶことはない仕組みだ。ファイナンシャルアドバイザーを起用し、建設費約11億円の事業プランを立てた。出資金として、紫波町7,000万円、オガール紫波株式会社2,000万円、民間都市開発推進機構6,000万円を準備。融資を上回る資本金を用意した上で、東北銀行から10年返済の融資1億3,505万円を引き出した。

SPCであるため、「オガールプラザ」のテナント収入だけで、返済や配当を行わなければならない。しかも投資利回りを17%にするよう金融機関から求められた。そこで、事業を身の丈にするよう計画を徹底的に練り直した。当初3階建てを予定していた建物も2階建てに変更し、構造部の建設費を坪単価38万円に抑えた。商業部分のテナントは、着



8 オガールプロジェクト全体図：計画面積21.2ha(町有地10.7ha)。フランス語で駅を意味する「Gare(ガール)」と、紫波の方言で成長を意味する「おがる」を合わせ、紫波中央駅前整備事業の名称とした[提供：オガール紫波株式会社]

9 オガールプラザの事業スキーム
10 紫波町新庁舎：2015年5月には町役場が線路を挟んだ東側の日詰商店街地区からオガール地区に移転し、紫波町の中心地区を担うことになる

11 オガールアリーナ：フランス製のタラフレックスを床材に使用した日本初の本格的なバレーボール専用体育館。大浴場を備えたホテルが併設されているので合宿利用も多い

工前から100%決定し、設計にも意向を反映させるなど慎重に進めた。

また、人を呼ぶ高感度な場所にするために、建築、都市再生、ランドスケープデザインなどの専門家による「オガールデザイン会議」[*]を組織した。建物は2段階プロポーザルの結果、地場産材を使い地元の大工が施工、日本の伝統的な木造建築としたことでコストも削減。中庭は「緑の大通り」とし、建物と広場を一体的に活用できる空間とすることが提案され、シンプルで現代的な中にも温かみのある空間が実現している。

完成と同時に公共施設部分(紫波町情報交流館)を8億1,000万円で紫波町に売却。この施設購入に紫波町は2億7,800万円の社会資本整備総合交付金を活用している。「オガールプラザ」の土地5,640m²は32年の定期借地とし、年間賃料約347万8,900円をオ

ガールプラザ株式会社が町に支払うかたちだ。

こうした緻密な計画で「オガールプロジェクト」は順調に目的を果たしている。「オガールプラザ」では105人の新規雇用を生み出し、オガール紫波株式会社が運営する「紫波マルシェ」は、地元290人の生産者を会員に年間約4億円を売り上げている。図書館は町でつくるより約25%コストカットでき、テナント賃料の一部を図書館の維持・管理に使うことができています。(文責・編集室)

[*] オガールデザイン会議
都市再生プロデューサーの清水義次氏(アフタヌーンソサエティ代表取締役)を委員長に、建築家の松永安光氏(近代建築研究所代表取締役)、グラフィックデザインを担当した佐藤直樹氏(アジール代表取締役)、ランドスケープデザインの長谷川浩己氏(オンサイト計画設計事務所代表取締役)、エコハウスを担当する竹内昌義氏(みかんぐみ共同主宰)、紫波町都市計画課の6名で構成された(2015年3月現在)

特集3 [資料]

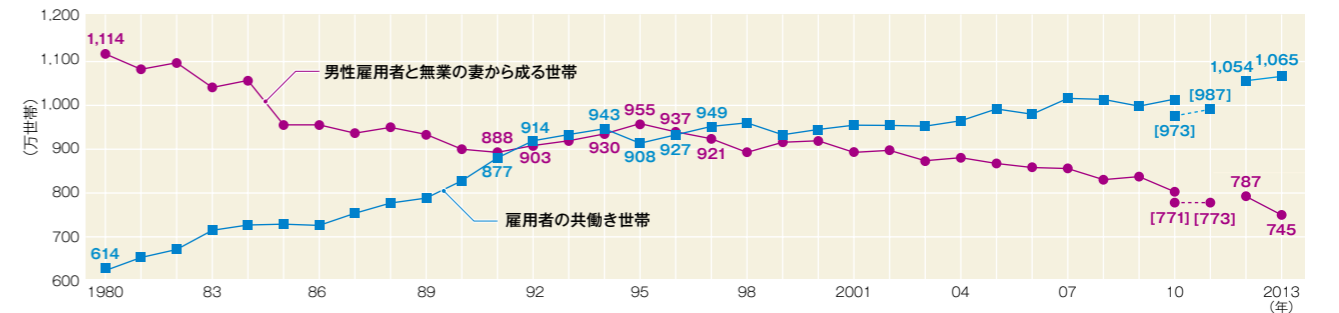
グラフから見る共働き子育て世帯に関する状況

2015年4月から「子ども・子育て支援新制度」が始まった。子育て中のすべての家庭の支援をするもので、認定こども園の普及や多様な保育の確保による待機児童の解消、地域の実情に応じた子育て支援の充実などを図っていく。子育てしながら両親共に働く生活スタイルが定着しつつある中、子どもが安心して過ごせる環境が求められている。

共働き等世帯数の推移

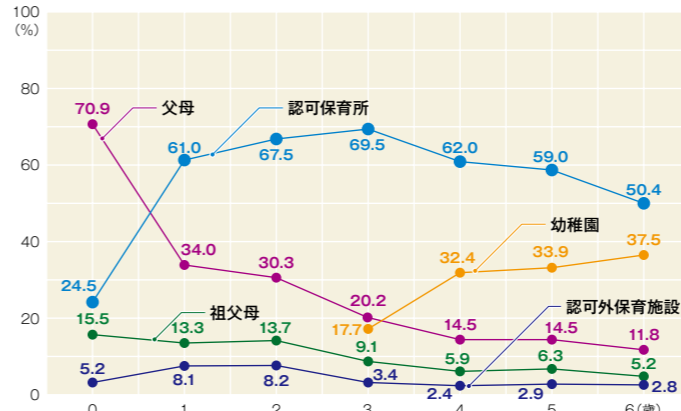
(2010年及び2011年の[]内の実数は、岩手県、宮城県及び福島県を除く全国の結果)

[出典：「男女共同参画白書 平成26年版」]



仕事ありの母・末子の乳幼児の年齢別にみた日中の保育の状況の構成割合 (複数回答)

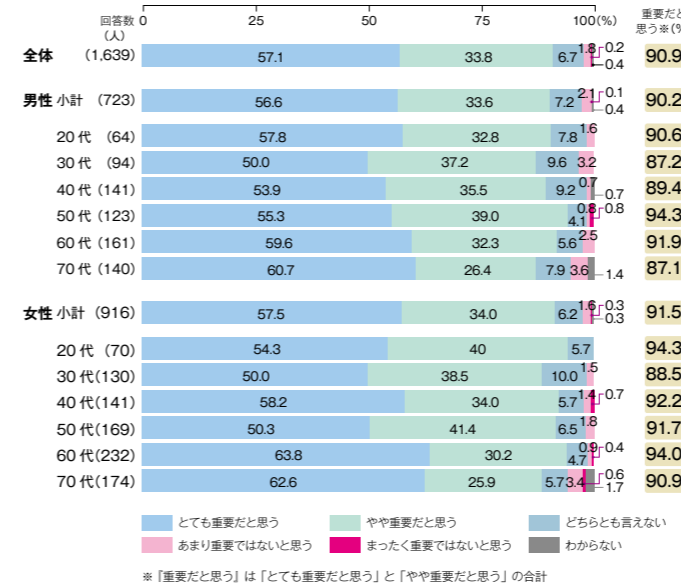
[出典：「平成26年 グラフでみる世帯の状況」]



仕事のある母の保育状況は、認可保育所の割合が高い

子育てをする人にとっての地域の支えの重要性 (単一回答/全体、性・年代別)

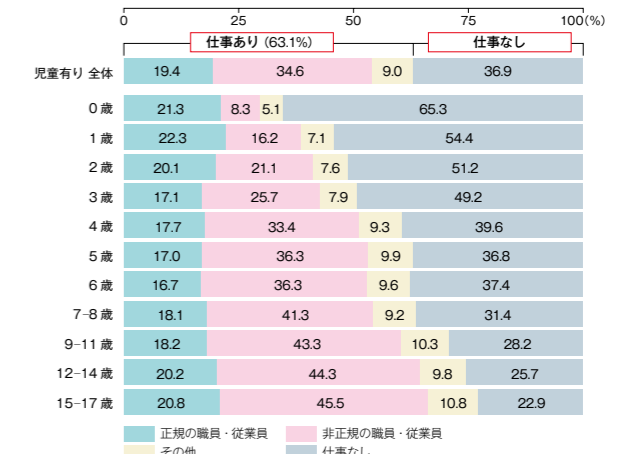
[出典：「少子化社会対策白書 平成26年版」]



*「重要だと思う」は「とても重要だと思う」と「やや重要だと思う」の合計

末子の年齢階級別にみた母の仕事の状況の構成割合

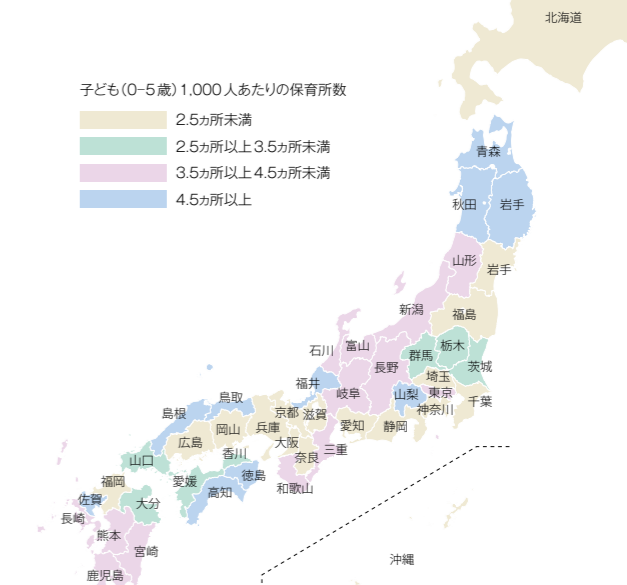
[出典：「平成26年 グラフでみる世帯の状況」]



母の仕事は末子の年齢が高くなるに従い非正規の割合が高い

子ども1,000人に対する保育所数の都道府県別傾向 (2010年)

[出典：平成23年度「都市と地方における子育て環境に関する調査」]



ガラスブロックを構造に使う

山下保博
Yasuhiro Yamashita

2003年、初めてのクライアントから増改築の依頼があった。敷地の中には、前面道路側に木造の建築があり、その後方に鉄骨造の3階建てがあった。要望は、木造部を解体して家族が集まるリビングや個室が欲しいこと、後方の空間にも光が入るような工夫をしてほしいことの2つであった。私からガラスのように透過するさまざまな素材をお見せした中で、鉱物好きのクライアントが選択した素材がガラスブロックであった。そのガラスブロックを使用する上で、過去の事例をひもとくと、私の中で名作が2つあった。ピエール・シャローの「ガラスの家」、レンゾ・ピアノの「メゾン・エルメス」である。その2つの建築とは違う使い方を模索する中で、構造体としてのガラスブロックのアイデアが浮かんだ。簡単なスケッチをもとに、構造設計の佐藤淳さんと打ち合わせを行い、ディテールを詰めていった。そして、製造実績の多い日本電気硝子にお声掛けをし

た。しかし、2度断られた。その理由としては、彼らの経験から構造とガラスブロックと縁を切るディテールにすること、ガラスブロック同士の間に入れるつなぎ材としてステンレスを使用するというルールがあったからだ。私たちの提案は、この理由とは180度違っていた。それは、ガラスブロックを構造体そのものにしたという提案であること、ガラスブロック同士の中に構造体を入れ込み、その素材はコストを抑えるためにスチールにしたという提案であった。しかし、3度目には彼らも参加することを決定した。理由は、チームとして構造実験を行う東京大学の伊山潤先生と施工会社のホームビルダーがこのプロジェクトに参加することが決まっていたこと、日本電気硝子だけにリスクを負担させるのではなく、我々全員で負担しようという考え方を持っていたことである。

その後、さまざまなハードルがあった。ガラスブロックを構造で使った事例は世界中探してもどこにもなかった。日本電気硝子でさえ構造として必要な強度のデータはなかった。その実験を何度も東京大学で行い、圧縮強度が解明した。

ここで我々が考えた新しい構造システムを説明する。スチールフラットバー19×65mmを400×600mmの格子状に組んで、垂直荷重を負担してもらう。その格子の1マスの中に190×190×95mmのガラスブロックを6個入れ込む。このガラスブロックが水平力を負担するというシステムである。このシステムの新規性は緩衝剤の開発であった。ガラスブロックとスチールが接触しないための緩衝材の役割は、力の伝達を行えるだけの硬さも必要であった。この部位に関しては、日本電気硝子が工場ですべての実験を行った。そこで導き出した答えが、1mmのクロロプレナムと2mmのアクリルの組み合わせである。これは、新規の素材ではない。しかし、この発想と緩衝材の組み合わせのアイデアにより特許を取得できた。

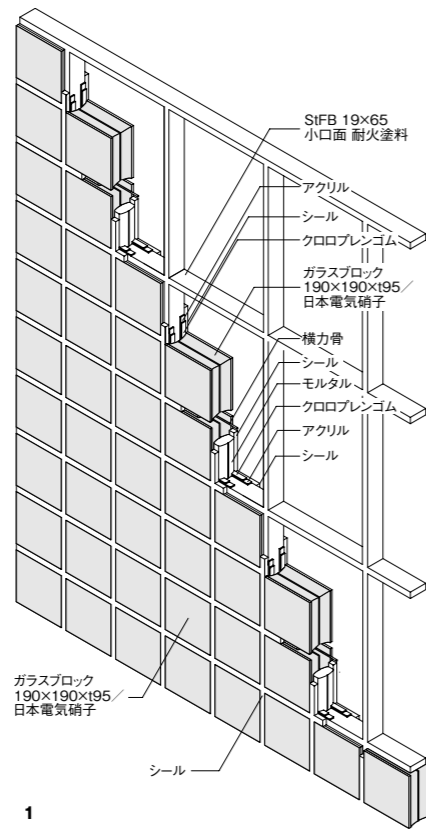
そして、次のハードルが待ち構えていた。職人が経験したことがない工法であるため、職人への教育が必要であった。これも、日本電気硝子が日本全国からよりすぐりの職人を集め、研修を重ねることで解決し、「クリスタル・ブリック」が完成した。外観は光り輝くほんほりのように柔らかい様相だが、内部の空間は今まで見たことのない異様な空間がそこにあった。それは、ガラスブロックが鉄骨の格子状の天井を軽々と支えており、重力の在り方や素材の出合いを根本的に揺さぶるような不思議な空間であった。完成してから10年以上たっているが、1個のガラスブロックも割れていない。

私は、20世紀がコンクリートや鉄やガラスという素材により世の中の成り立ちや景観に大きな影響を与えたことや、その変わる様に興味がある。素材や構造が世の中に大きく影響することを私自身でも示してみたい。最近では地域に眠っている素材から建築をつくり、仕事を生み出し、まちの活性化に役立つための社団法人「地域素材活用協会」をつくり活動している。その先端の素材として、火砕流堆積物(シラス)を砂の代わりに使用し、個別大臣認定を取得後、竣工させたシラス・コンクリート建築の「R・トルソ・C」がある。この建築がシラスの使用量を増やし、鹿児島島の活性化に貢献することを望んでいる。

クリスタル・ブリック [2004]

- 1 ガラスブロックとスチールの構成：垂直荷重をスチールフラットバーが、水平荷重をガラスブロックが負担している
 - 2 南面外観：ガラスブロックから光を入れ、白い面の窓から風を取り入れている
 - 3 施工中の写真：ガラスブロックの設置は、厳選された職人たちが手掛けた。1つのマス目にガラスブロックを6個ずつ嵌め込む
 - 4 リビング・ダイニングを見る：ガラスブロックが天井の鉄骨を支えているように見える不思議な空間
- [写真2・4：吉田誠]

やました・やすひろ——建築家、アトリエ・天工人代表／1960年生まれ。1986年、芝浦工業大学大学院修士課程修了。幾つかの設計事務所を経て、1991年、山下海建築研究所設立。1995年、アトリエ・天工人(テクト)に改称。2013年より、九州大学客員教授。同年、一般社団法人地域素材活用協会を立ち上げ、まちづくりに発展させる地域支援活動を行う。
主な作品：チカニウマルコウブツ [2006]、釜山エコセンター [2007]、コンダール日本館 [2009]、A-ring [2009]、パウダーリー・ハウス [2012]、R・トルソ・C [2015] など。
主な著書：『天工人流—仕事を生み出す設計事務所のつくりかた』 [編著、彰国社/2009]、『アトリエ・天工人／素材・構法からの建築』 [編著、彰国社/2010]、『Tomorrow 建築の冒険』 [TOTO出版/2012]、『素材の声を聴く／Listen to the Materials』 [編著、ブリックスタジオ/2012] など。





TOPICS

東日本大震災復興支援活動 「女川温泉ゆぽっぽ タイルアートプロジェクト」

復興への想いを未来に 伝えるタイル壁画の制作をLIXILがサポート

後藤泰男
Yasuo Goto
(株)LIXIL 広報部 文化企画G

LIXILは、東日本大震災の津波で全壊したJR石巻線の終着駅であるJR女川駅と、女川町温泉温浴施設「女川温泉ゆぽっぽ」の復興再建プロジェクトに賛同し、その一環として行われた「女川温泉ゆぽっぽ タイルアートプロジェクト」にてタイル壁画の制作に協力しました。2015年3月21日に「おながわ復興まちびらき式典」が開催され、JR石巻線が全線開通、新しい駅舎と合築された「女川温泉ゆぽっぽ」がオープンしました。

「女川温泉ゆぽっぽ タイルアートプロジェクト」は東日本大震災で被災した女

川町の復興を支援する建築家の坂茂氏の呼び掛けにより2014年4月に始動。駅舎に合築される温浴施設内に、日本画家の千住博氏、デザイナー・イラストレーターの水戸岡鋭治氏のアートデレクションによるタイルアートを制作することが決定しました。アートの持つ創造性・想像力を地域コミュニティの再生や地域活性化の一助にするという同プロジェクトの趣旨にLIXILも賛同し、これまでに数多くのタイル復原や芸術家とのコラボレーションによるタイル制作を手掛けてきた愛知県常滑市にある「LIXILものづくり工房」が制作に協力することになりました。

鎮魂と復興の思いを込めて多くの人の手でつくり上げられたタイルアートが完成するまでをご紹介します。

タイルアート完成までの道のり

(株)LIXIL R&D本部 研究戦略部
ものづくり工房 工房長 小関雅裕

●2014年4月
坂氏、千住氏、水戸岡氏が一堂に会したキックオフミーティングにてタイルのデザインを検討。イメージスケッチが千住氏から提示されると、即座に3者のイメージがひとつになり、プロジェクトが動き出しました。作品テーマを、富士



山、大樹、泉と鹿とすることが決定し、大樹をテーマとした作品では、花のデザインを全国から募り、千住氏の描く大樹の幹と組み合わせると1つの作品を完成する一般参加型プロジェクトの構想がまとまりました。

個性あるクリエイターの方々が、同じ空間イメージでスタートできたのも復興への熱い思いがひとつだったからです。その場に同席し、熱き思いを共有できたことで、関係者の皆さんのイメージされたタイルの制作ができたのだと思います。

●2014年5月

千住氏がニューヨークのアトリエで制作した原画「霊峰富士」、「家族樹」、「泉と鹿」、「花の杜」が日本に到着。千住氏専属のカメラマンが、すぐさま作品の撮影とデジタルデータ化に着手し、ものづくり工房スタッフも撮影現場に立ち会って、その作品の美しい色彩とタッチを目の当りにしました。

また並行して女川町の主催により花のデザインを一般公募し、約900件の個性的な花のデザインが寄せられました。水戸岡氏のデレクションのもと、千住氏の描く大樹の幹に花のデザインが組み合わせられ大作の原画が完成しました。

●2014年6月

ものづくり工房で、タイルの制作準備がスタート。原画を高精細度に取り込んだデジタルデータが、いよいよものづくり工房に送られてくると、原画を印刷した転写紙(専用のフィルム)をタイルの表面に張って焼き付ける「フォトタイル」と



1 休憩室タイルアート「家族樹」
2 JR女川駅と「女川温泉ゆぽっぽ」
[写真1・2: 梶原敏英]
3 キックオフミーティング風景
4・5 みなとまちセラミカ工房の皆さんによる転写紙張り作業
6 転写されたタイル



7 タイルの焼成発色テストピース
8・9 LIXILものづくり工場の検品準備風景
10 検品風景：左から須田善明女川町長、阿部鳴美代表、千住博氏



11 坂茂建築設計による女川町の3階建てコンテナ仮設住宅【写真：Shigeru Ban Architects】

いう写真転写技術を使い、タイルへの再現転写テストを直ちにスタートさせました。ところが、「霊峰富士」の繊細なグラデーションは、これまでに組み込んだことのない高いレベルの再現性を要求されるものでした。印刷、転写、焼成を繰り返し何度も試作を重ねるのですが、思うような色・グラデーションのタイルは焼き上がってきません。納期に間に合う限界直前に、意を決して新しい印刷機を導入し、試験を再スタートしました。これにより色再現テストはスタートラインに戻りましたが、それまでの試験の繰り返しで得られたノウハウが功を奏し、短時間の調整試験で、納得のいく再現レベルに達することができました。

●2014年11月1日
本生産開始

●2014年11月12-13日
地元女川町から「NPO法人みなとまちセラミカ工房」の阿部鳴美代表とメンバー5名がものづくり工房に駆け付け、タイルに転写紙を張る作業を共同で行いました。「色を失くした街を、スペインタイルで彩る」を合言葉に発足したみなとまちセラミカ工房では、日頃からスペインタイルを制作しており、今回、自分たちの手で女川の復興のためのタイルをつくりたい、との思いからご協力を申し出ていただきました。メンバーの皆さんは、慣れない作業に戸惑いながらも次第にコツをつかみ、2日間で780枚ものタイルに転写紙を張り付ける作業を完了しました。このタイル制作を通して、常滑と、遠く離れた東北の女川との間で新たな絆と温かい交流が生まれました。

●2014年11月22日
タイル検品
焼き上がった「霊峰富士」、「家族樹」、「泉と鹿」のタイルを一面に広げ、千住氏、須田善明女川町長、阿部代表の立ち会いのもと一枚一枚丁寧に検品を行い、最終承認をいただいて無事出荷することができました。

確認を終えた千住氏からは、「大変良い出来栄え。LIXILのタイル技術の高さに感謝したい」との評価をいただきました。

した。

●2015年2月10日
完全納品

●2015年3月11日
現地にて最終確認

●2015年3月21日
「女川温泉ゆぼっぼ」オープン

今回のプロジェクトでは約6,000枚のタイルを納品しました。完成した壁面は、関係者の思いと我々LIXILの思いがひとつになった結晶だと強く感じ、女川町民の憩いの場、集いの場づくりの一助になれたと確信しています。

プロジェクトへのメッセージ

宮城県女川町
町長 須田善明

坂茂先生と千住博先生には震災後数々のご支援をいただけてきましたが、「ゆぼっぼ」再建の際には千住先生に絵を描いてもらえたら、「お風呂と言えばやっぱり富士山でしょう!」などと談笑したのが3年ほど前のある日。以降、再建が具体化した際に坂先生から千住先生と水戸岡鋭治先生が手掛けられたJR博多駅のタイルアートを紹介いただきました。全国からご支援をいただいた本町であり、感謝の意を込めつつ、憩いの場となるゆぼっぼを女川ファンの皆さんや子どもたちが描いた花の絵でいっぱいにできれば…、とタイルアートプロジェクトがスタートしました。さらには千住先生のご厚意により浴室内の「霊峰富士」などのタイルアートも実現の運びとなり、LIXILさまの確かな技術と全面的なご協力のもと館内を飾る素晴らしいタイルアートが完成しました。温泉に入りながらお楽しみいただけるタイルアートの数々。皆さまのお越しをお待ちしております!

坂茂建築設計
原野泰典

2011年の震災以降、女川町で3階建てコンテナ仮設住宅の建設を行った縁もあって、駅舎再生の依頼をいただいた。震災で流された「女川温泉ゆぼっ

ぼ」の復活を望む声も多く、駅舎と温泉施設の合築となった。

7mほどかさ上げされた敷地は女川湾を一望でき、ウミネコが羽を広げたような膜屋根を架けた施設を計画した。その下にたくさんの人々が集まる場としての思いを込めている。

町民だけでなく、日本各地からもここに来てもらいたいと思い、日本画家の千住博氏とデザイナーの水戸岡鋭治氏に協力を仰いだ。脱衣所には、千住氏が描いた樹形に、公募した花をレイアウトした。浴室には、千住氏に富士山や鹿の絵をタイルに描いていただき、贅沢な空間に仕上がった。千住氏から富士の絵が届いた時には、富士の山頂から裾野へと広がるグラデーションの美しさに取り込まれたが、その微妙な色合いをタイルで再現するために繰り返し何度も色の調整が行われた。

「ゆぼっぼ」と女川駅は2015年3月21日にオープンを迎えたが、周囲にはまだ何も無い状態だ。多くの人に女川まで来ていただき、湯船に浸かるひとときを楽しんでいただきたい。そして、ここからまちがどう変わっていくのかも合わせて見届けていただきたい。

NPO法人みなとまちセラミカ工房
代表 阿部鳴美

「みなとまちセラミカ工房」は、震災前に陶芸サークルで活動していた仲間が立ち上げたスペインタイルの工房です。スペインの材料と技法を使って、一枚一枚手描きで色付けをしています。震災から半年後、陶芸クラブの活動再開を模索し動き出した時に、建築家の坂茂氏と当時京都造形芸術大学学長だった千住博氏に会い、千住氏から「皆さんのものづくりのために、学校から窯を寄贈しましょう」とご提案いただいたのが2011年12月。「色を失くした街を、スペインタイルで彩る」という夢をかなえるための第一歩でした。ご縁が続き、今回の歴史に残るタイル画の制作に至っていることに、心から感謝しております。花の絵には、女川の未来への希望が込められており、そ



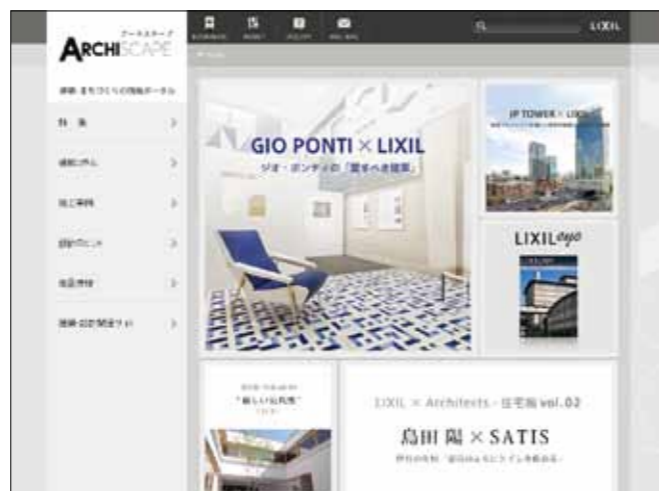
12 浴室内タイルアート「霊峰富士」と「泉と鹿」
13 洗面室タイルアート「花の杜」
14 浴室内タイルアート「泉と鹿」
【写真12-14：梶原敏英】

の絵を一枚一枚、心を込めて転写させていただきました。作業に携われたことを大変光栄に思います。被災地に心を寄せて下さる皆さまに感謝し、これからもタイル制作に励んでまいります。

建築・まちづくりの情報ポータルサイト「アーキスケープ」のご案内

<http://archiscape.lixil.co.jp/>

LIXILのWEBサイト「アーキスケープ」のご案内です。「アーキスケープ」は建築やまちづくりに携わる専門家の方々のための情報ポータルサイトで、特集・連載コラム・施工事例などを紹介しています。特集では、最新の建築事例や話題のプロジェクトを取り上げ、その背景を詳しく解説するとともに、そこで使われた技術・製品をご紹介します。また連載コラムでは、LIXIL商品の施工事例をご紹介します。新しい表現や建築、まちづくりの魅力を探っていきます。一方、興味のあるカテゴリーを登録することによって、最適な記事を表示するコンシェルジュ機能や、関連記事をすぐに参照できるレコメンドも搭載しています。LIXILの企業情報誌「LIXIL eye」のバックナンバーはすべてPDFデータでご覧いただけます。LIXIL独自の豊富な情報をタイムリーにお届けするWEBサイト「アーキスケープ」を、ぜひご利用ください。
<http://archiscape.lixil.co.jp/>



施工事例 index

<http://archiscape.lixil.co.jp/pickup/>

金沢駅前西口広場

金沢の玄関口にふさわしい機能と都市景観を備えた駅前広場が誕生しました。駅舎に平行して張られたストライプ状の6色の大形タイルは、「水と緑と空 日本海に開く時間と自然の空間デザイン」をイメージしたものです。歩行空間に沿って周囲を四季折々の植栽で彩り、全体としてストーリーを感じさせる、心とむ広場空間になっています。



■ 建築概要 ■

所在地：石川県金沢市広岡1 | 工期：2010.3-2014.3 | 設計：国土開発センター | 施工：大三建設

金沢百番街あんと

北陸新幹線の開通に合わせ、駅直結型の商業施設がリニューアルされました。この施設は金沢の特産品が一堂に会する名店街で、古都・金沢の伝統的なまち並みが表現されています。客用トイレは窯変ポータータイルが「和」の雰囲気を出し、清潔で落ち着いた豊かな空間となっています。男女ともに、広めのブース内に幼児用の大便器と小便器が併設されているなど、幼児連れやファミリーにも配慮した設備が整えられています。



■ 建築概要 ■

所在地：石川県金沢市木ノ新保町1-1 | 工期：2014.1-7 | 設計：ジェイアール西日本コンサルタンツ・プランテック総合計画事務所 | 施工：大鉄工業

伊勢原市役所

伊勢原市役所のアプローチ部分が、バリアフリー化のため改修されました。庁舎を訪れる、さまざまな人が安心して使えるよう、階段、スロープの両側に、手すりとして2段タイプのサポートレールが設置されています。



■ 建築概要 ■

所在地：神奈川県伊勢原市田中348 | 施主：伊勢原市

芳賀地区エコステーション

芳賀地区エコステーションは、1市4町が連携した熱回収・リサイクル施設です。ゴミを適正に処理するとともに、自然とのふれあいゾーンや環境に関する学習・啓発を通して、「循環型社会」の形成を目指しています。大型車両が入る正面には、ノンレールの引き戸が採用されています。両引き分けにより、12mの大きな開口を実現しました。



■ 建築概要 ■

所在地：栃木県真岡市堀内1839 | 施主：芳賀地区広域行政事務組合

LIXILからのご案内

LIXIL商品が「レッドドット・デザイン賞 プロダクトデザイン2015」を受賞



左からキッチン用タッチレス水栓ナビッシュ（浄水器専用ビルトイン型）、熱湯用単水栓、オートマージュ（グースネックタイプ）

「レッドドット・デザイン賞」はドイツのノルトライン・ヴェストファーレン・デザインセンターが主催する国際的なデザイン賞で、ドイツの「iFデザイン賞」、アメリカの「IDEA賞」と並ぶ世界3大デザイン賞のひとつです。革新性、機能性、人間工学、耐久性、環境対応など9つの基準で審査が行われ、今年度は世界56か国から4,928点の応募があり、下記3商品が受賞となりました。

■ キッチン用タッチレス水栓ナビッシュ（浄水器専用ビルトイン型）吐水口先端のセンサーに手をかざすと吐水・止水ができる、キッチン用浄水器専用水栓です。センサーを内蔵しながらもスリムでスッキリとした形状は、さまざまなキッチンにノイズなく調和します。

■ 熱湯用単水栓 SF-WCH120

オフィスキッチン向けの熱湯用単水栓です。先端の操作ハンドルは無駄な出っ張りを省き、不意な行為による誤作動も防ぎます。シンプルで一本ラインのデザインは意匠性を求められるオフィスプランに最適です。

■ オートマージュ（グースネックタイプ）

吐水口の先端に手を差し出すだけで水が出る自動水栓です。吐水の水流エネルギーで発電する機能を備えたアクエナジー仕様は、電源への接続が不要で、停電時も安心です。



LIXIL出版 新刊案内

<http://www1.lixil.co.jp/publish/>



LIXIL BOOKLET
「金沢の町家 活きている家作職人の技」
執筆：安藤邦廣、瀬戸山玄ほか
定価：1,800円 [税別、好評発売中]



「アゲインスト・リテラシー | グラフィティ文化論」
執筆：大山エンリコイサム
定価：2,700円 [税別、好評発売中]



「長谷川豪 カンパセッションズ
——ヨーロッパ建築家と考える現在と歴史」
執筆：長谷川豪ほか
定価：3,000円 [税別、好評発売中]

10+1 WEB SITE <http://10plus1.jp/>

建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

ギャラリー＋イベント

<http://www1.lixil.co.jp/culture/>

LIXILギャラリー | 東京

巡回企画展

金沢の町家——活きている家作職人の技展
会期：開催中、8月22日 [土]まで
建築における伝統技術がいかに保存・継承されているか。その実例を金沢の町家から探ります。



旧涌波家住宅：明治期に増築された2階部分 [撮影：尾鷲陽介]

建築・美術展

「クリエイションの未来展 第4回」
伊東豊雄展——ライフスタイルを変えよう 大三島を日本で一番住みたい島にするために
会期：開催中、8月22日 [土]まで
2011年の「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」の開館以来、訪れる人を魅了してきた瀬戸内海芸予諸島の中心に位置する大三島を舞台に、これからのライフスタイルモデルを提案します。伊東氏が今後10年をかけて取り組む、日本の伝統文化の記憶をよみがえらせる暮らしの試みです。



[撮影：Kai Nakamura]

LIXILギャラリー | 大阪

巡回企画展

鉄道遺構・再発見
会期：開催中、8月18日 [火]まで
廃線路になった後も新たな価値を付加された鉄道遺構14件を厳選し、豊富な写真で紹介いたします。



土幌線・第四首更川橋梁 [撮影：西山芳一]

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと生活文化をつなぐ企画展

大地の赤——ベンガラ異空間展
会期：開催中、9月6日 [日]まで
会場：「土・どろんどろん」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
木造建築の格子や軒先を彩り、高級磁器の絵付けにも使われた赤い着色剤「ベンガラ」は、古来身近な存在ながらその素性はあまり知られていません。歴史と製造方法を見ながら、非日常の世界へ誘う魅力をひもときます。



■ LIXILギャラリー | 東京

所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL: GINZA 2階
Tel: 03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日、8月12-16日

■ LIXILギャラリー | 大阪

所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel: 06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日、8月12-16日

■ INAXライブミュージアム

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)
共通入館料：一般：600円、
高・大学生：400円、
小・中学生：200円

壁沿いに歩くと、わずかな起伏が同じように気持ちよかったです。展示物が多く、遠くからはこのたわみは分かりにくかった。建築家の学生に声を掛けられたので「このわずかな曲線をどう感じる？」と聞いてみたが、あまり感じないらしかった。安易な直線を選ばないで施工の難しいこの曲面を選んで、このデリケートな空間性は人々にどのくらい感じ取ってもらえているのかも思ったものだ。

また西沢さんと今一緒にJIA賞の審査をやっていますが、昨年は三人で二対一に意見が分かれることが多く、私は自分の考えが通らず難しさを感じるばかりでした。そのことで全力で完成させた仕事でも賛否両論が起こるのは当然だと感じさせられました。ですから建築家の作品を評価するのは難しいことになる想定していましたが、今年のJIA賞は

一度の投票で、五人全員一致で大賞が決まったことには驚きました。全体の中で大賞にふさわしい内容を持っているというところでしよう。特にプログラムづくりやローカリティの導入が評価されたのではないでしょう。

このごろ建築を見てみると、既存の都市環境や社会制度に立ち向かってソフトプログラムを優先した建築家が多く、その先の空間をつくることに消極的になっている。一週間前に大学のディプロマを審査した時も多くがソフトづくりのレベルで終わっていた。

一方で、近年の国内のコンペでは、要綱で示された地元の人たちの公共空間としてのプログラムや建設費用を踏まえた提案よりも、グローバルに通じるオブジェかアイコンのような提案が、コストや公共性や市民の意見とは無関係に選ば

れるケースを散見する。建築のコンペは、審査員次第とあってしまえばそれまでだが、建築をめぐる活動がプログラムとオブジェやアイコンの二極に分化化していつているように見える。

近年、経験を通して共感できる評論家を見出すのも難しくなっているように思います。建築に対する共通感覚も失われつつあって、人々が求めるような、積極的に人間に関われる空間をつくらせているのだろうか。心配になります。二十一世紀に入って十五年経ちましたが、新しい世紀にふさわしい建築はつくられつつあるのだろうか。ぜひ西沢さんの今日的建築批評を伺いたいものです。

二〇一五年四月二〇日

長谷川逸子様

菊竹（清訓）さんの建築を以前見て回って、どれもすごいと思いましたが、一番感銘を受けたのはスカイハウスでした。簡潔で、力強く、火のような勢いで

建築を組み立ててゆくその迫力に圧倒されました。空中に持ち上げられた姿はまるで、今の制度を超越する意志そのもののように見えました。時間を越えた「かた」を目指すという菊竹さんの姿勢も、たいへん示唆的だと思います。

「近年、建築に対する共通感覚も失われつつある」「積極的に人間に関われる空間をつくらせているのだろうか」という

した。僕は道元のその言葉に、時間と空間が一体化したような認識を感じて、感銘を受けました。旅行をしていると、地域固有の時空間のようなものを感じることもあります。中国やインド、アラブ、ペルシャ、ヨーロッパ、もしくは日本の田舎に行くと、彼ら独自の世界に入らるかに思うのは、地域というのは時間と空間が独自の形で一体化していて、それが彼らの文化や歴史になっているということです。

ループル・ランスの曲線は確かに、見た目わかりづらいと思います。曲線は平面だけでなく断面的にも起きていて、丘の起伏に沿って建築が傾斜しています。敷地を真っ平らに造成して平らな建物を置くのではなく、もう少し有機的なもの、土地と建築の有機的な関係を目指したのだと思います。ただそれらは地形スケールの曲率なので、ほとんど目立ちません。それは、丘を歩いてもあまりその曲線を感じないのに近いかもしれません。土地と建築の関係に限らず、「有機的な関係」は僕らが興味を持って建築で取り組もうとしている課題のひとつです。しかしそれも、さまざまな分野で「有機的なもの」「生命的なもの」は共通の課題になっているようにも思います。

ループル・ランスの常設展示室は「タイム・ギャラリー」という名前で、紀元

前三五〇〇年から一九世紀半ばまでの各時代の作品群が、時間軸に沿って展示されています。部屋の壁が年表になっていて、よく見ると、年表の目盛り間隔が均質ではなく、ムラがあることに気づかされます。作品が量産された世紀と、ほほ何も生まれなかった世紀とがあるのです。それは等分割された機械的な時間というより、有機的な脈動のようなものを感じられます。その年表を見るたびに、人間にとって各世紀は本当に同じ長さだったのだろうか？ と思ったりします。子供の時間と大人の時間とは、時間の密度や早さが違って感じられるように、不作の百年と多産な百年とは、時間の経験が違うのであろうかと、または四季が豊かで台風が毎週のように通り過ぎるアジアモンスーン地帯で育つのと、一年じゅう気候が変わらない砂漠で育つのでは、時間感覚の違う人間が出てくるのではないかと、などと思ったりもします。

建築も街も住むものだから、時間的な存在だというのは当たり前前のことで、時間も歴史も地域も、ポストモダンニズムの大きな議題でした。それは今、再び僕らの問題として蘇ってきているように感じます。今後はより多次元的で有機的な時空間、関係性、もしくは地域固有の時空間といったことを、人々は

長谷川さんのお言葉は、僕も非常に近い感覚を持って拝読しました。他方で共通感覚的なものを探すなら、二十一世紀になって以降、または東日本大震災以降、時間、歴史、地域ということが、ある大きな課題、皆が考える共通の問題になってきているように感じています。以前、原広司さんから、道元の「山は時なり」という言葉を教えて頂いたことがあります。

ますます想像するようになるのではないかと、期待しています。以前、長谷川さんは第二の自然と言われましたが、それも新しい時代の共通認識を促す言葉であるように、僕には感じられます。昨今の、人間と機械のつきあい方、自然と人工の関係性などを考えても、長谷川さんが指摘された人間と機械の対立を超えた世界は、今多くの人が日々の生活で感じているのではないかと、思います。

二〇一五年五月一三日



ループル・ランスの常設展示室「タイム・ギャラリー」

西沢清訓

にしざわ・りゅうえー建築家・横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授／1966年生まれ。1990年、横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。1995年、妹島和世とSANAA設立。1997年、西沢立衛建築設計事務所設立。主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、森山邸[2005]※、ROLEXラーニングセンター[2009]、豊島美術館[2010]※、ループル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

長谷川逸子

はせがわ・いつこー建築家／菊竹清訓建築設計事務所勤務、東京工業大学篠原一男研究室を経て、1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立、主宰。早稲田大学、東京工業大学、九州大学などの非常勤講師、米国ハーバード大学の客員教授などを務め、1997年、王立英国建築協会名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位。2006年、アメリカ建築家協会名誉会員。主な作品：大島町絵本館[1994]、新潟市民芸術文化会館[1998]、珠州市多目的ホール[2006]、ふじのくに千本松フォーラム[2013]など。

ルーブル・ランスは

土地と建築の有機的關係を目指した

西沢立衛様

前回西沢さんは、自分が求めているのは時間や用途を超えてある「Building Typology」だとお書きになった。それを読んで、菊竹（清訓）さんの「空間は機能を捨てる」という言葉を思い出しました。菊竹さんはまさに時間を超えてある「かた」を求め、様々な機能を包含できる空間性をつくるために格闘していました。それは単なる類型というのではなく、仏教の中空構造の思想に近いものだったように思いますが、「かた」という言葉は、西沢さんの「Building Typology」と重なり合う部分がありますね。

一昨年のベニスビエンナーレのイギリ

スの課題が「一人の人物を取り上げて深く掘り下げる」というもので、イギリスで活躍する建築家のチームが私の公共建築を取り上げて熱心に研究してコンペを獲得した。その成果を讃えてRIBAは私をロンドンRIBAのレクチャーに招待してくださいました。その機会を利用してルーブル・ランスを見学したいと西沢さんをお願いした。ロンドンからTGVに乗ってリール駅に行き、SANAの北澤伸浩さんに迎えてもらいました。私がルーブル・ランスで一歩楽しみにしていたのは、平面図で微妙にゆがむ曲面の様子を体験することでした。木造住宅を設計していたころ、左官職人が糸を張って墨出しをして長い壁を塗った時、たわんで曲面が出来てしまったような微妙なゆがみの壁に光が流れて、真つすぐな長い線より、美しいと思ったことがある。長い直線を真つす

ぐつくる技術はもはや難しくないが、SANAの平面がどう立ち上がっているのか知りたかった。

緩やかなアンジュレーションのある地面にスーと立つ白いアルミの柔らかな外壁に沿って歩いたり、遠くに離れて眺めて下りたりしていると、木々の陰影が映り込んで影が動き消失してゆく不思議さを見た。ほのかなたわみと空気の流れを感じる気持よさがありました。内部の



ロンドン到着初日：レンゾ・ピアノの超高層ビル見学

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。